

東方黒龍記　～守りた
い者達～

黄昏の月人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不慮の事故によって幻想入りをした主人公、龍導院 静也。

彼はこの不思議な世界で何を思い、何を守るのだろうか。

これは、一人の心優しき少年と彼を取り巻く少女達との物語である。

「僕は決めたんだ、必ず守ると」

処女作ですが、楽しんでいただけると幸いです。

目次

第1章 幻想との出会い

第1話	誘われた者	1
第2話	始まりの出会い	6
第3話	心の声	15
第4話	対峙するは普通の魔法使い	20
第5話	新たなる誘い	25
第6話	白髪の剣士	31
第7話	再会	39
第8話	宵闇との邂逅	48
第9話	道具屋ともう一つの瞳	54

第10話	その者の名は、守龍なり	65
------	-------------	----

第2章 黒霧の変

第1話	龍を継ぐもの	78
第2話	人里での出会い	86
第3話	幼き思い	92
第4話	氷精との遊び	100
第5話	覚醒への序章	105
第6話	赤き門番	113
第7話	七曜の魔女	119
第8話	黒龍の翼	125
第9話	銀のナイフと煌めきの長槍	132

第20話	幼き吸血鬼たち	138
第21話	地に墜ちし龍	143
第22話	黒き龍帝	148
第23話	龍王の加護	153
第24話	漆黒の統治者	160
第25話	幼き吸血鬼の思い	168
第26話	決意の理由	178
第27話	全ては貴方のために	
185		
第28話	桃色と紅	189
第29話	少女達の邂逅	194
第30話	示すべき証	198
第31話	龍眼の弓兵	208

第32話	認められぬ思い	218
第3章	求めるということ、求められる ということ	
第33話	道標と不穩	222
第34話	勇気と無謀	225
第35話	謎の戸惑い	233
第36話	黒き龍の咆哮	237
第37話	竹林の中の出会い	242
第38話	竹林の賢者	248
第39話	月の姫の戯れ	256
第40話	龍と兎の跳舞	260
第41話	赤き幻惑と一筋の煌めき	267

	第42話	賢者の責任	—	273
	第43話	感謝と決意	—	280
	第44話	龍の心に触れる者	—	288
	閑話	龍を綴る書	—	294
	第4章	風のたどり着く場所		
	第45話	黒き羽のもたらすもの		304
	第46話	奇跡という名の必然		310
	第47話	龍を愛せし静風	—	317

第1章 幻想との出会い

第1話 誘われた者

「うっ……!」

目蓋の裏に強い光を感じて、僕は目を覚ました。

上半身を起こして辺りを見渡してみると、ここが森の中だということが分かった。そして僕は、最も重要なことに気づいた。

(僕は、誰だ?)

思い出せないのだ。

自分はどこに住んでいたのか、家族や友人はいたのか、どうしてここにいるのか、何一つ思い出せない。僕は自分の恰好を見下ろした。

黒色のズボンに白のカッターシャツ、それに黒色のブレザーと赤のネクタイを着ている。

何かないかと服を探ってみると、上着の内ポケットから生徒手帳がでてきた。

中は白紙だったけど、裏表紙に顔写真と名前が書いてあった。

「りゅうどういんしずや龍導院 静也、それが僕の名前?」

他にも探したけど、結局見つかったのはこれだけだった。

まあ、自分の名前が分かっただけでも良しとするか。

「これからどうしよう？まあ、ここで考えていても始まらないし、ひとまず進んで見るか」

そう呟いて、僕は歩き始め。

私はいつものように神社の縁側に座ってお茶を飲んでいる。

いつもなら心休まる一時なんだけど、何故だか今日は胸騒ぎがする。

「おーい、霊夢！」

聞き慣れた声に顔を上げると、空から魔理沙が飛んできていた。

「よう霊夢、お茶しに来てやったぜ」

「はあ、たまにはあんたもお茶菓子のひとつでも持ってきたら？」

「それは無理だぜ！」

清々しいまでの笑顔でそう言う魔理沙。

そうしている間も、私の「勘」は何かがあると囁きつづけている。

「うーん、すごい田舎だな」

体感だから正確には分からないけど、たぶん歩き始めて30分はたったと思う。

それなのに森は出られるどころか全く変わらな景色がつづいてる。

そのせいで方向感覚がおかしくなってしまうそうだ。

日が暮れるまでには町に出たいな。

交番にでもいけば僕の事も何か分かるかもしれないし。

正直野宿はしたくないんだけど、この様子だと覚悟はしておいた方がいいかも。

ガサツ

考え事をしながら歩いていると、不意に前の茂みが揺れた。

もしかしたら熊かもしれないと目を凝らしてみると、奥に見えたのは人影だった。

よかった、これで街の場所を聞けるし、運が良ければ連れて行ってくれるかもしれない。

い。

その時の僕は記憶がない不安に加えて今まで一人だったせいでもなんの警戒もなくその人影に近づいた。

「すみませーん。道に迷ってしまったんですが、街の場所を教えてくださいませんか？」

それがいけなかった。

僕の声に反応して人影がこちらにやってくる。

その人影を見た瞬間、僕は息をのんだ。

「男か。本当は女が良かったんだが、まあ良いだろう」

確かにそれは人の形をしていた。

けれどそれだけだ。

動物から毛をすべて取ったかのような肌に窪んだ瞳、そして鋭い爪。

それは化け物と呼ぶのに十分なものだった。

その化け物が僕に向かって一歩を踏み出す。

そこでようやく僕は体の硬直から抜け出した。

「う、うわあああ!!」

後ろに向かって全力で走る。

背後を見なくても、僕を追いかける足音が聞こえる。

「なに、なんなのあれ!？」

何も変わらないとは分かっているけど、叫ばずにはいられない。

あんな物があるなんて聞いてない!!

懸命に走るけど、足音はどんどん近づいてくる。

このままだと追いつかれる。

どうする、どうすえばいい!?!この距離だと隠れることもできないし、戦うのなんての

は論外だ!!

焦りのせいでろくに足元が見えてなかった。

僕は地面から出ていた木の根に足を取られてころんでしまった。

すぐに立ち上がったけど、とうとう追いつかれてしまった。

「グワアアア!!」

「くっっ!」

振り下ろされた右の爪を何とか躲したけど、続けて左の拳がとんできた。

これは避けられない!

腕を交差させてガードしたけど、凄まじい衝撃を受けて吹き飛ばされ、背中から木に叩きつけられた。

(こんな所で・・・死ぬ・・・のか)

薄れゆく意識の中で怪物の近づく気配を感じる。

記憶がないせいで後悔もできない。

「ん?なんだお前、どこから・・・!!?なんだ、この膨大な妖力は!まさかお前、賢者の!?!」
「少しおいたが過ぎたようね。眠りなさい」

「やめろ、ぐあああ!!」

その声を最後に、僕の意識は途絶えた。

第2話 始まりの出会い

「なあ霊夢、さつきからポーつとしてるけどなんかあつたのか？」

魔理沙にお茶を出した後、私もその横に座って同じように飲んでいたら魔理沙がそう聞いてきた。

いつも通りにしてるつもりだったんだけど、やっぱり魔理沙に隠し事は無理ね。

「さきつから何かが起きそうな気がするのよね」

「それは『勘』か？」

「ええ、『勘』よ」

「そっか。じゃあなんか起きるんだな。はあ、面倒事はごめんだぜ」

私も面倒事は嫌だけど、なんだか今回はそれだけじゃない気がする。

『楽しそうね、私も混ぜてくれないかしら』

どこからかそんな声がして、目の前で開く『スキマ』そこから出てくるのは一人しかない。

「うお、紫!？」

「出たわね、スキマ妖怪」

「そんなに嫌そうにしないでいいじゃない霊夢。いくら私でも悲しいわ」
「はあ、何しに来たわけ紫？内容によってはシバクわよ」

私がそう言うと、紫は自分の手元に小さなスキマを開いて懐から何かを取り出した。よく見てみるとそれは小銭だった。

本当に何をする気かしら？

紫が小銭をスキマに落とす。

すると神社の表から小銭の音がした。

「今の音、まさか!？」

「賽銭したのか、あの紫が!？」

思わず大声を出す私と魔理沙。

「霊夢、これを踏まえたうえであなたにお願いがあるの。いいかしら?」

そうやって私を見る紫の目はいつにもまして真剣だった。

「いいわ、聞いてあげる」

「う……は?」

目を覚ますと、僕は布団に寝かされていた。

辺りを見渡してみると、畳張りの和室だった。

誰が助けてくれたんだろう？

なんか最後に賢者って聞こえた気がしたんだけど、まさかね。
そんなRPGじゃあるまいし。

「あら、起きたのね」

その声に顔を上げてみると、一人の女の子がふすまを開けて立っていた。

黒い長髪をリボンでまとめ、紅白の巫女服を着た女の子だ。

でも、どうして腋の部分が開いてるの？

最近の神社ってそういうスタイルなの？

いろいろ疑問に思ったけど、まずはあいさつしないと。

「ありがとうございます。あなたが助けてくれたんですか？」

「ううん、私じゃないわ。そのことも含めて話があるんだけど、立てる？」

「はい、大丈夫です」

「ならついてきてちょうだい」

「わかりました」

僕は布団から立ち上がって先に歩き始めた女の子の後をついていく。

廊下に出てすぐに分かったけど、やっぱりここは神社だ。

あの子が巫女服を着ていたからそうだろうとは思ってたけど。

女の子が案内したのは神社の表に近い縁側で、そこには他にもあと二人の人物がいた。

一人は長い金髪に日傘を差している女の子。

もう一人は同じ金髪に黒と白のどんがり帽子をかぶった女の子だ。

「お、やつと目を覚ましたようだな」

「まずは自己紹介をしましょうか。私は八雲 紫。この幻想郷の管理人をしているわ」

「幻想郷？」

「幻想郷は忘れ去られた者が集う場所。ここでは人間や妖怪、他にもたくさん種族が共存しているわ。そこに、あなたは外の世界から落ちたの」

「え!? いや僕は、異世界にきてしまったのですか!？」

僕の言葉にうなづく紫さん。

まさかそんなことになっていたなんて。

ということとは、さつき僕を襲ったのは妖怪だったのか。

「で、あんたの名前は？」

僕が戸惑っていると、巫女の女の子が聞いてきた。

「僕? 僕は龍導院 静也。たぶん・・・」

普通自分の名前を聞かれてたぶんなんて言う人いないよね。

でも、僕にはこうするしか・・・

「お前、記憶がないんだってな」

「!? どうしてそれを・・・」

「ごめんなさい、それは私のせいなの」

「え? どういう意味ですか?」

「私の能力は『境界を操る程度の能力』。でも今この力とても不安定になっているの。」

そのせいであなたをここに落としてしまつて、その時に記憶の境界もいじつてしまつたの

「ごめんなさい」

そう言つて頭を下げる紫さん。紫さんとは初対面だけど、その物腰からめつたに頭を下げない人だというのは分かる。

「頭を上げてください! 確かに記憶がないのは不安ですけど、こうして生きていますし、自分の名前が分かればそれで充分です」

「そう、ありがとう。でもそれでは私の気が済まないの。」

だから近々、あなたに関係の深い人物を連れてくるは。

もちろん、相手の同意を得たうえでね。

少しでも早く、静也の記憶が戻るように」

「はい、お願いします」

「それと、あなたの荷物は別の場所に落ちていたから、拾っておいたわ」
紫さんがそう言うのと、その横に変な裂け目みたいなのが現れた。

そしてそこから通学鞆が出てきた。

今のが境界なのかな？

「わざわざ見つけてきてくれて、ありがとうございます」

「いいえ。それじゃあ私はこっちに連れてくる人物を探すから行くわね。」

霊夢、後は頼んだわよ」

「わかったわ」

巫女の娘にそう言うのと、紫さんはさっきと同じ裂け目の中に入っていった。

「よし、次は私の番だな。私は霧雨 魔理沙。普通の魔法使いだぜ！」

「普通の魔法使い？普通じゃない魔法使いの方が多いつてこと？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。私は魔法が使えるけど、種族としては人間なんだ。」

だから普通の魔法使いなんだ」

「なるほど、そういう意味なんだ」

「博麗の巫女、博麗 霊夢よ。よろしく」

「霧雨さんと博麗さんだね。うん、覚えた」

「名字じゃなくて名前で呼んでくれ。あとさんずけもなしだぜ」

「私もそうしてちょうだい。というか、この幻想郷では名前呼びが普通だから、これからはそうしなさい」

「わかったよ。霊夢、魔理沙」

「それでいいわ。それとあんたはしばらく家で預かることになったから。

家事とか色々手伝ってもらおうよ」

「もちろんだよ。居候させてもらえるだけでもありがたい」

「あと、この幻想郷で暮らしていくんならもう一つ大事なものがあるぜ。

弾幕ごっこだー！」

「弾幕ごっこ?」

「ああ。弾幕ごっこっていうのはな．．．魔法使い説明中」

「なるほど。弾幕とスペルカード、そして能力か。それじゃあ二人とも何かの能力を持つてるの?」

「もちろん。私は『魔法を使える程度の能力』だぜ」

「私は『空を飛べる程度の能力』よ」

「空、飛べるんだ!?!」

「と言つても、ここに居る奴らはだいたい飛べるんだけどな。」

もちろん私もだぜ」

「それなら意味ないんじゃない？」

「私の能力は言葉通りの意味だけじゃなくて、事象も含めるのよ」

「つまり、あらゆるしがらみから浮くことができるってこと？」

僕の言葉にうなずく霊夢。

すごいな。

人は常に何かしらかのしがらみを受けている。

そのせいで100%の実力を出せる人は少ない。

できたとしてもほんのわずかな時間で、むしろ動きを鈍らせてしまうことの方が多

い。

さっきの僕の恐怖がいい例だ。

でもそれから浮けるってことは、常に100%の力が出せると言うこと。

紫さんほどじゃないけど、ちよつとつよすぎない？

「能力か、僕にも有ったらよかったのに」

「あると思うわよ」

「え?・・・本当!?!」

「私は巫女だから分かるんだけど、静也から結構強い霊力を感じるのよね。」

これだけの霊力があるんだから、きっと能力もあるとおもうわよ。
まだ気づいていないだけで」

「どうやったら分かるの?」

「そうね・・・静也、ちよつとこつち向いてくれる?」

僕が体を霊夢の方に向けると、霊夢は僕の額の所に指を当てた。

「今から静也の意識を深層心理に送るは。」

そこにいる人に聞くのが一番速いと思う。準備はいい?」

「うん、いつでもいいよ」

霊夢が目を閉じると同時に、僕の意識が深いところに落ちていく感覚がして、目の前が暗くなっていった。

第3話 心の声

気が付くと、僕は真つ暗な空間にいた。

立っている感じはしないのに、浮いている感じもしない不思議な空間だ。

「お、来たか」

その声に振り返ってみると、そこにいたのは・・・

「僕？」

「そうさ。俺はお前、お前は俺だ」

そこに立っていたのは僕と全く同じ見た目の人物。

数秒考えて、納得した。

「もう一人の僕みたいなもの？」

「まあ似たようなもんだ。俺は表には出ないけどな」

そう言ってもう一人の僕は肩をすくめた。

「さて、早速だがお前の能力を教えるぞ」

「僕にもあるんだ、能力」

「そりやそうさ。能力がなければ俺はここにはいない。お前の能力はこれだ」

もう一人の僕の手が頭に触れた。

その瞬間、頭の中にイメージが広がった。

「今のは？今のが僕の能力？」

「そうだ。言葉で説明するより、こっちの方が速くて分かりやすいだろ」

「確かにそうだね。すごい、これが僕の能力なんだ・・・そうだ！もう一人の僕なら、失くしてしまった僕の記憶も知ってるんじゃない?！」

「悪いが、それはできない。俺はあくまでお前の心と霊夢の力が作り出した幻影のようなもの。お前が知っていること以上のことは、俺も知らないんだ」

「そっか、じゃあ仕方ないね」

「すまない」

「良いつて」

その時、頭上から光が差しきて、霊夢の声が聞こえてきた。

「どう静也、もう少しかかりそう?」

「ううん、もう大丈夫だよ」

「それなら意識をこっちに戻すわよ」

「お願い」

「じゃあな、向こうでもがんばれよ?俺?」

「うん。また機会があれば会おう？僕？」

入ってきた時とは逆の引つ張られるような感覚。

明るい光に目を開けてみると、目の前に霊夢と魔理沙の顔があった。

「どうだったかしら？」

「うん、僕にも能力はあったよ。」

僕の能力は？ 願いを叶える程度の能力？ だ」

「は、強すぎない（だぜ）!？」

僕も最初そう思ったから、二人の反応は面白いな。

「それって用は、何でもできるってことだろ。それじゃ紫とおんなじだぜ！」

「いや、そこまで万能ではないんだ。」

「どういうこと？」

「世の中の理を壊すような願いは叶えられないんだ。夜を昼に変えるとかね。それに質

量保存の法則や等価交換を無視することもできないんだ」

「ふーん……」

「は？ 質量保存？ 等価交換？ 何のことかさっぱりだぜ」

何かを考え始める霊夢と今にも頭から煙を出しそうな魔理沙。

うん、また一つ二人の事を知ることができたな。

「これからは魔理沙に難しい話をするのはよそう。

「つまり、常識の範囲内の願いしか叶えられず、何かを作ろうとすれば必ず材料がいるつて」と？」

「ご名答」

「なんだよ、だつたら最初からそういえばいいじゃないか」

「あんたが魔法以外の事は勉強しないのがいけないんでしょ」

「だつてそれ以外は必要ない知識だろ？つていうか、いつも修行をさぼってる霊夢には言われたくないぜ!!」

「私はないからいいのよ」

「なんだと!」

「なによ!」

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

「今にも弾幕を打ち出しそうなふたりをなだめると、しぶしぶといった感じで引き下がった。

「この二人は親友というより、悪友の方が近いのかもしれないな。

「まあそれはいいとしてだ。静也の能力も分かったことだし、さつそく弾幕ごっこしようぜ。そして私が勝ったら、そのかばんの中のものなんかくれ!」

「えく・・・」

正直なところ、他にも聞きたいことがいろいろあるんだけど、魔理沙のキラキラした笑顔を見ていると、断れなくなつた。

「仕方ないな。どのみち弾幕ごっこにも慣れないといけないみたいだしね」

「うっし！そうこなくつちやな」

「ひとまず、弾幕の打ち方とスペルカードの作り方を教えてほしいんだけど」
「それは私が教えてあげるわ」

こうして、僕の初めての弾幕ごっこが行われることになった。

第4話 対峙するは普通の魔法使い

霊夢から教えてもらって、何とか単純な弾幕は撃てるようになった。

けど、スペルカードだけはいくらやっても出来なかった。

霊夢から貰ったカードもいまだ白紙のまま。

なんでもスペルカードには自分の素質とイメージが合っていないといけないらしいから、僕の素質が分かるまではスペルカードはお預けになりそう。

「準備はいいか静也？初めてだからって手加減はしないで！」

「いや、少しは手加減してほしんだけど」

神社の表に移動して、僕と魔理沙は対峙している。

といつても、魔理沙は箒で空を飛んでいるのに対して、僕は地面にいますけどね。

「行くぜ！先手必勝!!」

魔理沙が高度を上げると同時に、その周囲に星形の弾幕が形成された。

「は？ちよつと待って、これを避けろって言うの!？」

魔理沙が展開した弾幕は僕の視界いっぱい広がっている。

確かに所々に避けられそうな隙間はあるけど、いくらなんでも無理でしょ!!

「これくらい普通だぜ！それ！」

魔理沙が右手を突き出すと同時に、無数の弾幕放たれた。

魔理沙、本当に手加減抜きね。

私は魔理沙が展開した弾幕を見てそう思った。

全力とまではいかないけど、実力分はしっかり出している。

これならすぐに終わりそうね。

魔理沙だって立派な異変解決者。

それがこの世界を知ってせいぜい1時間程度の外来人負けるはずがない。

いくら霊力が魔理沙の魔力を上回っていたとしてもだ

魔理沙の弾幕が静也に迫る。

この一撃で決まるかとも思ったけど、静也は体を投げ出して何とか安全圏内に体を滑り込ませた。

その後も続く第2射、第3射の弾幕もわずかな隙間滑り込んで回避。

自分に当たりそうなものだけを的確に弾幕で相殺させてる。

ふくん、結構やるじゃない。

「はは、やるじゃないか静也！本当に初めてか？」

「はあ、はあ、これ以上はきついな」

「次も行くぜ、これを避けられたら本物だ！」

そう言つて魔理沙は懐から一枚の紙を取り出して・・・まさか!?

「スペルカード！恋符『マスタースパーク』!!」

魔理沙の手から極大のレーザーが放たれる。

静也はとつさに大きく後方に飛んだけど・・・

「さすがにこれは無理!!」

静也は光の奔流に飲み込まれて吹き飛ばされ、地面に叩きつけられて動かなくなつた。

「静也!!」

私は急いで静也に駆け寄る。

気を失つてはいるけど、体に目立った外傷はなかった。

「やべ、もしかしてやりすぎたか？」

「当り前よ！スペルカードも持つてない相手になにマスパくらわせてるのよ！」

「ちゃんと手加減はしたぜ。ミニ八卦炉は使わなかっただろ」

「それでもスペルカードはやりすぎよ！」

「ううつ・・・」

静也がうめき声をあげながらゆっくりと目を開けた。

「静也、大丈夫？」

「まさか1日に2度も気絶する羽目になるとは思わなかったよ」

「静也、その・・・ごめんだぜ。さすがにマスパはやりすぎだったぜ」

「うん、大丈夫だよ。気にしてないから」

さすがに悪いと思ったのか、素直に頭を下げる魔理沙を、静也は笑って許した。

「それじゃあ、そろそろお昼にしましょう。どうせあんたも食べていくんでしょ、魔理沙」

「もちろんだぜ！」

「待って、霊夢」

「どうしたの静也？」

「ごほんなら、僕に作らせてくれないかな？自分に何ができて、何が出来ないのかを把握しておきたいんだ」

「そうね。それならそうしてちょうだい。魔理沙もそれでいいわよね？」

「食べれるのなら何でもいいぜ」

「ありがとう」

「台所の場所は分かる？」

「大丈夫、分かるよ」

そう言つて静也は神社の中に入っていったから、私も魔理沙と一緒に居間に向かう。

その道中、私は考えた。

確かに弾幕ごっこは素人だったけど、他の動きはそうじゃなかった。

あれは明らかに何かの武術していた者の動き、それもかなり手練れね。

静也、あなたは外でどんな生活をしていたの？

第5話 新たなる誘い

「静也のやつ、どこ行っちゃまったんだ？」

学校からの帰り道、俺は何度目になるかわからないつぶやきをもらした。

俺の親友である龍導院 静也が、昨日家に帰らなかった。

電話はかけたし、あいつが行きそうなところも探したが、見つからなかった。

家出ともとれるかもしれないが、あいつに限ってそんなことはあり得ない。

何かに巻き込まれたんだろうが、あいつをどうこうできる奴なんてそうそういないとも思うが……

その時、ふと誰かに見られているような気がした。

いそいで周囲を見渡してみるが、人影も気配もない。

「気のせいかな。少し考えすぎだな」

そう呟いて気を抜いた次の瞬間、足元の地面が消えた。

「……は？うああああ!!」

当然俺はその穴に落ちた。

途中で落下は止まったが、そこら中に目が合っただちらを見ている。

「なんだここ?!? 気持ちわる!!」

「あなたが篠宮しのみや 真ねまこと?」

「・・・っ?!? 気配を感じなかった!?

その声に振り返ってみると、金髪で変わった服を着た女が立っていた。

だが俺はその女が普通の人間じゃないことにすぐに気が付いた。

「初めまして。私は八雲 紫よ」

物の怪の類か?

人外との戦いは静也の家の専門だ。素手で勝てるか?

「そう身構えなくても、危害を加えるつもりはないわ」

嘘くせえな、なんか雰囲気も胡散臭いし。

「こんな変なところに落としてきたやつと言葉を信用しろと? それともなんだ、俺を納得させるようなものを持つてるのか?」

「ええ、もちろん。私は龍導院 静也の居場所を知っているわ」

「なんだって!?! 本当か!?!」

「彼は今、幻想郷にいるわ」

「幻想郷? どこだそこ?」

「幻想郷、それはく賢者説明中くだからあなたに来てもらいたいの。静也の記憶を呼び

覚ますために」

「静也が記憶喪失に。それならすぐに行ってやらないと。けどどうして俺なんだ？俺じゃなくとも、静也の両親や愛花なら喜んで行くだろ」

龍導院 愛花、あいか静也よりも二つ年下の妹。

ついでに言っておくと、重度のブラコンだ。静也が行方不明になって発狂しかけてるからな。

「理由は3つ。1つ目は外の世界の常識に染まっている大人を幻想郷に連れていくことはできないの。幻想郷は忘れ去られたものが集う場所だから。

2つ目は愛花よりもあなたの方が強いから。妖怪の中には人を襲うものもいるわ。幻想郷はこの世界以上に死と隣り合わせなの」

なるほどな。愛花だって立派な龍導流の使い手。そこら辺の大人になら、楽に勝てる。

だが俺や静也よりは一步劣る。

武術を習ってきた年数が違うのだから、当然と言えば当然だがな。

「そして3つ目はあなたの能力。これが一番大きな理由ね」

「能力？俺にも能力があるのか？」

「ええ。あなたの能力は・・・程度の能力よ」

「な!?それは本当か!？」

俺の言葉に、紫は静かにうなづく。

すげえな。使いようによつては相当強力な能力だぞ。

それなら、静也の記憶を戻すこともできる。

「それで、行つてくれるかしら?」

「行く。送つてくれ」

俺は一瞬も迷わなかった。

静也が幻想郷にいて、困っているんなら助けに行くのは当然のことだ。

あいつには今まで数えきれないくらい世話になつたし、あいつは小さいころからの親友だ。

あいつを見捨てるなんてありえない。

たとえそこが、異世界だつたとしてもだ。

「そう、ありがとう。幻想郷に行く前によつて行きたいところはあるかしら?あまり長くは待てないけど、送るわ」

「なら、静也の部屋に送つてくれ。あいつに渡さないといけないものがある」

「わかつたわ。荷物を持つたらそのままスキマに入りなさい。幻想郷につなげておくわ。けれどさつきも言つたように、この力は今とても不安定。幻想郷のどこに出るかま

ではわからない。だから向こうについたらじつとしてちようдай。私が迎えに行くから」

「わかった」

俺がそう答えると、目の前に新しいスキマができた。

ゆつくりとその中に入ると、確かに静也の部屋に出た。

俺と静也は互いの部屋を何度も行き来した。

部屋のどこに何があるのかはだいたい理解してる。

俺はなるべく音をたてないようにしながらふすまを開けて、中から布に包まれている細長いものを取り出す。

もしこの場面を愛花にでも見られた行くと云つてきかないだろうからな。

何とかそれを取り出して背中からう。

他にも何か持っていこうか迷つたが、結局他には何も持たずもう一度スキマの中に入ろうとする。

その時、静也の棚に荷物が当たって上から目覚まし時計が落ちてきた。

「やっべー!!」

静也の部屋があるのは二階、そして静也の部屋の隣にあるのは愛花の部屋。

今のあいつはいつも以上に神経質になつてるから当然・・・

「お兄ちゃん!？」

やっぱり気づくよな! 急げ!

俺は大慌てでスキマの中に飛び込む。
こうして、俺は幻想入りを果たした。

第6話 白髪の剣士

スキマに入った俺はわずかな浮遊感の後、一瞬視界が真っ白に染まった。

視界が開けたとき、俺は長い階段の麓に立っていた。

ふう、どこに出るかわからないって言う空中に放り出されるのがお約束だから心配していたが、それは回避できたようだ。

「さて、紫が来るまでのんびりと待つとしますか」

俺は端に移動してから腰を下ろした。

幸い階段の両脇には桜が咲いていて、退屈することはない。

待つてろよ静也、もうすぐだ。

その時、階段の上の方から足音がした。

そっちに目を向けてみると、そこには一人の女の子が立っていた。

肩のあたりに切りそろえられた白髪に黒いリボンをつけ、腰に二本の刀を差している。
る。

そして何より目を引くのは、その子の周りをふわふわと漂っている白いものだ。

あれはなんだ？人魂か？

俺は初めて会った幻想郷の住人に挨拶をしようと立ち上がった。

その時に外していた視線を戻すと、いつの間にか女の子が目の前に来ていた。
刀振りかぶった状態で

「くっ!?!」

突然のことに驚いたが、考えるよりも先に体が動き、体を横に投げ出す。

俺という対象を失った刀はそのまま地面に激突し、石畳に数十センチ程度の切り込みを入れた。

嘘だろ!?! 刀で石に切れ込み入れているとかどんだけ腕力強いんだよ!

それともなんだ、あの刀実は神器クラスの化け物だともいうのか!?!

「あぶねえなーいきなりなにしゃがるー!」

「侵入者はすべて切り捨てます!」

そう言った女の子は再度刀を構えてこちらに突っ込んできた。

侵入者ってことは、ここは誰かの敷地か?

道にしてはずいぶんときれいだとは思っていたが、そういうことか。

確かによそ者に勝手に入られたら怒るだろうさ。

けど、いきなり切りかかってくるか普通!

そんなことを考えている間も、女の子は鋭い斬撃を放ってくる。

この子がひたむきに刀に打ち込んできたことが十分に分かる鋭い斬撃だ。
「待て！話を聞いてくれ！俺は侵入者じゃない、ここに落とされたんだ！」

「問答無用！」

聞く気がねえ！

平和じゃないとは言っていたが、ここまで物騒だとは聞いてねえぞ！

「はあ!!」

「くっ!!」

とうとう女の子の刀が俺の服をかすった。

それに勢いづいて、女の子はさらに深く踏み込んでくる。

どうする？これを使うか？

一瞬背中からついているものを思い浮かべるが、すぐに打ち消す。

いや、こいつは静世のだ。万が一にも折っちゃいけねえ。

刀が今度は頭の近くをかすり、前髪が数本切れて宙を舞った。

女の子に手を出すのは気が引けるが、仕方ない。

俺は一度大きく飛んで距離を開ける。

女の子はそれに反応して刀を振り下ろしながら追撃してくる。

さつきまでとは違い、冷静にその軌道を読み、わざとぎりぎり避ける。

刀を躲された女の子が刀を戻そうとするが、その前にその手首をつかむ。女の子の表情が一瞬驚愕に染まる。

「篠宮流槍術無手の型、崩岩撃衝!!」

つかんでいた手首を戻そうとしていたのとは反対方向にひねると同時に、もう片方の手で横から腕を殴打する。

同時に三方向から力を加えられた腕が耐えられるはずもなく、刀を手放した。それをつかむと後ろに下がり、正眼に構える。

「私の楼観剣が!？」

「悪いとは思いますが、こうでもしないと話を聞いてくれそうになかったんでね」
持ってみて分かったが、この刀見た目の割に重い。

これをぶれることなくふるっていたあの子はなかなかの実力者だろう。

それにこの刀からは何か不思議な力を感じる。

神器までとはいかないが、十分に妖刀や魔剣の類だろう。

まあ、神器がそうそう見つかるわけがないんだから、当然と言えば当然なんだがな。
「どうする?話を聞いてくれるって言うんなら、こいつは降ろすし返す。はなから戦うつもりなんてないからな」

「許さない、私の楼観剣を!」

俺としては、一度冷静になってもらいたかったんだが、どうやら逆効果になったみたいだ

女の子はもう一本の刀を抜き、懐から一枚の紙の紙のようなものを取り出した。

まさか、あれが紫の言っていたスペルカードってやつか!?

まずい、俺はまだ一枚も持ってねえぞ!

「スペルカード、『断命剣』!!」

女の子がスペルを宣言すると同時に、手にしていた刀が白く輝き、刀身が倍以上に伸びた。

「おいおい、嘘だろ?」

「はああああ!!」

叫び声とともに刀を振り下ろしてくる。

さすがにこの長さじゃ避けきれないと思い、とっさに刀でガードしようとする。

だが直感で分かる。あれはそんなことで防げるようなものではない。

どうする、どうする俺!?

自問自答していても答えなどせず、俺は思わず目をつぶった。

「そこまで!!」

その場に響いた第三者の声に目を開けてみると、刀は俺に当たる寸前で止まってい

た。

もしあと一瞬でも遅かったのなら、俺の首は今頃体ときよならをしていたことだろう。

「なぜ止めるのですか幽々子様、侵入者ですよ！」

女の子が叫ぶ方に目を向けると、そこには一人の女の人がいた。

短い桃色の髪に青い服を着た女の人だ。

その人は女の子の言葉には答えず、俺の前までやってきた。

「あなたが篠宮 真ね？ 私は西行寺 幽々子。この白玉楼の主をしているわ。あなたの事は紫から聞いたわ。ようこそ、幻想郷へ」

「ふう、やつと話の分かる人が出てきてくれたか。察しの通り、俺が篠宮 真だ。よろしくな、幽々子さん」

「幽々子でいいわよ」

幽々子はそう言って女の子の方を向いた。

「妖夢、この人は紫が連れてきたお客様よ」

「え、そうだったのですか!？」

「だから何度も話を聞けってゆっただろ」

「す、すみません！私ったら、また早とちりを」

「妖夢、だからあなたは半人前なのよ」

「はい、幽々子様」

女の子は俺の前まで来ると、刀を収めて頭を下げた。

「白玉楼の庭師兼剣術指南役、魂魄 妖夢です。ご迷惑をかけてしまい、申し訳ありません」

「わかってくれたんならいいさ。ほら、これは返すぜ。いい刀だな」

俺がそう言うと、妖夢はすこし嬉しそうにしながらその刀、楼観剣だったか？を受け取った。

やっぱ刀を褒められるのは、剣士として嬉しいことなんだろうな。

俺は緩んだ表情を戻して幽々子の方を見る。

「紫から聞いてつるてことは、こっちの事情も知ってるんだよな？」

「ええ、知ってるわ」

「だったら博麗神社ってところに案内してくれ。できれば今すぐに」

「もちろんそのつもりよ。妖夢、真を博麗神社に案内してあげてちょうだい」

「わかりました。こちらです、ついてきてください」

走り出した妖夢の後を俺も同じ速さでついていく。

もう少しだ、待っててくれ静也。

「そう言えば、真さんって飛べますか？」

「なんでそんなこと聞くんだ？」

「いえ、このあと少し飛ばないといけないので」

「は？」

妖夢の言葉に嫌な予感がしたが、急いでいたあまり、足は勝手に次の一步を踏み出した

その次の瞬間、周囲の景色が一変。

俺は地上からはるか上空にいた。

ほんの数十分前に幻想入りしたばかりの俺が飛び方など知るはずもなく、体は重力に従ってどんどんと落ちていく。

「そういうことは先に言えー！！」

「すみませーん！！」

半分ほど落ちたところで妖夢が俺の手をつかんだ。

まさかこんな短時間に2度も命の危険を感じるとは。

俺、この幻想郷でやっていけるのかな？

第7話 再会

「う・ん・ん・ん」

私は窓から差し込む日の光で目を覚ました。

まだ眠気の残る目をこすりながら、寝間着からいつもの巫女服に着替える。

居間に向かう途中に台所をのぞいてみると、すでに静也がいていいにおいが漂っていた。

「おはよう、霊夢」

「ん。おはよう、静也」

「もうすぐできるから、居間で待ってて」

「わかった」

昨日静也の料理を食べた私は驚いた。

食べたことのない味付けだったのもあるけど、人里の料理人でもあそこまでおいしいものは作れないと思う。

それでこれからは、料理は基本静也が作ることになった。

ちなみに弾幕ごっこに勝った魔理沙は静也の鞆からぺつとぼとる、だったかしら？そ

れを持って行った。

「相変わらず起きるのが遅いぜ、霊夢」

「なんであんたがここに居るわけ、魔理沙？」

「朝飯を食いにきまつてるだろ」

「お茶だけでなく、とうとうごはんまでたかりに来たの？」

「いやー、あれを一度食べちゃうとな。分かるだろ？」

「まあ、分からなくはないけど」

「なんか、釈然としないわね。」

「そんなことを思いつつも、私は魔理沙の横に腰を下ろした。」

「おまたせ、二人とも」

「そう言つて静也が持つてきたのは卵焼きとみそ汁とごはん。」

「なんか普通ね。昨日みたいに見たことのない料理を作つてくれるのかと思つてた。」

「いただきます」

「いただきます」

「卵焼きを一口つかんで口に入れると、味が口いっぱいに広がった。」

「おいしい。昨日も思つたんだけど、静也つて外の世界では料理人だったんじゃないの？ そうじゃないと、こんなおいしい料理が作れるなんて考えられないもの」

「分からない。けど、そうじゃない気がするんだ。レシピは自然と頭に浮かんでくるけど、なんていうのかな。たくさんの人じゃなくて、少ないけど大切な人たちに作ってた気がするんだ」

そう言う静也の横顔は寂しそうだつた。

「そう、思い出せるといいわね」

「うん、ありがとう」

「でも本当にうまいよな、静也の料理」

いつもは一人で食べていたご飯。

でも、今日は静也と魔理沙がいる。

私と魔理沙が言い合いをして、それを静也が苦笑いしながらなだめる。

そんなことを繰り返しているうちに食べ終わった。

最初はまた紫に面倒なことを押し付けられたと思つたけど、今は違う。

「静也、洗い物が終わったら出かけるわよ」

「いいけど、どこに行くの?」

「服を買いに行くのよ。着替えがないと困るでしょ」

静也の鞆にはいろいろなものが入つてたけど、着替えはなかった。

「でもどこに行くんだ? 人里の呉服屋じゃ静也の服は作れないぜ」

「香霖堂よ。霖之助さんなら、静也の服も作れるでしょ」

「ああ、香霖か！確かにあいつなら作れそうだな。よし、それならさっさと行こうぜ」
それからすぐに静也も台所から出てきて、いざ出発となったときに、静也が呼び止めた。

「待って霊夢、誰か近づいてきてるよ」

静也の指さす方を見ると、確かに二人の人影が近づいてきていた。

「あら、参拝客かしら」

「この神社に参拝客が来るわけないぜ。あれは・・・妖夢だな。半霊がいるから間違いないぜ。けどもう一人は誰だ、幽々子じゃないよな？」

「そうね。ていうかあれ男じゃない？このあたりに飛ぶことができる男なんていたかしら？」

私たちが見ていると、向こうもこちらに気づいたようで、男がスピードを上げた。

その目は一点、静也だけを見ている気がする。

その男は私たちの前に降り立つと、静也に駆け寄った。

「静也！やっと思つた、心配したんだぞ」

静也の事を知ってるってことは、こいつが紫が連れてくるって言うってた静也と関係が深い人物かしら？

「ごめん。僕は君がだれなのか思い出せないんだ」

「そっか、記憶喪失になってるんだったな。じつとしてる、今思い出させてやる」

そう言つて男は静也の頭に手を置いた。

その瞬間、静也が頭を抱えて呻き始めた。

「ぐあああ!!」

「静也!?! あんた、静也に何をしたの!?!」

「落ち着け。俺の能力で、静也は今、自分の記憶を追体験してるんだ。俺目線でだけだな。要は記憶を無理やり思い出させているから、その分の痛みが静也にフィードバックしてるんだ」

「記憶の追体験? それがあんたの能力?」

「そう。俺の能力は“感覚を操る程度の能力”だ。記憶も感覚器官の一部だからな」

「お前といい静也といい、外来人は妙な能力が多いぜ」

「ああ、痛かった」

「静也、大丈夫なの?」

「うん、まだ少し痛むけど大丈夫だよ。それと、思い出したよ」

静也は男のもとへと行くと右腕を振り上げた。

それを見た男も同じように右手を上げて、喧嘩でも始まるのかと思つたら、二人はハ

イタツチをした。

「ありがとう真。おかげで大切なことを思い出せたよ」

「へ、親友が困ってるのに助けるのは当たり前前の事だろ？それがたとえ異世界だとしてもな」

「はは。真らしいね」

「まあな」

「魔理沙、霊夢、紹介するね。こちら僕の親友の篠宮 真」

「よろしくな」

「真、こちら普通の魔法使いの霧雨 魔理沙」

「よろしくだぜ」

「で、こっちが自称楽園の素敵な巫女。博麗 霊夢」

「ちよつと静也、自称って何よ」

「でも、間違ってるいでしょ？」

「それは、そうだけど」

「ところで真、そっちの女の子を紹介してくれない？」

そう言つて静也は今まで一歩後ろにいた妖夢に目を向けた。

「こいつは魂魄 妖夢。冥界の白玉楼つてところの庭師兼剣術指南役だ」

「魂魄 妖夢です。よろしくお願ひします」

「龍導院 静也だよ。真を連れてきてくれてありがとう」

「いえ、先に迷惑をかけたのはこちらですから、これくらいは」

「そう、それでももう一度だけ言わせて。ありがとう。ところで真、幻想郷にはどうやって？ やっぱり紫さんに連れてこられたの？」

「そうなんだよ。紫の奴がさあ……」

そのまま静也は真と今までの事を話し始めた。

そんな静也の表情は、今まで見たことがないほどの笑顔だった。

「なあ霊夢、静也の奴なんか雰囲気変わってないか？」

「そうね、きつとこつちが本当の静也なのよ。今までの静也はいわば中身のない器のよなもの。」

その器に、今ようやく中身が入ったんだから」

「そうだな。ま、私はこつちの静也の方が好きだぜ」

「ねえ真、その背中かららつてゐるのつてもしかして」

「おつとあぶねえ、忘れるところだった。」

ほらよ、お前にはこれが必要だろ？ この幻想郷に來たのならなおさらな」

私が視線を戻すと、静也が真から布に包まれたものを受けつとてゐるところだった。

静也が布のひもを解くと、中から二振りの刀が出てきた。

鞘にそれぞれ龍が描かれている白と黒の刀だ。

「わざわざ持ってきてくれたんだ、ありがとう」

「なんだ、静也は剣士なのか？」

「そうだよ。僕の流派は龍導流といって、要人警護といった誰かを守るための流派なんだ。

だから必然的に一体多数の戦闘が得意だし、すべての武具を使いこなす。

その中でも、僕はとりわけこれが得意だね」

なるほどね。昨日の静也の動きから素人ではないとは思ってたけど、まさか武家の出身だったとはね。

「名前は鞘を見ればわかると思うけど、白い方が『白竜』黒い方が『黒龍』。

僕が龍導流の後継者として認めてもらったときに、父さんから貰ったんだ」

静也の口調から、本当に大切にしていることが伝わってきた。

「あの、静也さん」

「どうしたの、妖夢？」

「私と、剣の立ち合いをしてくれませんか？」

「立ち合いを僕と？」

「はい。ご存知の通り、この幻想郷では弾幕ごっこが基本のルールです。

だから近接武器を使う人がほとんどいなくて、あまり実戦形式の練習をしたことがないんです。

ですので、お願いします」

そう言われた静也の目が、一瞬鋭く光つたのを、私は見逃さなかった。

「いいよ、そのくらいなら。でも明日でいいかな？今日は先約があるんだ」

そう言つて静也は私の方に目を向ける。

その視線を追つて、妖夢も納得した。

「そういうことでしたら、分かりました。

では明日、白玉楼でお待ちしております」

静也が妖夢との約束よりも私の約束を優先させてくれたことに、少しだけ嬉しくなつていた。

第8話 宵闇との邂逅

「じゃあな静也、また明日」

そう言つて真は妖夢と一緒に飛んで行つた。

「いいな、僕も空を飛びたい」

「お前の能力なら飛べるんじゃないのか？」

「それができないんだよね。」

人は空を飛べないっていうのが世界の理だからね」

「名前だけ聞くとすごそうだけど、静也の能力って案外大したことないのね」

肩を落とす僕に霊夢が追い打ちをかけてくる。

自分でもわかつてるんだけど、それを言われるとなあー。

「ま、そんなことより早いところ香霖のここに行こうぜ」

「魔理沙も来るの？」

「当然だぜ。それじゃあ私は先に行つてるからな」

そう言つて魔理沙はあつという間に飛び去つた。

すごい速さだな。

「まったく、箒で行くのなら後ろに静也を乗せていけばいいのに」

あ、それは僕も考えてなかったな。

でも、さすがに女の子の後ろに乗るのはなく。

「ま、過ぎたことを言ってもしょうがないか。

私たちも早くいきましよう。

夕方までには帰りたいし」

「そうだね。案内よろしく頼むよ、霊夢」

「任せなさい」

歩き出した霊夢の後ろを半歩遅れでついていく。

それから10分ぐらいたったかな。

ようやく長い階段を下りて今は森の中を歩いてる。

なんであんなところに神社を立てたのかな？

参拝客が来ないので、たぶんあれの・・・

僕は思考を中断させて足を止めた。

その突然の行動に霊夢も僕の方を振り向いて止まる。

「静也、どうかしたの？」

僕はそれに答えず、静かに『黒龍』を抜き少し先の林にすべての注意を向ける。

「何か、いる」

僕が告げると、霊夢も林の方を向いてお札を取り出した。

半身を引いて構えながら、左手は常に『白竜』を抜けるように添えておく。

「守龍の心得、護衛対象、博麗 霊夢」

そつとつぶやくと同時に頭が冴えていき、霊夢を守ること以外を思考から外す。

僕と霊夢が見つめる先で林から人影が出てくると同時に、うつぶせに倒れた。

「な!?!」

僕は心得を解いてその人影に駆け寄る。

倒れこんだのは見た目10歳前後で黒い洋服を着ていて、

短い金髪の上に大きな赤いリボンが特徴の女の子だ。

「きみ、大丈夫!?!」

どうしてこんな森の中に女の子が? 幻想郷って結構危ないところのはずだよな?

「おなかすいたあ〜」

まさかの行き倒れ!?

呆然とする僕に女の子が目を向ける。

「あなたは、食べてもいい人類?」

その言葉とともに、かすかに感じる妖力。

とつきに刀に手が伸びかけたけど、途中でやめて笑みを浮かべる。

「食べないでくれると嬉しいかな」

「そうなのかしら」

僕の言葉に残念そうにしているけど、

人間を食べられなかったからではなく、

おなかを満たせなかったからのように見える。

やっぱりこの子……

「あら、ルーミアじゃない」

「霊夢、知り合い？」

「ええ。その子はルーミア。人食い妖怪よ」

「やっぱり」

「気づいてたの？」

「うん、この子からは妖力を感じたからね」

「そのわりには警戒しないのね」

「確かに食べてもいい人類なんて聞かれた時は驚いたけど、

この子、ルーミアからは攻撃的な意思を感じなかったし、

何より血の気配を感じない」

「血の気配?」

「人妖関わらず、生物を殺めたことのあるものは必ず血の気配をまとう。

これは決して消すことのできない証になる。

職業柄、そういうのには敏感でね」

「ふーん」

霊夢に説明しながら鞆の中を確認する。

確かこの辺にいつも入れてたはずなんだけど・・・あった。

「これ、食べる?」

僕が差し出したのはカロリー○イト。

学校帰りにそのまま仕事が入ってくることも多くて、

そういう時に限って長丁場になる。

だから鞆の中に常に保存食を入れておいたんだよね。

まさか学校帰りに異世界に迷い込むとは思はなかつたけど。

ルーミアは初めて見る食べ物の子か、しばらくにおいをかいだ後一口食べた。

「おいしいー!」

おいしいかな? 簡易食料だから味はいまいちだと思っけど。

初めて食べる味だからかな?

それとも単に空腹のせい？

ま、いつか。喜んでるんだから。

箱の中身がなくなると、ルーミアは満足そうに立ち上がった。

「ありがとう。すごくおいしかった！」

私はルーミア。あなたは？」

「僕は龍導院 静也。よろしくね、ルーミア」

「うん、よろしくね！」

それじゃあまた今度。バイバイ静也、霊夢」

「バイバイ、ルーミア」

「もう行き倒れるんじゃないわよ」

「はい」

その言葉を最後に、ルーミアは飛んで行った。

本当にみんな飛べるんだな。

「さあ、私たちも早くいきましよう」

「魔理沙も待ちくたびれてるかもしれないしね」

そう言つて、僕たちはまた香霖堂にむっかて歩き出した。

第9話 道具屋ともう一つの瞳

ルーミアと別れた後には特に何も起こることなく、僕たちは香霖堂にたどり着いた。中に入ってみると、白い髪に眼鏡をかけている男の人が魔理沙と話していた。

「お、やっと来たか！こいつが今話していた外来人だぜ」

「ほう、君が」

その人が僕の方に目を向けて、眼鏡を人差し指で上げた。

第一印象は優しい気な好青年だけど、なんか違和感を感じるな。

ん？これなら僕的能力を使えばわかるんじゃないのかな。

理には反していないはずだし・・・やっぱりできた。

なるほどね。

ということはこの人、見た目どおりの年齢じゃないかもしれないな。

「初めまして、僕は森近 霖之助。」

「この香霖堂の店主だよ」

「初めまして、僕は龍導院 静也です。」

よろしくお願いします、霖之助さん」

「それで、今日は静也君の服を作りに来たんだよね？魔理沙から聞いてるよ。

どんな服がお望みなかな？今着ているようなものかな？」

「確かに今着ている制服の方が動きやすくはありますが、和服でも大丈夫です。着慣れているので」

「分かった。それならすぐに用意できるだろう。

商品でも見ながら待っていてくれ」

「お願いします」

霖之助さんはそう言って店の奥に入ってしまった。

あれ？！僕自分の服のサイズ言っていないけど、目測で測ったのかな？

「うくん、やつぱり半妖だと目がいいのかな？」

「え？！なんで香霖が半妖だって知ってるんだ？」

僕がもらしたつぶやきに、魔理沙が聞き返してきた。

まあ、驚くよね。

僕が霖之助さんと会ったのはついさっきなんだから。

「霖之助さんを一目見た時から何となく違和感があったんだけど、確証はなかった。

だからその先は能力を使って知ったんだよ」

「でも、静也の能力は理に反したことはできないんじゃないのかなかったのか？」

「そうだけど、僕がしたことは決して理に反してはいないんだよ。

勘のいい人や心理学に精通している人、といって理解してもらえるかはわからないけど、

そういう人たちなら一目見ただけで相手の事を理解することができる。

僕がやったのはそれと同じだよ」

「ふーん。つまり霊夢みたいなもんか。

あいつの勘はよく当たるからな」

霊夢の感はよく当たる・・・か。

巫女って勘が鋭そうないメージがあっただけど、あなたが間違いないやなかったのかも。

「それにしても、ずいぶん幻想郷ごうきょうになれるのが早いわね。

さっきのルーミアの時もそうだけど、普通外来人が妖怪にあつたら怖がるんだけど」

「まあ、物の怪の類には慣れてるからね。

二人は陰陽師って知ってるかな？」

「陰陽師？確か、外の世界の退治屋みたいなものだったかしら」

「正解。呪まじないいや式を操り、

悪霊や物の怪から町と人を守るのが陰陽師の仕事。

僕の家、龍導院家は元をたどるとその陰陽師の家系なんだ」

「じゃあ、静也も陰陽師なのか？」

「残念だけど、僕は不思議な術も使えなければ、式神も持っていない。

長い時間の中で、陰陽師としての力は失われていったんだ。

でも、霊視の力だけはまだ受け継がれている。

だから僕には本来見えないものが視える」。

それで国の偉い人たちから、秘密裏にそういった仕事も受けていたんだよ」

「なるほどね。静也の霊力が馬鹿みたいに大きいから不思議に思ってたけど、それが理

由ね」

「すげえな静也。でもなんで霊力だけ多いんだろうな？」

「霊力は血によるものが多いからだよ、魔理沙」

僕が答えに困っていると、戻ってきた霖之助さんが答えてくれた。

「というか、僕って霊力が多かったんだね。初めて知ったよ。

「血・・・遺伝によるものが大きいということですか？」

「それがすべてというわけじゃないけど、とても大きな要因だよ。

静也君の先祖が陰陽師なら、当然霊力も多いさ。

それと服ができたよ。

合わなかったらいつでも言ってくれ、交換するから」

「ありがとうございます。おいくらですか？」

「70文だよ」

僕は鞆から財布を取り出して霖之助さんに支払った。

昨日鞆を整理していたら、

いつの間にか財布の中身がこちらのお金に代わっていることに気が付いた。

たぶん、紫さんが換金してくれたんだろう。

総額で10慣文入っていた。

本当に、紫さんにはずいぶんとお世話になった。

今度何かお礼をしないと。

「うん、確かに頂いたよ。今後とも香霖堂をごひいきに」

「さて、静也の服もできたし、早く帰りましょう」

「霊夢、僕はもう少しここにいてもいいかな？」

「いいわよ。帰り道は分かる？」

「大丈夫、覚えてるよ。もし分からなくなったら、能力を使うし」

「分かったわ。でもなるべく夕飯前には帰ってきてね」

「うん」

「じゃあな静也、また今度弾幕ごっこしようぜ」

魔理沙の言葉を最後に、二人は香霖堂を後にした。

「ずいぶんと二人に慕われているんだね」

「そうですか？」

「ああ。君の話をしていた時の魔理沙も、ここに来てからの霊夢の表情も、

僕は久々に見るものばかりだったよ」

「たぶん二人とも、外来人が珍しいだけですよ」

「それだけではないと思うけどね」

「霖之助さん、何か言いましたか？」

「いや、何も言っていないよ。もう少し商品を見ていくんだろ？」

好きなように見てくれ。

静也君になら、奥の非売品を見せてもいい」

「ありがとうございます」

霖之助さんに頭を下げて、早速物色を始める。

非売品にも興味があるけど、あまり霊夢を待たせるのも悪いからそれはまた今度にし

よう。

それにしても、外界の商品が多いな。

パッと見ただけでも掃除機に冷蔵庫、テレビやパソコンまである。

幻想郷に電気が通ってないのが残念だ。

次に棚の商品を見ていて、真ん中の棚で僕の目が止まった。

近づいて手に取ってみると、正確には違うけど「それ」は僕が慣れ親しんだものとそっくりだ。

どうして、これがここに!?

「それが気に入ったのかい？」

「はい。これ、おいくらですか？」

「これがあれば、僕の本当の龍導流が使える。

「壊れているけどいいのかい？」

「構いません。このぐらいなら、僕的能力で治せるので」

「そうだね、壊れてはいるけど珍しいものだから、1000慣文といたところかな」

「1000慣文……」

所持金の10倍、とてもじゃないけど払いきれない。

誰かに借りるか？

霊夢は無理だな、あの生活水準を見る限り。

魔理沙もあまりお金を持っているようには見えないし。

真は僕と同じ理由で無理。

今日会ったばかりの妖夢に頼むのは気が引けるし、紫さんは頼めば貸してくれるかもしれないけど、これ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

自分で稼ぐしかないか。

人里に言つて仕事を探そう。

だとしたら結構時間がかかるだろうから、他の人が買つてしまつたらどうしよう。

霖之助さんをお願いして・・・

「ツケでも構わないよ」

「え？」

「ツケでも構わない。それを持って帰って、

代金は払える時に払つてくれればそれでいい」

「ありがとうございます、霖之助さん！」

代金は必ずお支払いします」

「焦らなくていいよ」

霖之助さんに深く頭を下げた後、香霖堂を出て帰路を全力で走る。

早く、これを直さない!!

「龍導院 静也君、か」

彼が出ていった扉を見つめたまま、僕はつぶやいた。

不思議な少年だった。

魔理沙があまりにも楽しそうに語るものだから、

どんな人物なのか気になっていたけど、一目見て驚いた。

彼が霊夢に負けず劣らずの莫大な霊力を持っていたからだ。

さらには武にも秀でているようだ。

それなりの時を生きてきた僕だから、相手の動作で何となくの力量は測れる。

腰に刀を差していたから、外の世界では剣士だったのだろう。

弾幕ごっこも強くなるかもしれない。

彼は先祖が陰陽師だと言っていた。

弾幕は厳密には違えども、陰陽術のそれと似通ったところは多い。

代を重ねるうちに術は失われていったらしいが、

血に刻まれた記憶は刺激を受けると目覚めることが多い。

それに観察眼にも優れていた。

僕を一目で半妖だと見抜いていたからね。

それなのに、彼からは嫌みのようなものを何一つ感じなかった。久しく見ることのなかったほどの好青年だ。

魔理沙と霊夢の表情からもそれはうかがえた。

僕はそれを何よりもれしく思った。

魔理沙も霊夢も、もう年頃の少女だ。

異性に惹かれやすい時期であり、それが当然のことだ。

しかし二人は異変解決者。

人里に言っても二人に声をかけるものなどそうそうはいない。

そんなときに彼が現れた。

年も近く、実力も期待できる彼が。

二人はいずれ静也君に惹かれるかもしれない。

脈はあるようだしね。

僕でさえ惹かれたのだから、その可能性は十分にある。

それは二人にとっていい経験になるだろう。

それがたとえ失恋であつたとしてもね。

「君がこの幻想郷に与える影響、楽しみにしているよ」

さて、考えるのはこのぐらいにして、店の整理をしようか。
次に彼が来た時に、もっと楽しんでもらえるように。

第10話 その者の名は、守龍なり

「せつ、はっ！」

日が昇ってまだわずかな早朝に、私は剣の素振りをしている。

おじい様から教えてもらった型通りに、ただひたすらに剣をふるう。

普段は無心でやつてること。

けど今日は、抑えようとしても抑えきれない高揚感があった。

今日は静也さんがやってくる。

それを思うだけで胸が高鳴る。

何せ、おじい様以外で初めて手合わせができるのだから。

「お、やってるな」

その声に振り返ると、縁側に真さんが立っていました。

「おはようございます、真さん」

私は刀を鞘に納めてあいさつをする。

「おはよう妖夢。毎朝やってるのか？」

「いえ、普段は午後からですけど、今日は静也さんがいらっしやいますから。」

少しでも練習しておきたかったんです」

「なるほどな。ま、がんばれよ。静也は強いぞ、俺なんかよりもずっとな」

「はい。でも、負けるつもりはありません」

「その意気だ。ただその前に、一つ問題ができた」

真さんは苦笑いを浮かべました。

どうしたんですよう？

「よゝむゝ、ごはんまだ〜？」

いけない！ 剣に夢中になるあまり、幽々子様の朝食を失念していました！

「申し訳ありません幽々子様、すぐにご用意します！」

刀を縁側に置き、急いで台所に駆け込む。

早く何かお出ししないと！

「従者つてのも大変だね。さて、配膳ぐらいは手伝うかね」

〜少女調理中〜

「本当に申し訳ありませんでした、幽々子様!!」

食事を終え、食器を片付けた私は膝をついて頭を下げている。

いくら心が浮かれていたとはいえ、主の食事の用意を怠るなど、

従者としてあるまじき失態です！

「大丈夫よ妖夢、気にしてないから」

「しかし・・・」

「それよりも、来たみたいよ」

「お〜い静也、こつちだ!」

幽々子様の言う通り、その直後に真さんの声が表から聞こえてきた。

「試合は私も見るから、がんばって。」

ほら、早く静也を迎えてあげましょ。

私もどんな子なのか気になるし」

幽々子様は立ち上がると、庭の方へ行かれました。

一人残された私は、一度両手で強くほほをたたく。

痛いけど、おかげで目が覚めました。

「よしー」

気合を入れなおして急いで庭に出ると、

ちょうど幽々子様と静也さんの自己紹介が終わったところでした。

「おはようございます、静也さん」

「おはよう、妖夢」

静也さんは昨日の服ではなく、黒色の着物を着ていました。

腰に二本の刀を差していることもあって、その姿が一瞬おじい様と重まりました。

「僕はいつでも大丈夫だけど、どうする妖夢？」

「なら、すぐにお願ひします」

「ん、了解」

「じゃあ私たちは縁側で見てるわね。頑張つて二人とも」

幽々子様と真さんが下がったことを確認して、私は楼観剣を引き抜きます。

一方の静也さんは刀は抜かず、その柄に手を添えています。

「真、合図をお願い」

「了解。それではこれより、魂魄 妖夢と龍導院 静也の試合を始める」

「白玉楼の庭師兼剣術指南役、魂魄 妖夢。全力で行かせていただきます！」

「龍導流剣術皆伝、黒守龍、龍導院 静也。いざ、参る」

「よーい・・・始め！」

真さんの手が振り下ろされると同時に駆け出す。

一息に距離を詰め、楼観剣を振りぬく。

静也さんはまだ刀を抜いていない。取った！

ガキンツ。

「予想よりも速かったな」

「なっ!？」

いつの間にか持つてきたのか、私の刀を鞘からわずかに刀身を出してそこで受け止められていました。

まずいと感じ、地面を蹴って一度距離を取ろうとする。

けれどそれは間違えだったようです。

静也さんは出した刀身をもう一度戻し、柄に手をかけて深く腰を落とす。

あの構えは抜刀術!？」

「龍導一刀流劍術初伝、『せんりゅう閃龍』」

それはまさに一閃。

黒い鞘から引き抜かれた刀は目で追うのが精一杯で、体が反応できない。

何とか刀を倒して受け止めたけど、力の入っていないそれはすぐに弾かれ奥まで押し返される。

足を踏ん張って倒れることだけは防ぐけど、離さないように強く刀を握っていた手は今でも痺れている。

「ほう、静也の閃龍を受け止めたか」

重い!こんな重い一撃を、しかもあんな速さで出せるなんて!

でも、負けない。今度こそ打って出る!

しびれの残る腕に力を込め、大上段に刀を振り上げ距離を詰める。

静也さんも避けるのではなく迎え撃つようで、刀を下段に構えてる。

「やあっ！」

かけ声とともに刀を振り下ろすと、静也さんもまた刀を振り上げる。

楼観剣と黒龍が衝突し、一瞬火花が散る。

それと同時に左手を離し白楼剣に手をかける。

片腕がなくなったことで楼観剣が押し負けそうになる。

けれど私は半人半霊、空いた部分にすぐさま半霊が入り力を維持する。

その光景に、静也さんがわずかに目を見開く。

やはり私のようなものと戦うのは初めてですか。

勝機は今です！

白楼剣を抜き、鋭く静也さんの胸を狙う。

あと少しで届くというところで、突然の横からの衝撃に吹き飛ばされた。

あまりにも予想外の一撃に、受け身も取れずに地面を転がる。

いったい何が起きたんですか!?

視界に納めた静也さんは左足を振りぬいていた。

まさか!?

「龍導流格闘術『翔脚龍』」
しょうきやくりゅう

龍導流はすべての武具を使いこなすとは言ってましたけど、格闘術まであったなんて

！

すぐに体を起こすも、静也さんはすでに目の前。

その左手には白竜が握られていて、二刀流の構え。

上段からの攻撃を楼観剣で防ぎ、下段からの攻撃は白楼剣でいなす。

そこから始まる神速の連撃。

距離を空けようと体を後ろに動かすのに、

それが分かっていたかのように回り込まれて結局同じ体勢に持ち込まれる。

このままじゃ負ける。

どうすれば……

その時、優位に立っていたはずの静也さんが突然後ろに下がり白竜を鞘に納めた。

どういうことでしょうか？

理由は何であれ、助かった。

「驚いたよ妖夢。正直ここまで耐えられるとは思ってなかった」

「ありがとうございます」

「だからこそ、君には見せてあげるよ。龍導流の真髄を！」

真髓？ 静也さんの本当の戦い方は、二刀流ではないということですか？

静也さんは空いた手を懐に入れると、黒い筒状のものを取り出した。

あれには見覚えがある。

永遠亭の月の兎が同じものを持っていました。

確か、銃、と言っていましたね。

けど、どうしてあれを？

あれは遠距離戦の武器のはず。

「不思議かな？ 剣士であるはずの僕が銃を使うのが」

「正直に言うとそのです。」

龍導流剣術には、一刀流と二刀流しかないと思つたので」

「いや、それは合っているよ。確かに龍導流剣術には一刀流と二刀流しかない。

けれど、どの龍導流にも必ず最後に同じことが教えられる。

曰く、？ 汝龍導流を極めし者なり。されど、龍導流の真髓はそこにあらず。

龍導流を身に着け、己が物へと昇華せよ。それこそが龍導流の真髓也？ つてね」

えっと、どういふことでしょうか？

己が物へと昇華？

「分かりやすく言うと、龍導流の技を剣術であれ弓術であれ、

それをすべて身に付けたからといってそれはまだ途中にすぎない。

そこからさらに自分だけの龍導流を身に付けることこそが本当の龍導流。

それができて初めて？皆伝？を名乗ることができるんだ」

「そのせいで、俺はいまだに目録なんだよな」

「あら、真も龍導流が使えるのね。でも妖夢と戦ってた時、篠宮流槍術って言ってた気がするんだけど」

「俺は家系が違うし、師範代に直接教わった訳ではなく、あくまで静也から個人的に教えてもらってたんだ。

それじゃあ龍導流を名乗るわけにはいかない。だから、篠宮流なのさ」

「つまり、篠宮流槍術は実質、龍導流槍術なのね」

「そういうこと」

そうでしたか。

静也さんは戦う前、確かに皆伝と言っていました。

つまり、あれが静也さんの本当の龍導流だということですね。

「聞いてもいいですか？その龍導流の名前を」

「もちろん。龍導複翼流剣術だよ」

「そうですか、ありがとうございます」

その言葉を最後に、もう一度楼観剣と白楼剣を構える。

たとえ流派が変わろうと、やることは変わりません。

全力で勝ちに行く！

静也さんもまた、銃口をこちらに向けて構える。

「二回戦といった所かな。

歪ながらも完成された龍の力、とくにご覧あれ」

「私に斬れないものなんて、あんまりない!!」

「いやいや、そこは嘘でも無いって言う所だろ！」

姿勢を低くして駆ける。

牽制として放たれる弾丸を斬りながら、足は止めない。

速さは弾幕と大差ない。

いつものようにやれば、さばききれないことはない！

銃撃の間を潜り抜け、刀の間合いに入る。

けれどすぐには振らない。

右に大きく足を踏み出し、すぐさま体をひねり左側に抜ける。

そして今までで一番の力で楼観剣を振りぬく。

今度こそ取ったと思った。

けれど私の耳に聞こえてきたのは斬撃の音ではなく、刀を止める音だった。
「そんな……」

「妖夢、君は上手く僕の死角をついたつもりかもしれないけど、それは間違いだ。

今の動きは、すべて僕の計算通りだ」

静也さんの刀が動く。

力の抜けきってていた私は簡単に刀を手放してしまった。

「龍導複製流劍術初伝『嘲笑の魔龍』。君が攻めに転じた時点で、この結末は決まっていた。
た。

本当に対人戦が少ないみたいだね。おかげで誘導しやすかったよ」

「そこまで！勝者、龍導院 静也！」

真さんの宣言で、静也さんは刀を鞘に納めた。

「僕は君に何かを言える立場じゃない。けれどこれだけは言わせてくれ。

妖夢、君の剣には少し、無駄が多いな」

その言葉を最後に、静也さんは幽々子様と二言三言話した後、屋敷の中に入っていた。
た。

必ず勝てるとは思ってなかった。

私はまだ半人前、そこまで驕ることはできません。

でも、善戦はできると思ってた。

私だって刀を取って日が浅いわけではないのだから。

けど実際は、私は最初から最後まで静也さんの掌の上。

唯一意表を突いたのは、私の半人半霊としての特性を使った時だけ。

結局それもすぐに対処されましたが。

気づくと手を強く握りしめていた。

悔しい。

霊夢さんや魔理沙さんのような弾幕ごっこではなく、刀を使った、

同じ剣士として静也さんに圧倒的に敗北した。

それがどこまでも悔しかった。

「静也は皆伝を名乗ってるけどよ」

私が涙をこらえていると、いつの間にか真さんがいた。

「俺は静也の事を師範代だと思ってる。外の世界では、龍導流にも少ないながらも門

下生はいる。

そいつらに指導をしてるのはほとんどが静也だ。師範代、静也の親父さんも道場には

来るのにな。

というか、親父さんの方が教えを乞いたければ静也のもとに行けって言ってるから

な。

そしてあいつに教えられたやつはみんな人並み以上に強くなるんだ、俺も含めてな。今回の試合をどう受け止めるかは妖夢次第だ。がんばれよ」

そう言い残して真さんも屋敷の中に入っていく。

私は手放した楼観剣を拾い、鞘に納めて屋敷に戻る。

ありがとうございます真さん。

おかげで私のやるべきことを見つかりました。

第11話 龍を継ぐもの

静也さんを探していると、何故か台所にいました。

私は一つ深呼吸をしてから中に入る。

「静也さん、何をしているんですか？」

「ん？ああ、妖夢。今の試合で疲れているだろうから、デザートを作ろうと思ってね」

「デザートですか？」

「甘いものを食べれば疲れが取れるからね。それよりも、僕に何か用？」

「お話が、あります」

「それは大事な話かな？」

「はい」

「分かった。それじゃあ場所を移そうか」

「手を離しても大丈夫なんですか？」

「あとは自然に冷えるのを待っただけだから大丈夫だよ」

台所の隣にある部屋に静也さんと一緒に入る。

私が畳の上に正座をすると、少し距離を開けて静也さんも同じように正座をした。

「それで、何の話かな？」

「お願いがあります。私を．．．私を、弟子にしてください！」

私は頭を地面につける。

心臓は今までで一番速く動いている気がします。

「顔を上げて」

顔を上げてみると、静也さんは瞑目をしていた。

それはほんの短い時間でしたが、私にはとても長く感じました。

静也さんが目を開き、その黒色の瞳で私と目を合わせる。

その瞳を見た途端、私は一瞬呼吸を忘れ体が強張った。

その瞳はさっきの試合の何倍も鋭く、殺気が肌をなでる。

下手なことを言えば首を落とす。

そう言わんばかりの凄みです。

「その言葉の意味を、重さを、君は理解しているのかい？力を得ることは、責任を負うことと同義だ。」

力あるものは、力無きものを守らなければならない。より強い力を得るほど、周りの人間を巻き込む危険も高くなる。

それを分かっているのかい？」

「もちろん、分かっています」

「ならばなぜ力を求める？君が半人前だと言われていることは聞いた。幽々子さんに認めてもらいたいからかい？」

「確かに、その思いもあります。私は幽々子様に認めてもらいたい。でも……でも私は、それ以上に幽々子様と白玉楼を守りたい！」

「それは使命感故かい？」

「違います！私は幽々子様と白玉楼が大好きです。だからこそ、守るための力が、守れるだけの力が欲しいんです！だからどうか、お願いします！」

静也さんに目を合わせて強く見返す。

その瞳の強さに目を離したくなるけど、意地で押しとどめる。

認めてもらいたいから！

数秒の間睨み合っていると、静也さんの殺気が嘘のように消え、静かに笑った。

「合格だ」

「……え？」

「龍導流を学ぶための条件はたった一つ。誰の為に、そして何の為に力を求めるかということ。」

己の為に力を欲する者に、龍導流を学ぶ資格はない。妖夢は愛する者を守る為に、そ

して必ず守るといふ強い覚悟を持つてる。

君の目からそれは伝わってきた。ならば、龍導流を学ぶ資格は十分にある」

「じゃあ!？」

「僕で良ければ、龍導流の極意を教えよう」

「ありがとうございます!」

「先に庭に出ている。幽々子さんにデザートを届けた後、僕も行くから」

「はい、師匠!」

私は刀をつかみ、師匠に頭を下げ、部屋を出た。

『はい、師匠!』

俺が外から話を聞いていたら、妖夢はその言葉を置き去りにするように走っていった。

よほど嬉しかったみたいだな。

妖夢の思いと覚悟は龍導流と合ってるだろうし、静也もきつと受け入れるだろうと思つてわざと誘導するような言い方をしたのは間違つてなかつたようだ。

静也と妖夢の戦いを見て、俺は惜しいと思った。

初めて会った時もあったが、妖夢の剣術は粗削りだが鋭いものだった。

外界で暮らしていた俺や静也よりも、刀を扱う機会が多かったからだろうな。

でもそれだけだった。

弱者というには鋭すぎ、達人というには鈍すぎる腕前。

まさに、半人前、という言葉がぴったりだった。

妖夢の祖父を悪く言うつもりはないが、妖夢は師に恵まれなかったんだろう。

妖夢の祖父はもう十分だと思つて妖夢の元を去つたのかもしれないが、まだまだ不十分だ。

磨けば光るダイヤの原石を持つていながら、それを磨くもの、師がいなかった。

だからこそその静也だ。

剣術において静也の右に出る者はいないだろう。

この幻想郷でもな。

お節介かとも思ったが、そこは居候のよしみつてことで我慢してもらおう。

畳の擦れる音が聞こえたところで、俺は能力を解除した。

最初から立ち聞きをしていたのに、気配に敏感な静也が俺に気づかなかつたのはこれのおかげだ。

本当に便利な能力だよなこれ。

「あれ、真？もしかして聞いてた？」

「まあな」

「別に部屋の中でも良かったのに」

「部外者の俺が居ると話しづらいことがあるだろ、お互いにな」

「そう、真らしいね。それじゃあ僕は行くね。あまり妖夢も待たせるのも悪いし」

「ああ。師匠がんばれよ」

「うん」

笑顔で静也を見送ったが、その背中が見えなくなつた時点で笑顔を引いた。

静也が妖夢に言ったのは、龍導流に入門しようとするれば必ず聞かれることだ。

俺も同じことを聞かれたが、一つだけ違うところがあった。

それは周りの人間も巻き込むという部分。

意識してやったのかはわからないが、あそこは静也が自分で付け加えていた。

静也はまだ、あの時のことを完全に忘れることが出来ていないのかもしれない。

「それじゃあ、早速始めるよ」

「よろしく願います、師匠」

場所はさつきと同じ庭先。

私と師匠は刀を収めたまま向き合っている。

「妖夢、僕がさつき言ったことを覚えているかい？」

「はい。私の剣術には無駄が多いと」

「その通り。妖夢、君は全てに対して強くなろうとしすぎている」

「どういう意味ですか？」

「人の身に付けられるものには限界がある。だからこそ、すべての能力を上げようとするとかえって無駄が多くなるんだ。」

自分だけの強さを見つけ、それを最大限に生かした戦い方をするのが重要だ。

一流の剣士はみんな戦い方が違う。それは全員が自分の強みと弱みを知っているからだ。

さて妖夢、僕の強さは速さだ。ならば君の強さはなんだと思う？」

そう問いかける師匠は私を試しているようです。

あの口ぶりからすると、師匠はもう私の強さに気が付いているようですね。

一度刀を合わせたただけなのにもう気が付くとは、流石です。

私だけの強さ、今までそんなの考えたこともなかった。

力強さは違う。半人半霊としての特徴？いや、師匠が言いたいのはそんなことじゃない。

私の強さ、私だけの強さ。

考えるんだ。あの試合において、私が師匠と同等にできたものはなんだ？

・・・っ!?もしかして、これでしようか。

「速さ。私の強みは速さ。だけど師匠のような恒常的な速さではなく、瞬発的な速さ。

それが私の強さ」

確証があったわけではありません。

これしか思いつかなかったというのが本音です。

「素晴らしい、正解だ。まずは刀一本でその動きを磨いていこう」

「はー！」

それから師匠は、日が暮れて霊夢さんが迎えに来るまでの間ずっと、私のそばで指導をしてくれました。

第12話 人里での出会い

「それじゃあ行ってくるね、霊夢」

「心配いらないとは思うけど、気を付けるのよ。」

「昼でも妖怪は出るんだから」

「うん」

霊夢に見送られて向かうのは人間の里。

霊夢は気にしなくていいって言ってたけど、

居候させてもらっているのに料理と掃除だけつても居心地が悪いから、

人里で仕事を探すことにした。

霖之助さんのツケもあるしね。

服装は昨日とは別の黒い着物に通学鞆。

なんだかすごい違和感だけど、鞆はこれしかないし、

人里で制服は目立つだろうからこうなった。

人里までもう少しのところで、道の真ん中で倒れてる黒い人影を見つけた。

デジャヴを感じる。

「というか、確実にあの子だよな？」

「だって金髪と赤いリボンが見えるもん。」

「また行き倒れかい、ルーミア」

声をかけると、ルーミアはうつすらと目を開けて僕を見た。

「静也く、ごはんく」

「はあ、仕方ないな」

鞆の中からラップに包んだおにぎりを取り出してルーミアに手渡す。

ちなみにラップは能力で作った。

そのおにぎりをルーミアは大きく口を開けて数口で食べてしまった。

「おいしかった！ありがとう静也！」

「どういたしまして。ほら、服に土がついてるよ」

手の届かないだろう背中の中だけ払って、

残りはルーミアに自分でやってもらう。

体の前側を触るのはさすがにアウトだろうからね。

「ところで、静也はどこに行くの？」

「僕は今から人里に行くんだよ」

「本当!?じゃあ一緒に行くろう！」

「ルーミアも人里に行くの?」

「うん、寺子屋に行くの」

「寺子屋か・・・」

一昔前の文化なのは気づいてたけど、寺子屋と来たか。

時代的には江戸時代辺りなのかな?

「ほら、早く行こう!」

「ちよつ、待つてルーミア、引つ張らないで!」

ルーミアに手を引かれて走り出す。

ルーミアの足は思いのほか速かった。

やっぱりこういう所は、妖怪なんだな。

少年移動中

「着いたよ!」

「へえ、ここが寺子屋か」

ルーミアに案内されたそこは、一階建ての日本家屋だった。

「おや?ルーミアじゃないか。今日はずいぶんと早いな」

僕たちの声が聞こえたのか、中から白髪の女の人が出てきた。

「ん?君は初めて見るな。里のものではないだろう?」

「初めまして、僕は龍導院 静也といいます。

訳あつて博麗神社で居候をしている外来人です。

「なるほど、外来人か。私は上白沢 慧音。

この寺子屋の教師をしている。こちらこそよろしく」

「静也はご飯をくれたし、お世話もしてくれたんだよ!」

「そうか、良かったなルーミア。だったらきちんとお礼を言うんだぞ」

「うん! ありがとう静也、楽しかった」

目の前で笑顔を浮かべるルーミア。

こうして見ると、本当に人間みたいだ。

僕はしゃがんでルーミアと目線を合わせて、

鞆の中からもう一つのおにぎりを取り出してルーミアに手渡す。

「お昼に友達と一緒に食べていいよ」

「わは〜! ありがとう!」

ルーミアは

一瞬驚いた表情をした後、頭の上におにぎりを乗せて中に入っていた。

まさかあのまま授業を受けるつもりじゃないよね?

「君は変わった人間だな」

「そうですか？」

「妖怪が人間に懐くなんてそうそうあることじゃない。

私が知っている限り、そんなのは霊夢と魔理沙ぐらいなもんだ」

「あの二人ならそうでしょうね」

「ルーミアがずいぶんと世話になったようだし、

何かお礼をしたいんだが、何かないか？」

「そうですね。それでしたら、このあたりにどこか働き口を知りませんか？」

「働き口？仕事を探しているのか？」

「はい。住まわせてもらってるのに家事だけというのも霊夢に悪いですし、

ちよつとしたツケもあるので」

「律儀な男だな君も。働き口か、そうだな・・・」

慧音さんはしばらく考えた後、ちらりと僕の方を見た。

できれば力仕事は避けたいけど、贅沢は言えないな。

「見たところ、君には学がありそうだが、どうなんだ？」

「学ですか？確かに学校、

外の世界での寺子屋ではそれなりに成績は良かったですけど」

僕がそう答えると、慧音さんは笑顔を浮かべた。

僕、なんか嬉しくなるようなこと言ったっけ？

「そうか！なら私と一緒にこの教師をしてくれないか？」

「教師ですか？」

「ああ。前々からもう一人欲しいと思っていたんだが、

なかなか見合う人物がいなくてね。

君は妖怪にも好かれやすいようだし、ぴったりだと思うんだが、どうだ？」

「そう言うことは、ここにはルーミアのほかにも妖怪が？」

「うちの寺子屋には人間、妖怪、さらには妖精もいるぞ」

それを聞いて、僕に断る理由はない。

人と妖怪と一緒に学ぶ寺子屋、なんとも幻想郷らしくて素晴らしいじゃないか。

「分かりました。非才の身ではありますが、よろしく願います」

「そうかやってくれるか！それなら中で詳しい話をしよう」

こうして、僕の仕事は見つかった。

第13話 幼き思い

「今日から新しい先生が入ってきた。静也、挨拶を」

簡単な説明と担当教科を決めた後、

僕は慧音さんに連れられて教室にやってきた。

ちなみに担当教科は僕が語学と算学。

慧音さんが社会と歴史を教えることになった。

「初めまして、今日から新しく先生になった龍導院 静也です。

みんなと楽しく授業が出来るようにがんばるので、よろしくお願いします」

教卓の上立って教室を見渡す。

教室の中には数十人の子供たちがいて、一人一人を“視る”と本当にいろんな種族がいる。

人間の子供の横に羽や耳を生やしている子供が座っているのは何とも不思議な光景だ。

「それじゃあ後は頼んだぞ静也。私は奥の部屋にいるから、何か困ったことがあれば来てくれ」

「分かりました」

慧音さんが部屋を出て、足音が遠ざかったのを確認してから子供たちの方に振り向く。

「さて、それじゃあさつそく授業を始めようと思う。

それで一つ相談なんだけど、この時間は本当は算学の授業だよね？

だけど僕はみんなのことをよく知らないし、みんなも僕の事をよく知らない。

その状態で授業をしてもどうかと思うし、この時間は自己紹介の時間にしようと思うんだけど、どうかかな？」

僕の言葉に隣の子と目を見合わせる子供たち。

そして意味が理解できたのか、一様に笑顔を浮かべた。

「「さんせくいい!!」」

「よし、でもあんまり騒ぎすぎないでね。慧音先生に見つかったら怒られちゃうからね」
「慧音先生には怒られたくないな」

「うん。だって頭突きが飛んでくるもんね」

え？頭突き？

一瞬僕の聞き間違いかと思ったけど、他の子たちも口々に頭突きって言ってるからそうなんだろう。

慧音さんは一体どんな叱り方をしてるの？

相手が妖怪が多いから実力行使に出てるのかな？

「ま、まあ。とりあえずつまらない教本なんてしまつて、みんなで楽しもう！」

「は〜い!!」

「まずは僕から自己紹介をしようか。名前はさつき言つた通り龍導院 静也。

呼ぶときは好きに呼んでいいよ。実を言うと、僕は外人なんだ。

今は博麗神社で居候をさせてもらつてる。得意なことは料理だよ。よろしくね。

次はみんなの事を教えてくれ。一番右の席の子からお願ひ」

僕がそういて立ち上がったのは猫耳の生えた女の子だ。

「初めまして。私は橙といます。よろしくお願ひします、静也先生」

橙が座つて次に立ち上がったのはルーミアだった。

頭の上には僕が上げたおにぎり。

うん、次からは風呂敷か何かに包んでからあげよう。

「ルーミアだよ。よろしくね、静也」

次に立ち上がったのは青い服と髪の毛の女の子。その背中からは氷みたいな羽が生

えている。

「あたいは最強の妖精のチルノだ！得意なことは弾幕ごっこ！」

元気のいい子だ。あの羽からすると、チルノは氷の妖精かな。次に恐る恐るといったように立ち上がったのは、

緑色の髪と服を着て羽を生やしているおとなしそうな女の子。

「初めまして、私は大妖精といいます。みんなからは大ちゃんって呼ばれています。

よろしくお願いします、静也先生」

次に立ち上がったのは、背中から鳥の羽のようなものを生やしている女の子。こっちは妖怪かな。

「初めまして、私はミスティア・ローレイ。好きなことは歌を歌うこと。よろしくね、静也」

「はじめまして、わたしは……」

—————

どうやら、いらぬ心配だったようだな。

一度は部屋に帰ったもの、やはり心配だったから様子を見に来たんだが、

なかなか上手くやっているじゃないか。

生徒たちには妖怪も多いから、暴れでもしたら大変だ。

静也は腰に刀を下げていたから多少は戦えるようだが、それがどこまでかは分からな

い。

もしもの時は私が止めなければと思っていたが、早速生徒たちの心を掴んだようだ。やはり私の目に狂いはなかった。

静也を一目見た時から、彼からは不思議な魅力を感じた。

そしてルーミアと話す姿を見て私は確信した。こいつは本物だと。

元から教師には誘うつもりだったため、静也が職を探していると言った時は正直驚いた。

紅魔館の吸血鬼ではないが、まさに運命のように感じたのだ。

ん？どうやら自己紹介が終わったようだな。

あまり聞き耳を立てるのも悪いし、今度こそ部屋に戻るとしよう。

そうだ、今度妹紅にも紹介してやろう。あいつもきつと気に入るだろうしな。

――

「よし、今日の授業はここまでだ。みんな気を付けて帰るんだぞ」

「はーい」

昼を少し過ぎたところで寺子屋は終わった。

「静也先生、さようなら」

「さよなら」

いつも真や愛花の勉強は見てたけど、小さい子に勉強を教えるのは初めてだから不安だったけど、

何とか上手くいったみたいでよかった。

「静也！」

奥の部屋に慧音さんと戻ろうとしたら、後ろから呼び止められた。

振り返ってみると、そこにはチルノ、大妖精、ルーミア、ミステイアの4人がいた。

「どうしたのチルノ？」

「あたいと勝負だ!!」

「・・・はい？」

あまりにも突然の宣戦布告に思わず気の抜けた声が出た。

勝負って言うのと、やっぱりあれだよな？

「それはいいけど、何の勝負をするの？」

「もちろん弾幕ごっこだ！」

「ですよー。」

一応聞いてみたけど、やっぱりそうか。

いくら妖精とはいえ、見た目小さい女の子のチルノに刀は振るいたくないんだけど、どうするかな？

「やってやれ静也。弾幕ごっこはここでは遊びみたいなものだ。変に心配する必要はない」

なるほど、遊びと同じか。

霊夢と魔理沙もよくやってるみたいだし、遊びの中なら多少の怪我は仕方ないってとか。

・・・よし。

「いいよ。ただし迷惑にならないように里の外でやるよ」

「やったーあたいは先に行ってるから、静也も早く来てね！」

チルノは僕の返事も聞かずに飛んで行ってしまった。

「ごめんなさい静也先生。でも、チルノちゃんすごく楽しみにしてたから」

大妖精が申し訳なきさそうに言って、ミステリアも同じような顔をする。

4人の仲を微笑ましく思いながら、2人の頭をいつも愛花にしていたようになでた。

その感触に驚いたのか、2人は一瞬羽を震わせて僕を見上げてきた。

「ごっこじゃ弾幕ごっこは遊びと同じなんでしょ？つまりみんなは僕を遊びに誘ってくれたわけだ。」

「そう思うと僕は嬉しいよ。初めてでみんなに受け入れてもらってるか正直不安だったからね」

僕の言葉で2人は顔を見合わせてから笑顔を浮かべてくれた。

うん、やっぱり子供は笑顔が一番だ。

「ほら、そんなことよりも早く行かないとチルノに怒られちゃうよ」

「はい！」

「慧音さん、少し行つてきます」

「いや、遊び終わったらそのまま帰っていいぞ。明日も今日と同じ時間に来てくれ」

「分かりました。それではまた明日」

慧音さんに挨拶をして、3人に引つ張られるようにして歩く。

その途中でルーミアからも頭をなでるように催促されたのは、内緒だ。

第14話 氷精との遊び

最初に静也先生を見たときは不安でした。

私は同じ寺子屋に通う男の子にさえも話したことがほとんどなかったからです。

男の人の先生とうまくやっていけるのかな？

そんなことを思っていました。

でもそんな不安はすぐなくなりました。

自己紹介の時も、授業で問題が分からなかった時も、先生は笑顔で教えてくれました。

ルーミアちゃんは先生と知り合いだったみたいで、

ごはんの時にいろいろなことを話してくれました。

ルーミアちゃんが頭の上にのせていたおにぎりも先生がくれたものだそうです。

静也先生は、とっても優しい人です。

人里の外に向かいながら、私はそつと先生の横顔を覗く。

風に揺れるさらさらの黒い髪に同じ色の瞳。

私の視線に気づいたのか、先生がこつちを見て目が合う。

「どうかした、大妖精？」

「いえ、なんでもありません」

急いで目を離して前を見る。

私は自分でもわかるぐらい顔が赤くなってる。

ふと思いつ出したのはさっきの出来事。

誰かに頭を撫でてもらったのは初めてでした。

「見えてきたよ」

ミスティアちゃんの声で思考を戻すと、いつの間にか霧の湖についていました。

「静也、やっと来たのね。待ちあきたわー!」

湖の上にいたチルノちゃんも私たちに気づいたみたいです。

「それを言うなら待ちわびただよ、チルノ。」

それじゃあさっそく始めようか。3人は下がってて」

腰の刀を抜いて構える静也先生。

私たちもそれを見て距離を開けます。

「ねえ、大ちゃんはどっちが勝つと思う?」

「やっぱりチルノちゃんじゃないかな? 体格差は合っても、静也先生は人間だし」

私とミスティアちゃんはチルノちゃんが勝つと思っているけど、

ルーミアちゃんは違うみたいで首をかしげている。

「ルーミアは静也が勝つと思うの?」

「うーん、よくわからないけど、静也が簡単には負けないような気がするんだよね」

「でも静也先生は飛べないみたいだから、ずっと飛んでいけばチルノちゃんが有利じゃないかな?」

「まあ、見ていれば分かるよ」

2人の方を見ると、チルノちゃんがスペルカードを構えているところでした。

「一撃で倒してやる! 氷符『アイシクルフォール』!」

宣言と同時に氷型の弾幕が静也先生に向かう。

先生は一瞬構えたけど、その場にとどまる。

「やっぱりそうするよね、あのスペルカードなら」

ミスティアちゃんの言う通り、チルノちゃんのアイシクルフォールは正面にいれば弾幕が飛んでこないんです。

そのままスペルブレイクまで待つのだと思つてると、静也先生はチルノちゃんに向かって駆け出しました。

「え!?なんでスペルブレイクまで待たないの!?!」

正面が安全といつてもそれは一定の距離があるから。

近づけば近づくほど、弾幕は激しくなる。

静也先生は姿勢を低くして弾幕の嵐の中に飛び込む。

なのに一つも被弾することなくわずかな隙間に体を滑り込ませていく。

「すい〜」

思わずつぶやいていた。

「でもあの高さじゃ刀は届かないよね。どうするつもりなんだろう？」

チルノちゃんは木の中ほどのあたりを飛んでいて、確かにあの高さならジャンプしても届かないと思う。

「静也、左手に何か持っていない？」

ルーミアちゃんの言葉で静也先生の左手をよく見ると、確かに筒状の見たことのないものを握っています。

「スペルカード、複翼流中伝『あまよびのすいりゆう雨呼びの水龍さみだれ五月雨』！」

静也先生が手に持っていた物を空に掲げると、その中から青色の弾幕が打ちあがった。

それは空高く飛んでいき、途中で爆発すると無数の弾幕が降り注ぐ。

それに気づいたチルノちゃんがグレイズしようとするけど、

スペルカードの途中だったせいで動きが遅れて被弾してそのまま落ちていく。

「チルノちゃん!!」

そのまま落ちちると思ったけど、途中で静也先生が受け止めてくれました。

「大丈夫、チルノ？」

「うう、負けた！でも楽しかった！静也つて強いよね。最強のあたいに勝つなんてやるじゃない！」

チルノちゃんはすごく楽しそうに笑っている。

「静也、今度はみんなで遊ぼう？」

「もちろん。時間の許す限り楽しもう！」

静也先生は、陽が落ちて暗くなるまで私たちと遊んでくれました。

第2章 黒霧の変

第15話 覚醒への序章

「ここだよ、真」

「ほお、ここが香霖堂か」

僕が寺子屋の先生になって5日がたって、今日は寺子屋が休みだ。

そこで、真を香霖堂に案内した。

「こんにちわ」

「お邪魔します」

「おや、静也君じゃないか。いらつしやい」

店に入ると、霖之助さんは読んでいた本から顔を上げてあいさつをしてくれた。

「そつちの君は初めて見る顔だね」

「初めまして、霖之助さん。俺は篠宮 真、静也と一緒に幻想入りした外来人だ。よろし

く」

「こちらこそよろしく、真君。それで、今日はどういった要件だい？」

「武器を探しているんです。この店に槍はありますか？」

僕たちが来たのは真の槍を買うためだ。

槍術を得意としていながら、真は幻想郷に槍を持ってきていない。

素手でも戦えないわけじゃないけど、万全を尽くしておいて損はないだろう。

ちなみに、お金は幽々子さんが出してくれたそうだ。

「あるよ、少し待っていてくれ」

霖之助さんが店の奥に入っていく。

本当に何でもあるんだなこの店。

「しかし、幻想郷って感じがしない店だな、ここは」

真が近くに置いてあった二つ折りの携帯を手に取りながらつぶやいた。

「確かにね。この店においてある商品の多くは外界の、

僕たちにとってはない深いものばかりだからね」

「それだけに電気が無いのが残念だよな。お、CDプレイヤーまであるじゃないか」

「しかし、本当に槍まであるなんてね。僕の銃もあったからもしかしたらとは思っていたけど」

「まさに万屋だよな。そういえば、お前仕事始めたんだってな」

「うん。寺子屋で教師をしているよ」

「寺子屋とはまた古風な。だが、教師なんてお前にピッタリじゃないか」

「みんないい子たちばかりだよ。ただ、すれ違う時に時々羽に当たっちゃうんだよね」
「は？羽？寺子屋ではコスプレでも教えてるのか？」

「そんなこと教えるわけないでしょ。寺子屋には人間だけじゃなくて、妖怪や妖精の子供たちもいるんだ」

「すげえな幻想郷。本当に人と妖怪が共存してるのか。しかも妖精と来たか」

「こんな世界を作った紫さんはすごいよ」

「ちよつと胡散臭い奴だけど、いいやつだよな。能力はチート級だが」

「境界を操る程度の能力」なんて破格だよな。僕も初めて聞いたときは驚いたよ。

それだけじゃないと思うけど、幻想郷の賢者と言われるのもうなずける」

僕たちがそんな話をしていると、奥から霖之助さんが戻ってきた。

「お待たせ。これでどうだい？」

霖之助さんから槍を受け取ると、真はその場で数回素振りをした。

もちろん周りの商品にはかすりもしない。

真はそんなに下手じゃない。

「重さも長さもぴつたり、いい槍だ。さすがだな霖之助さん」

「気に入って貰えたようでよかったよ」

「買おう。いくらだ？」

「50慣文だよ」

50慣文を手渡す真。

何故だか劣等感を感じた。

「静也、早速これを使って練習試合をしようぜ」

「良いよ、僕も久々に真と・・・っ!？」

言葉を最後まで言わず、背後を睨む。

真も笑顔を収めて背後、窓の方を向く。

「真も感じた？」

「ああ。だがお前ほど敏感にじゃない、なんとなくだ。で、何を感じる？」

「僕もうまく言えないんだけど、何かに覆われているような感じ。」

これは、妖力か？とにかくそんな感じ」

霖之助さんに挨拶をして店を出ると、すぐに違和感に気づいた。

朝なのに、夜のように暗い。

そうなる理由なんて一つしかない。

空を見上げると、黒い霧が天を覆い尽くしていた。

「真、急いで博麗神社に戻るよ！」

「分かった。振り落とされないようにしっかりとつかまってるよ！」

真に手をつかんでもらって空を飛ぶ。

来るときはのんびり歩いてきたけど、そんな悠長なことは言ってもらえない。行き半分の半分の時間で戻ると、境内にはすでに霊夢が出てきていた。

「霊夢!!これは一体?」

「そういえば静也は初めてだったわね。これは異変よ」

「異変?」

「幻想郷では時々、普通じゃ考えられない不思議なことが起こる。

それを私たちは異変と呼んでるのよ。

そして、異変を解決するのが、博麗の巫女の仕事よ」

「おっ、霊夢!」

その呼び声に空を見上げると、魔理沙がこっちに向かって飛んできていた。

「霊夢、異変だぜ!早速解決に行こう!」

「魔理沙も行くのか?」

「お、真もいたのか。ああ、私も異変解決者の一人だからな」

「来るだろうとは思ってたわ。それなら早く行きましょ。

早く終わらせてゆっくりしたいし」

「行くって、心当たりがあるの?」

「ええ。色は違うけど、霧で空を覆う異変は過去にもあったわ。だからそいつの所に行くの」

異変か。確かに人知を超えた現象だ。

ただの人間、それも外来人である僕には関係のない話かもしれない。
だけど……

「待って霊夢、僕も連れて行ってほしい」

「静也も？」

「霊夢と魔理沙が強いのはよく知ってる。二人は僕よりもずっと強い。

だけど、なんだか嫌な予感がするんだ」

「予感って、そんな曖昧な」

「霊夢の勘も似たようなもんだぜ。私たちについてくれば、少なからず危険な目に合うぜ？」

「もちろん分かっている。それでも行きたいんだ」

「それなら私たちがどうこう言う資格はないぜ。

いいぜ静也、一緒に行こう」

「でも静也は飛べないでしょ、どうやってついて来るつもり？」

「俺が運ぼう」

「真も来るの?」

「静也が行くつてのに、俺が行かないわけがないだろ。」

それに、静也の嫌な予感ほど信用できるものはないからな」

「よし、そうと決まればさっそく・・・」

「まっつて魔理沙。誰か近づいてきてる」

魔理沙がやって来たのとは反対側の空に、黒い人影が見えている。

程なくして現れたのは、黒いスーツのような服に赤い長髪。

そして背中から羽を生やしている女の人だ。

その人は僕たちの近くまで飛んでくると同時に崩れ落ちた。

急いで駆け寄ってみると、あちこちに怪我をしていた。

「小悪魔、どうしてここに!」

「魔理沙、知り合い?」

「紅魔館つてところにある図書館の司書だ。」

普段は外に出ないお前がどうしてここに。それにこの怪我」

「助けて・・・ください・・・」

小悪魔と呼ばれた女性は、荒い呼吸をしながら話し始めた。

「紅魔館に急に黒い霧が立ち込めて、それを吸ったお嬢様や咲夜さんもおかしくなつて。」

異変に気付いた。パチュリー様が私だけ外に逃がしてくれましたけど、

門を出るときに、美鈴さんに・・・」

「美鈴がお前を襲ったのか!？」

「お願いです、霊夢さん、魔理沙さん。パチュリー様を、紅魔館のみんなを助けてください」

「元々紅魔館にはいく予定だったし、異変に関係があるのなら、なおさらいかな理由はないわね」

「ありがとうございます」

霊夢の言葉に安心して緊張の糸が切れたのか、小悪魔はそのまま気を失った。

気絶した小悪魔を布団に寝かせ、僕たちは飛び立った。

第16話 赤き門番

「吸血鬼？」

紅魔館へ向かいながらそこに住む住人について聞くと、霊夢は吸血鬼だと言った。

「そう。紅魔館の主とその妹は、500年近くを生きる吸血鬼よ。」

他には妖怪の門番、図書館の管理人である魔女、人間のメイドがいるわね」

「えらくいろんな種族が住んでるんだな。吸血鬼か、やっぱ負けると血を吸われて血の従者にされたりするの？」

「いや、あいつらはほとんど人間の血は吸わないぜ」

「それなら安心だが、それはそれで吸血鬼としてどうなんだ？」

そんな話をしているうちにチルノたちと遊んだ霧の湖を抜け、だんだんと大きな館が見えてきた。

「うわ、なんだここ？目に悪すぎるだろ」

「いくらなんでも赤すぎるわよね」

なるほど、その館は「紅魔館」という名も納得の紅さだった。

その館の門には、一人の妖怪が立っている。

赤く長い髪に、緑色のチャイナドレスを着た女の人だ。

「彼女が美鈴?」

「そう。紅 美鈴。紅魔館の門番をしている妖怪よ」

霊夢が言うように、彼女からは妖力を感じた。

「静也、あれどう思う?」

「明らかに普通じゃないね」

美鈴からは生氣のようなものを感じられず、まるでゾンビのように立っている。

なにより、瞳が黒く濁りきっている。

「で、誰が相手をするんだ?」

「私がやるぜ」

真の問いかけに魔理沙が答えた。

「美鈴は格闘戦こそ得意だが、弾幕の方はそこまでじゃない。だから魔法使いの私が遠距離から一気に片を付けてやるぜ」

「分かった。頼んだよ魔理沙」

「頼まれたぜ!」

箒にまたがって飛んでいく魔理沙。

そして美鈴から少し離れたところで止まった。

「おい美鈴、今日も本を借りに来てやったぜ！」

美鈴に向かって大声で話しかける魔理沙。

先にどのくらい意識が有るか確かめているみたいだね。

「お前たちに紹介したいやつもいるし、レミアアの所に案内してくれよ」

だけど美鈴は魔理沙の言葉に反応することはなく、無言で拳を構える。

魔理沙もそれを見て無駄だと判断したのだろう。

ミニ八卦炉を構えた。

「美鈴っていつもあんななのか？」

「いいえ。いつも居眠りばかりしているけど、わりと友好的な妖怪よ」

「普通じゃないってことだね。一体ここで何が起きてるんだ？」

「ま、中に入れば分かるわよ」

僕たちが視線を戻すと、ちょうど魔理沙がスペルを構えたところだった。

「先手必勝だぜ！星符『メテオニックシャワー』!!」

魔理沙の手から大量の星形の弾幕が放たれ、美鈴へと迫る。

美鈴は右へ左へと弾幕の隙間を縫っていくが、とうとう躲し切れなくなつて両手を交差させ防御の構えをとる。

そこに無数の弾幕が降り注ぎ、土煙が舞い上がった。

どうみても直撃だっただろう。

「ふうく、案外あつけなかったな。警戒して損したぜ」

「すごいな。これが魔法使いか」

「真は見るの初めてだよ。これが霧雨 魔理沙と言う少女の強さだよ」

「もはや普通の魔法使いってレベルじゃないだろ」

魔理沙が箒を肩に戻ってくる。

その表情は笑顔だ。

僕もつられて手を振ろうとするけど、魔理沙の背後で土煙が不自然にゆがんだ。

「魔理沙、まだだ！」

「は？」

魔理沙も後ろを振り返る。

そして土煙の中から美鈴が飛び出してきた。

「な!?!」

急いで空に逃げようとする魔理沙。

だけど一歩遅く、美鈴の蹴りが直撃して大きく吹き飛ばされた。

「ぐはっ!?!」

「魔理沙!?!」

「そんな、確かに直撃したはずよ!？」

「さっきの攻撃に耐えきったのか!？」

「まだ来るよ!!」

魔理沙へと追撃を仕掛ける美鈴。

魔理沙の動きは見るからに鈍っていて、今度は体に美鈴の拳が突き込まれ、吹き飛ばされた魔理沙は壁に叩きつけられた。

「まずいぞ、もう一撃くらったら!」

魔理沙にとどめを刺すべく迫る美鈴。

けれども魔理沙はすでにミニ八卦炉を構えている。

背中が壁だから、反動を気にする必要もなく全力を出すことが出来る。

「私を、舐めるな! 恋符『マスターズパーク』!!」

魔理沙の手から放たれる極太のレーザー。

すでに慣性のついていた美鈴がそれを避けられるはずもなく、光の奔流に飲み込まれた。

「やったか?」

「分らない」

真の問いかけに銃を取り出しながら答える。

もしもまだ立っているなら、無理やりにも割り込む必要があるだろう。

光が消えた時、そこには地面に倒れる美鈴がいた。

それを確認して、僕たちは急いで魔理沙に駆け寄る。

「へへ、やってやったぜ」

「そんなことより、大丈夫なの魔理沙？」

「ああ。体のそこらじゅうが痛むが、歩けないわけじゃない」

「よし、とうとう館の中だ。気を引き締めていこう」

第17話 七曜の魔女

次にやってきたのは館の地下にある図書館。

ここには小悪魔の言っていたパチュリーがいるらしい。

警戒しつつ奥へ入っていくと、通路の開けたところに彼女はいた。

月のアクセサリーをつけた紫色の長髪に、まるでパジャマのような服を着た少女だ。

やはり、彼女の瞳も黒色に染まっている。

「少しは期待していたが、どうやら手遅れだったようだな。

それで、今回は誰が相手をするんだ？」

「私が・・・」

「いや、僕が行こう」

霊夢の言葉をさえぎって、一歩前に出る。

「相手は魔女よ。刀を使うあんたじゃ相性が悪いでしょ」

「こちらの最大戦力である霊夢には、相手のお嬢様と戦ってもらいたい。

そして能力を聞く限り、メイド長と相性が良いのは真だろう。

ならば、彼女と戦うべきなのは僕だ」

「勝てる見込みはあるのね？」

「複翼龍を使えば僕も遠距離戦はできるし、

それに相手が魔女ということは、逆に言えば近づきさえすればこちらのもの。

大丈夫、勝てるよ」

僕の言葉に霊夢は少し考えるそぶりを見せた後、顔を上げた。

「分かった。必ず勝つてきて」

「もちろん」

「気をつけろよ静也。パチュリーは『七曜の魔女』の二つ名を持つてる。

『こと魔法の知識、扱える魔法に関して言えば、私以上だ』

「気を付けるよ」

黒龍を抜き、懐から銃を取り出して、最初から複翼龍の構えで行く。

そして、少し離れたところで足を止める。

「初めまして、パチュリー。すごい本の数だね。」

僕も本は好きでさ、いくつか見せてくれないかな？」

一応と思って声をかけてみる。

けど、パチュリーは無言で魔導書を広げ、足元に魔方陣を浮かべた。

駄目みたいだね。

仕方ない、やるしかないか。

「龍導流劍術皆伝、龍導院 静也。いぎ、推して参る」

低く姿勢を取り、一気に駆け出す。

霊夢にも言ったように、距離を置いておけば不利になるのはこちら。相手が反応をする前に、少しでも距離を詰める。

「スperlカード、日符『ロイヤルフレア』」

パチュリーが感情のこもっていない無機質な声で宣言すると同時に、巨大な球体型の弾幕が放たれる。

銃口を中心部に向けるけど、これじゃ相殺は無理だろう。

ならば!!

「スperlカード、二刀流『銀牙龍連』!!」

銃をしまい、素早く白竜を抜くと同時に相手のスperlに二閃。

剣の先から漸属性の弾幕を放ち、相手のスperlを両断する。

僕は記憶が戻った後、自分の弾幕の在り方について考えた。

魔理沙と戦った時のように、ただ弾幕をばらまくだけの戦い方に疑問を感じたのだ。

そして、妖夢の弾幕を見たときにたどり着いたのがこれだ。

刀で虚空を切り、その先から漸属性の付加された弾幕を放つ。

もちろん、撃てる数は激減するが、この弾幕は貫通する。

華やかさには欠けるが、これが一番しつくりくる。

「はあああ!!」

周囲から放たれる弾幕を切り裂きながらも、足だけは決して止めない。

そして、弾幕の影に隠れていたパチュリーが見えたと同時に、弾幕が止んだ。

スペルブレイクだ。

「行け、静也!!」

「ああ!!」

魔理沙の声に後押しされ、足にさらに力を入れて速度を上げる。

「この一撃で決める! 龍導二刀流剣術奥伝……」

「土符『レイジイトリリトン』」

あと少しで刀が届くという所で、パチュリーが次のスペルを唱えると同時に、僕の身長のはずばり、所々に魔方阵が浮かんでいる巨大な壁が出現した。

あれは魔術障壁か!? ならばあの壁ごと……だめだ、刀のほう折れる!!

すでに振りかぶっていた刀を下げ、壁に向かって飛び上がる。

壁に足がつくと同時に蹴り上げ、三角飛びの要領で後方に戻る。

「月符『サイレントセレナ』」

壁の向こうからパチュリリーが新たなスperlを宣言する声が出た。

その瞬間、僕の周囲に青色の魔方陣が浮かび上がった。

直感でまじいと感じ、白竜を鞘に納めて銃を抜いて二発発砲。

正面の二つを撃ち抜き、受け身も考えずに大きく後ろに飛ぶ。

空中で左右に2射、地面に背中から落ちた後も仰向けのまま上に向けてもう2射する。

計6つの魔方陣を打ち消したが、まだ後ろにいくつか残っていたものから光弾が放たれる

立ち上がってはい間に合わないので、膝立ちのまま前に転がることでこれを避ける。

「ふう、危なかったな」

さっきので弾を撃ち尽くしたから、制服のポケットから新しい弾を取り出そうとする。

けれど、突如おぞましいまでの寒気を感じ、

手を止めて辺りを見回すと、さっきと同様、いやそれ以上の魔方陣が浮かび上がっていた

「嘘でしょ……」

それはすでに準備を終えつつあるのか、光がどんどん強くなっていく。

「くっ?!」刀流『閃龍』!」

弾を取り出すために黒龍は地面に置いていたから、手に持っていた銃を投げ捨て、鞘から白竜を抜いて龍導流最速の抜刀術を放つ。

剣先から放たれた弾幕が前方の魔方陣を切り裂く。

けれど連射性に劣る僕の弾幕はこれが精一杯。

前方に向かって体を投げ出して避けようとするも、

大量の魔方陣から放たれる魔法すべてを避けきれず、一つが被弾し爆発した。

被弾時の痛みを感じる暇もなく爆風に吹き飛ばされ、

すぐそばにあった本棚に叩きつけられた。

「ガハッ!!」

肺の中の空気が一気に押し出され、背中に激痛が走る。

思わず手にしていた刀を落としかけたけど、それだけは意地で握りしめる。

棚を支えにして立ち上がった所で、三度青色の魔方陣が僕を取り囲む。

「これはちよつと、まずいな・・・」

僕のほほから、一筋の冷たい汗が滴り落ちた。

第18話 黒龍の翼

「静也！」

俺達が見守る前で、静也がパチュリーの魔法の直撃を受けて吹き飛ばされた。

さっきのレイジトリトンといい、ロイヤルフレアといい、

ずいぶんと手持ちのカードの多い奴だ。

魔法自体の威力でいえば魔理沙のほうが一段上だろう。

だが、魔法の多彩さはパチュリーのほうが上だな。

さっきのサイレントセレナも、

あの連射速度を知っていれば、初撃で弾倉を空にはしなかつただろう。

「もう我慢できないぜ！」

それまで静也の戦いに大きく騒ぎながら見ていた魔理沙が、

箒にまたがりながらそんな声を上げた。

もしかしなくてもあの戦いに介入する気だ！

「待て魔理沙！」

「どうして止めるんだ！」

「これは静也の戦いだ。邪魔をするんじゃない」

「私じゃ足手まといだって言うのか!？」

「そうじゃないが、魔理沙はさっきの戦いで疲れてるだろ」

「だったら、私が行くわ」

それまで一切口を開かなかった霊夢が、突如口を開いた。

「私はまだ戦つてないし、あの壁を飛んで越えることができる。」

私なら足手まといにはならないわ」

「それこそ駄目だ。さっきの静也の言葉を忘れたのか?」

「そんなことは分かっているわよ!でも・・・」

「信じるんだ。静也のことを」

俺の言葉に何とか落ち着きを取り戻したようで、二人は動きを止めた。

しかしこの二人の反応、まさか・・・。

魔理沙のほうは何となくそうなんじゃないかと思っていたが、霊夢もそうだったとは。

博麗の巫女は他人に興味がないと聞いていたが、これは認識を改めねえとな。

「一刀流『輪籠』」

一度刀を鞘に戻し、右足を軸に回転しながら放つ抜刀術。

敵に囲まれた時のためのもので、周囲の魔方阵を一刀の元に切り裂く。

しかしこの弾幕ごっこには高低差があり、上方には今だに魔方阵が残っている。

だがそれは所詮下向きの攻撃。

発射と同時に大きく右に飛ぶことで何とか回避する。

自分でもはつきり分かるぐらい、動きが鈍っている。

あの魔法は予想以上のダメージだった。

このままではいづれやられる。

パチュリーを倒そうにも、空を飛ばない僕ではあの土壁を越えることができない。

銃も黒龍も手放し、残るのは白竜のみ。

やはり、ここは霊夢に任せるべきだったのか？

霊夢ならあの壁も簡単に越えられるだろうし・・・いや駄目だ。

敵にまだ上がいると分かっているながら、霊夢を疲弊させてはそれこそ愚策。

空を飛べる真もやはりメイド長相手に必須。

僕の選択は正しい。

後は僕がどうやって勝つかだけだ。

考えろ、考えるんだ。

どうすればあの壁を越えられる？

捕捉されないように走り続けながら、周囲に目を走らせる。

ただどこここには、どこまでも本しかない。

これだけじゃ・・・いや、待てよ。

本棚と本棚との間は決して広くない。

そして今やってるのは弾幕ごっこだ。

この距離なら、スペルカードを使えば!!

ポケットの中から白紙のカードを取り出して念じる。

頼む、出来てくれ!!

僕が見つめる先で、白紙のカードに羽を広げている龍の姿が浮かび上がった。

出来た!これなら・・・

新しいスペルを握り、壁に向かって一直線に走る。

壁にたどり着いたところで、また魔方陣が浮かび上がる。

白竜を振り抜き、魔方陣を切り裂く。

上方のものを。

そして魔方阵が輝きだすと同時に、スペルの宣言をする。

「スペルカード！龍翼あまかけるつばさ！天駆ける翼あまかけるつばさ！！」

さつきと同様に壁に向かって大きく飛び、足が当たると同時に蹴り上げる。しかしさつきと違い、後ろには飛ばずに右側に飛ぶ。

その先にあるのは本棚。

今度は本棚を蹴り上げ、左側の本棚へ。そしてもう一度壁に。

それを繰り返して高度を上げていく。

一瞬でもタイミングを間違えれば地面に落ち、そこを狙い撃ちにされ終わりだ。

危険な賭けだが、賭ける価値は十分にある。

そしてついに、あの巨大な壁を越えた。

パチュリーは壁の近くに立っており、呪文の詠唱を始めている。

今度こそ決める！！

「龍導りゆうどう！一刀流剣術奥伝りゅうくわうせん！『龍空閃』！！」

刀を大上段に構え、重力に従って落ちると同時に、

落下エネルギーをも刀に乗せて振り下ろす。

「せいっっ！！」

パチュリーが防御型の魔方陣を展開させたが、構わずに一閃。

魔方陣と刀が衝突し、動きが一瞬止まったが、魔方陣ごとパチュリーを切り裂いた。仰向けに倒れこみ、気絶するパチュリー。

気を抜かずに見ていた僕は確かに見た。

パチュリーの体から、黒い霧のようなものが出て行ったことを。

「ふう、何とか勝てたか」

それを見届けてから白竜を鞘に納め、一息をつく。

背後を見れば、術者が気絶したことにより壁が崩れているところだった。

壁が完全に崩れたところで、落としていた黒龍と銃を回収してから3人の元に戻る。

「やったな、静也！」

「ありがとう魔理沙。戦ってる時も、魔理沙の声は聞こえてきたよ」

「へへっ！」

「よくやったわ。お疲れ様」

「ありがとう、霊夢」

「しかし、よくあんなトリッキーな動きができたな」

「場所とスペルカードのおかげだよ。どちらかが抜けていれば負けていたさ。」

それよりも、次に出てくるのはおそらくメイド長。頼んだよ、真」

「ああ、お前が勝ったんだ。俺もしつかり後にくさ」

第19話 銀のナイフと煌めきの長槍

地下の図書館を出て、僕たちはホールにやってきた。

そこには、霊夢の予想通りの人物がいた。

銀色の髪にメイド服を纏った少女。

「彼女が、十六夜 咲夜？」

「そうよ。紅魔館唯一の人間で、“時を操る程度”の能力を持つメイド長よ」

「誰しもが一度は憧れる能力だよな。実際にいたとは驚きだが」

「気を付けてね真。この霧、単に操っているだけではないような気がするんだ」

「了解だ。それじゃあ行っていくわ」

咲夜に向かって歩いていく真。

その手にはさつき買ったばかりの槍。

「そういえば、真の弾幕ごっこを見るのは初めてだな。実際の所はどのくらい強いんだ

？」

「見てれば分かるよ」

魔理沙に不敵な笑顔を浮かべてそう返す。

魔理沙は少し不満そうにしたけど、言葉で説明するよりも見たほうが早い。百聞は一見に如かず。

どうせすぐに始まるんだからね。

真が咲夜にある程度近づいた途端、咲夜は足のホルスターからナイフを取り出して投げた。

まだ槍を構えていなかった真だけど、慌てることなく槍でナイフを叩き落した。

「おいおいご挨拶だな。さつきまでの二人はこっちが話しかけるまで待つてくれたぞ？」

真の言葉もやはり届いた様子はなく、無言で新しいナイフを引き抜く咲夜。

真もまた下げていた槍を上げて構える。

「篠宮流槍術目録、篠宮 真。」

女の子の手前かつこ悪い姿を見せるわけにもいかないんでね。

死なない程度に本気で行かせてもらおう」

僕らが見ている前で、咲夜の姿が忽然と消えた。

初見なら驚いていただろうけど、

霊夢からの事前情報のおかげで何が起きたのか理解できる。

時間を止めてその間に別の場所に移動したんだろう。

それが分かっても、どこに移動したのかまでは分からない。

敵の意表を突くことにおいてはまさに理想的な能力だ。

だけど、真の能力の前に奇襲は意味を成さない。

右から飛来してきたナイフを叩き落とし、

続けて左から飛んできたナイフは槍を横に一閃させることで薙ぎ払う。

前後から同時に飛んできたナイフは槍を回転させることで無力化する。

僕には出来ない、重くリーチの長い槍だからこそ出来る技だ。

「すごいわね。能力を事前に知っていたとはいえ、

咲夜のナイフを全く寄せ付けてないわ」

「よくナイフが飛んでくる方向が分かるな。

時を止められてるのに」

「真の能力は『感覚を操る程度』の能力。

真はその能力を使って自分の五感を最大限まで上げてるんだ。

そのおかげでわずかな情報で相手の動きを捉えてるんだ。

もし僕が彼女と戦っていたのなら、ここまで上手くは立ち回れなかっただろう」

「幻想入りしてまだ日が浅いのに、もう自分の能力を使いこなしてるのね」

「もう一つ理由はある。真の篠宮流槍術の元は龍導流だ。」

彼女は時間を止めることで周囲から一斉に攻撃しているけど、それは疑似的な一対多の戦闘と同じ。

龍導流の使い手に取って、これは最も得意とする状況だ」

龍導流の使い手に一対多の戦闘を仕掛けるなど愚の骨頂。

咲夜がああ戦い方を変えない限り、彼女に勝ち目はないだろう。

もつとも、今はそれに気づけるだけの理性が有るようには見えないけどね。

「でも、なんで真は自分から攻撃しようとしなないんだ？」

真はさつきからナイフを弾くばかりで、散発的にしか弾幕を放っていない。

「あれが真の強みなんだ。真の強みはああの性格に似合わずに忍耐力。

相手の攻撃をいなし、一瞬の隙に必殺のカウンターを叩き込む。

それが真の戦い方なんだ」

「なんかまどろっこしい戦い方だな」

確かに見てる分には地味かもしれない。

でもあの戦い方は誰にでもできるわけじゃない。

相手がこちらの意表を突かない限り、あれが敗れることはそうそうない。

「幻在『クロックコープス』」

咲夜が初めてのスペルカード宣言をしてナイフを投げた。

真もそれに対処しようと槍を構えた。

けど瞬き一つの間、目の前のナイフが増えた。

「な!?瞬槍『刹那の空隙』!」

真もスペルカードを宣言。

一度引かれた槍が、目にも止まらない速さで横に振るわれた。

ギリギリの所ではあつたけど、何とか全てのナイフを打ち払った。

「ふう、今のは危なかったぜ。やっぱ時間を操れるつてのは強力だな」

槍を戻しながら真がつぶやいた。

本当にその通りだ。

「・・・『咲夜の世界』」

咲夜が連続してスペルカードを宣言。

目の前から再び咲夜の姿が消えた。

そして咲夜が姿を現したとき、真の周囲全てをナイフが取り囲んでいた。

けどそんな状況の中で、真は不敵に笑っている。

「どうやら待っていた時が来たみたいだね。」

「この距離まで近づいてくるのを待っていた!」

重圧『グラビティドロップ』!!」

真が手にしていた槍を地面に突き刺す。

すると、黒い半透明状のフィールドが広がり辺りを包み込んだ。

それは当然、真を取り囲んでいたナイフと咲夜も飲み込む。

その途端、浮かんでいたナイフが勢いよく地面に落ち、咲夜が地面に膝をつける。

そしてその頭上には白色の弾幕が形成されている。

真が手を振り下ろし、弾幕が降り注ぐ。

煙が晴れたとき、咲夜はうつ伏せに倒れていた。

「やったぜ!!」

「あの咲夜を圧倒するなんて、なかなかやるじゃない」

「いや、そうでもないぞ。相手に深く踏み込ませるために余裕ぶつてはいたが、

実際の所は一杯一杯だった」

「何はともあれ、お疲れ様真」

第20話 幼き吸血鬼たち

咲夜を倒した僕たちは、この館の玉座の間へとやってきた。

そしてこの部屋にいるのは、当然この館の主だ。

僕の目の前には二人の小さな少女がいる。

片方は青色の髪に蝙蝠のような羽を生やした少女。

もう一人は金色の髪に宝石のような羽を生やした少女。

おそらく前者が姉のレミリア、後者が妹のフランドールだろう。

二人の瞳も、やはり赤黒く濁っている。

「それじゃ、いつてくるわね」

「僕も行こう。霊夢の強さは信賴しているけど、やっぱり数的不利は大きい。

援護くらいは、僕でも出来る」

「ダメだ静也、行くなら私が！」

「右腕」

「つつ!?! 気づいてたのか?」

美鈴との戦いの後、魔理沙は確かに普通に歩いていた。

けど僕は見逃さなかった。

魔理沙が時折、右腕をかばうようなしぐさをしていたことを。

「魔理沙の利き腕は右。その腕で満足に戦えるのかい？」

「・・・だったら真が行くのはどうだ!?パチュリーの一撃を受けた静也と違って、真は咲夜の攻撃を一撃も受けなかっただろう！」

「残念だけど、真も無理だよ。さっきの戦いで真は常に能力を全開にしていた。

外傷はなくても、激しく疲弊しているはずだよ。

「そうだよね真？」

「・・・静也の言う通りだ。正直な話、さっきから体を動かすのもだるい」

「だから僕が行くしかないんだ」

「けど・・・」

なおも言いつのろうとする魔理沙。

そんなにも僕の身を案じてくれるのが嬉しくて、

一歩近づいて魔理沙の頭を思わず撫でていた。

「大丈夫、僕を信じて」

「・・・分かったぜ」

魔理沙に笑いかけて、霊夢のほうを向く。

「いいよね、霊夢。迷惑はかけないと約束するから」

「……いいわよ。でも危なくなったらすぐに下がるのよ」

霊夢は少し悩んだけど、許してくれた。

—————

静也と並んでレミリアの所に向かう。

なぜだかわからないけど、安心している自分がいる。

静也の横顔をちらりと見て、すぐに正面に向き直る。

いろいろ考えるのは後よ。

今はこの異変を解決しないと。

それに、静也は嫌な予感がすると言っていたけど、

ここにきてから私の“勘”も同じものを感じた。

この異変はたぶん、私が今まで解決してきたどの異変とも違って、普通じゃない。

けど引くわけにはいかないの。

異変解決は博麗の巫女の仕事。

これは私がやらなければならないことなの。

「もうすぐだよ霊夢。準備は良い？」

静也の声に思考を戻すと、いつの間にかずいぶんと近いところまで来ていた。

「ええ、大丈夫よ」

「しかし、吸血鬼というから怖い人なんだろうと思っていたけど、あの見た目とはね」
「レミリア！宴会がしたいなら付き合ってあげるから、

この霧晴らしてくれないかしら？」

そう言うけど、私はこの異変の主犯がレミリアだとは思ってない。

カリスマだなんだとうるさい奴だけど、彼女の誇りは本物だと知っているから。

私は単に、レミリア達の意識がどのくらいあるのか確認したかっただけ。

他の住人は駄目だったけど、レミリアとフランは吸血鬼。

幻想郷でも随一の力を持つ二人なら、もしかしたら・・・

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「禁忌『レーヴァテイン』」

私の言葉に何も返すことなく、レミリアは真紅の槍を。

フランは紅蓮の大剣を手元に出現させた。

それを見て、私は札を取り出し、静也は黒龍に手を添えた。

「守龍の心得。護衛対象、博麗 霊夢。我が身は汝の盾と為らん」

静也が小さくつぶやく。

そういえば、ルーミアと会った時も同じことを言ってたわね。

かけ声みたいなものかしら？

私は能力を使って空に浮くと、レミアも翼をはためかせて空を飛ぶ。

どうやら空中戦で私とレミア。

地上戦で静也とフランが戦うみたいね。

多次の戦闘になるけど、やれないことはないわね。

辺りを一瞬の静寂が包み込む。

「霊符『夢想封印』！」

「紅符『スカーレットシュート』」

「一刀流初伝『閃龍』！」

「禁弾『スターボウブレイク』」

それぞれの弾幕がぶつかり合い、世界を紅色に染め上げた。

第21話 地に墜ちし龍

僕のスペルとフランドールのスペルが衝突し、

景色を一瞬紅色に染め上げる。

視界が閉ざされているが、構わずに正面に駆け出す。

弾幕ごっこはお世辞にも上手いとは言えない僕。

それならばすぐにでも近接戦に持つていくべきだろう。

フランドールも大剣を持っていたけど、体格差は大きい。

いくら吸血鬼とは言えども、正面から負けることはないだろう。

世界が色を取り戻す。

正面にはかなり近い位置まで近づいたフランドール。

けど僕の予想と違い、しっかりと大剣を構えている。

この展開は読まれていたか。

けれども関係ない、正面から斬り伏せる！

「龍導一刀流劍術中伝『崩龍』!!」

敵の構えを崩すための一刀流で一番の威力を誇る技。

これであの大剣を弾き、すぐさま白龍を抜いて返す刀で勝負を決める！
フランドールは大剣を縦に構えて防御の構え。

構わずに一閃。

けれども僕の渾身の一撃を受けても、フランドールの小さな体は全く揺らがなかった。

「うそ……でしょ……くっ！」

白龍を抜き、二刀流に変更して連続で剣を振るう。

それなのに、僕よりもずっと小さなはずの体は僅かも揺らぐことはない。

まるで岩を切っているような感覚だ。

今までも刀の効かない相手はいた。

けれども、いくら剣を振るっても全く動じないのは初めてだ。

ちらりと霊夢のほうを確認すると、向こうも完全に膠着状態のようだ。

弾幕が飛び交う高速戦闘が行われている。

早く援護しないと！

僕はさらに一步深く踏み込む。

けれどそれがいけなかった。

わずかに力を緩めた一瞬で、フランドールが大剣を振り上げる。

予想のできていなかったその動きにこちらが弾かれた。

「しまった!？」

そのすきにフランドールが大剣とは思えない速度で踏み込んでくる。殺られる!!

けれどもフランドールは後ろに下がった。

何が起こったのか理解できないうちに、いくつもの弾幕が降り注いだ。「ボケつとしないで、相手は吸血鬼よー見た目で判断しちゃダメー!」

「ありがとう霊夢、助かった!!」

援護するはずが、逆に助けられてしまった。

焦りばかりが募る。

視線を戻せば、フランドールが手にスペルカードを握っている。

「禁忌『フォーオブアカインド』」

どんなスペルかと身構えてると、フランドールが4人に分裂した。それぞれが大剣を構え、一斉に突撃してくる。

一対多の戦闘。

本来なら龍導流が最も得意とする状況。

けれどそれは攻撃が通じるならの話だ。

正面からの攻撃を流し、左右から同時に襲い来るのはかがんで回避する。最後にそのまま前転をして後ろからの攻撃を回避する。

「天罰『スターオブダビデ』」

レミアアの声に視線を上げれば、霊夢がレミアアのスペルをグレイズしていた。けれども動きにキレがない。

霊夢のトレードマークである紅白の巫女服もかなりのホコリをかぶっている。

まずいな、早く何とかしないと。

けれども焦った所で何にも解決しない。

今は耐えて好機を伺うんだ！

一対多の戦闘、守りに徹すればどうとでもなる。

再び一斉に突撃してくるフランドール。

初めの方こそ回避することが多かったけど、

徐々に全ての攻撃を流せるようになってきた。

そしてついにフランドールが一人に戻った。

スペルブレイクだ。

その一瞬の隙を見逃さない。

「龍導二刀流剣術初伝『双龍』!!」

フランドールは大剣を構えてはいるが、さつきよりも力が入っていない。
これならいける！

黒龍と白龍に渾身の力を籠め、一気に振り下ろす。
けれども、運命は非情だ。

フランドールのレーヴアテインと黒龍がぶつかり、
今までは全く違う金属音が鳴り響く。

黒龍が、刀身の真ん中から折れていた。

僕がずっと愛用してきた刀。

それが折れて、僕は一瞬呆然としてしまった。

その隙を、フランドールは見逃さない。

大剣を正面に構え、突きを放つ。

それは正確に、僕の左胸を貫いた。

「ガハッツ!!」

フランドールが僕の体から大剣を引き抜く。

そのまま地面に倒れこみ、紅い床でもわかる血だまりが広がっていく。

霊夢や魔理沙、真の叫び声がとても遠いところから聞こえてくる。

体が冷えていく感覚とともに、僕の意識は完全に闇に閉ざされた。

第22話 黒き龍帝

気が付くと、僕は漆黒の空間にいた。

自分の姿さえも見えない深淵の闇。

「……ま」

僕は、死んだのか？

脳裏に蘇るのは黒龍が折れ、フレンドールのレーヴアテインが僕の体を貫いた記憶。

「……様」

僕の能力で強度を上げていたとはいえ、フレンドールの剣は炎を上げていた。

その熱に耐えられなかったんだろう。

「……帝様」

僕は、また守れなかったのか？

全てを守るなんて思ってたかった。

けど、せめて守りたいと思ったものだけでも守りたかった。

けれど結局、何一つ守れなかった。

すまない、霊夢。

ごめん、魔理沙。

後は頼んだよ、まこ……

「龍帝様」

その声を認識した途端、目の前を光が包んだ。

恐る恐る目を開けると、8体の巨大な龍が僕を取り囲んでいた。

「これは、いったい？」

「貴方様が目覚めるのを、我ら一同心待ちにしておりました」

「僕が目覚めた？ 一体何に？」

僕の目の前にいる薄緑色の鱗を持つ龍が話しかけてくる。

「陰陽師にです。元より幻想郷に来たことで高まっていた靈力が、

貴方様が命の危機に瀕したことで、血の中に眠る力が完全に目覚めたのです」

「僕が、陰陽師？ じゃあ、君たちは何者？」

「我々は八龍王。代々龍導院家に仕えてきた護法式にございます」

「……式神」

「はい。我々は初代龍導院家当主により下され、式神の契約を結びました。

故に、我々は主のことをこう呼びます。

龍王と龍神の間の存在、即ち龍帝と。

我々は“龍の加護を与える程度”の能力を持っています」

そこで言葉を区切り、一体を残して一步下がる龍達。

残されたの炎のように真っ赤な鱗を持つ龍。

「八龍王が一柱、一ノ龍・炎龍。与える加護は身体強化」

次に出てきたのは美しい蒼色の鱗を持つ龍。

「八龍王が一柱、二ノ龍・水龍。与える加護は五感強化です」

次に出てきたのは深緑色の鱗を持つ龍。

「八龍王が一柱、三ノ龍・木龍。与える加護は基礎治癒能力の上昇です」

次に出てきたのはさつきまで僕に話しかけていた龍。

「八龍王が一柱、四ノ龍・風龍。与える加護は追い風」

次に出てきたのは鋭い鋼色の鱗を持つ龍。

「八龍王が一柱、五ノ龍・金龍。与える加護は変換だ」

次に出てきたのは茶色の鱗を持つ龍。

「八龍王が一柱、六ノ龍・土龍。与える加護は硬化じゃ」

次に出てきたのは白く輝く鱗を持つ龍。

「八龍王が一柱、七ノ龍・聖龍。与える加護は霊力の上昇にございます」

最後に出てきたのは漆黒の鱗を持つ龍。

「八龍王が一柱、八ノ龍・冥龍。与える加護は侵蝕だよ
それが終わると、また風龍が口を開いた。

「龍導院家現当主、龍導院 静也。

黒き龍帝、黒龍帝よ。どうぞ、我らを御身のお側に」

「御身のお側に」

そういつて頭を下げる八龍王。

僕の式神、それも護法式だ。

断る理由などない。

「僕は強くなりたい。守りたいと思つたものを、守れるぐらいに。

その為に、力を貸してくれるかい？」

「もちろんです、龍帝よ。貴方様の願ひは、我らの願ひでもあるのですから」

「分かつた。龍導院 静也の名の下に、汝らを式神と認めよう」

「感謝いたします、我が主よ。命尽きるその時まで、御身の側に」

その言葉を最後に、八龍王達は光の粒子になつて僕の中に入つてきた。

「ところで、僕はどハマリ？」

僕が尋ねると、頭の中に直接声が聞こえてきた。

「僕は主の心の中です。現在主は気絶している状態です。」

このままでは確実に出血多量で死に至ります。

ですので向こうに戻り次第、木龍の加護で傷を塞いで下さい)

「分かった。頼んだよ、木龍」

(はい。お任せください、主様)

そして、再び視界が光に包まれた。

第23話 龍王の加護

「・・・うっ！」

腹部の鈍い痛みで意識を取り戻す。

薄く目を開けると、見えたのは赤い絨毯の床。

そして耳には僕の名前を叫ぶ真と魔理沙の声。

「木龍よ、汝が加護を我に・・・」

(はい。すぐにでも)

かすれた声でつぶやくと、僕の体を温かな緑色の光が包んだ。

すると、腹部の痛みが薄まり、傷がみるみるふさがっていく。

これが木龍の加護、想像以上だ。

立ち上がって前を見てみると、霊夢が2対1で戦っている。

あの二人を相手にできる霊夢はさすがだけど、防戦一方の状況だ。

床に落ちていた白竜と銃を拾いあげ、すぐさま発砲。

弾は躲されたけど、三人を一旦離させることはできた。

「静也!? フランに斬られたはずじゃ?」

「説明は後、来るよ霊夢！」

一度は動きを止めた二人だったが、再びフランドールが僕の方に向かってくる。その隙に、僕は霊夢を霊視する。

霊夢が持つのは、光の気。

「聖龍よ、汝の加護を与え給え！」

(かしこまりました)

霊夢の体を白い光が包む。

するとさつきまで相打ちだった霊夢の弾幕がわずかにレミリアを押し始めた。

「なにこれ、威力が上がった!?!」

「霊力は気にしなくていい。全力で行くんだけ！」

「よくわからないけど、分かったわ！」

目線を前に戻せば、フランドールが剣を振り上げていた。

その軌道を読み、前転してレーヴァティンを躲して背後に回り込む。

速さや読みは決して負けていない。

勝つために必要なのは、彼女の脅力に負けない力。

「我が身に宿れ、炎龍！」

(御意)

僕の体を赤い光が包み、体の奥から力が湧いてくるのを感じる。

白龍を右手に持ち替え、フランドールに向かって振り下ろす。

フランドールは剣を横に倒すことで防いだけど、

そうなることは分かっていた。

手を止めずに連続で刀を振るう。

袈裟斬り、逆袈裟斬り、横薙ぎ。

同じ個所を狙わず、

多種に渡る軌道をランダムに繰り出すことで相手に剣筋を読ませない。

さつきはびくともしなかった小さな体が、今は少しずつ後ろに下がっている。

このままならいける!!

(主よ、このまま剣を合わせていけばいずれ白竜をも折れてしまうぞ)

炎龍の声に冷静さを取り戻す。

黒龍ほどではないが、白竜もレーヴァテインと打ち合わせていた。

このままフランドールが防御に専念すれば、白竜がどうなるのかは明白だ。

(ありがとう炎龍。おかげで気づけたよ)

(礼には及ばぬぞ、主よ)

しかしどうする？銃倉はすでに空、残っているのは白竜のみ。

すぐに決着をつけようにも、白竜一本ではそれも難しい。
どうすればいいんだ？

フランドールへの手は止めず、頭の片隅で考える。

本来であれば詰みの状態だ。

けれど今なら・・・

(金龍、君の変環で作りに出したものは加護を変えても残るかい?)

(帝の霊力が消えない限り、残ります)

それなら行ける。

フランドールに全力で刀を振るって怯ませた後、後ろに下がる。

(金龍、汝の加護を)

(了解)

僕の体を銀色の光が包む。

白龍を地面に刺し、手の中に刀をイメージする。

わずかに霊力が抜ける感覚とともに、手の中にイメージ通りの刀が出来ていた。

霊力で作られたこれなら、炎で折れることもないだろう。

(炎龍、もう一度頼む)

(お任せを)

両手に刀を作り終わると、すぐに炎龍の加護に戻す。

そして今気づいたけど、刀もわずかに赤く光っていて、炎の気を帯びているみたいだ。

（炎龍、フランドールが持つのは炎の気で合っているかい？）

（彼の者は二つの気を持っているようですが、炎と言っているのでしょうか）

（分かった。ありがとう）

それだけ聞ければ十分だ。

足に力を込めて一気に駆け出す。

フランドールもまた大剣を大上段に構えて速度を上げる。

このままいけば正面からあたるが、もちろんそんなことはしない。

右へひねっていた体を利用して急制動をかけ、

左へと反転し、正面から剣を振り下ろしたフランドールの左側に抜ける。

「水龍よ、我に加護を与え給え！」

（了解いたしました）

理性を感じなかったから大丈夫だと思っただけ、

確実に勝つためにこのタイミングで加護を切り替える。

右の剣を上から打ち付け、左の剣は下から振り上げる。

戦闘が始まってから一度も変わらなかったフランドールの顔が、

一瞬苦痛にゆがんだ。

陰陽師の基本、五行相克。

水克火だ。

フランドールの火の気を、水の気で打ち消しているんだ。

左の剣で横薙ぎに払い、右の剣で柄の部分を持ち上げる。

そしてついに、フランドールの手から大剣が吹き飛んだ。

「もらった！ 龍導二刀流剣術奥伝『華血赤龍』！』」

二刀流の二つあるうちの奥伝の一つ。

雄々しき龍は、戦いで浴びた敵の血でさえも美しい。

それ故に刹那の時間に二閃の斬撃を繰り出す。

水龍の加護を受けた刀が、ついにフランドールを捉えた。

もちろんこれは弾幕ごっこ。

斬った所から血が出るのではなく、フランドールは力が抜けて仰向けに倒れた。

そしてやはり、その体から黒い霧のようなものが抜けだしていった。

それを見届けてから視線を前に向けると、

霊夢のスペルがレミアを倒したところだった。

それを見届けて、僕も肩から力を抜く。

厳しい戦いではあったけど、何とか勝つ事が出来た。

第24話 漆黒の統治者

地面に刺していた白竜を鞘に納めたところで、
ずつと漂っていた禍々しい妖気が消えた。

どうやら、外の黒い霧が晴れたみたいだね。

「ふう、ようやく終わったか」

「そうね、終わったわ」

独り言のつもりだったんだけど、いつの間にか近くに来ていた霊夢が返事を返した。

「霊夢、おつか・・・」

「せいっ!」

「ぐっ!」

お疲れ様、そう言おうとした僕の鳩尾に霊夢の右ストレートが突き刺さった。

あまりの痛みに、思わず両膝をつく。

「なん・・・で・・・?」

「なんで?自分の胸に聞いてみたら?」

「霊夢の言う通りだぜ」

痛みで後ろは見れないけど、声で誰かは分かる。

弾幕ごっこが終わったから、魔理沙がこっちに合流してきたんだろう。

たぶん、真も一緒だ。

「あんまり心配させないでよ」

眩くような霊夢の言葉に理解する。

そっか、心配かけたのか。

（主様、癒しましょうか？）

（必要ないよ木龍。これは僕が感じるべき痛みだ）

思わず苦笑いを浮かべながら立ち上がる。

「ごめん魔理沙、霊夢。もっと気を付けるようにするよ」

「にしても、なんで傷が一瞬で回復したんだ？能力を使ったのか？」

どうやって切り出そうか考えていたところに、真のその疑問はありがたい。

僕は皆から少し離れてから振り返る。

「あれは僕的能力じゃないよ。」

人の傷が一瞬で回復する、なんてことは世の中の理に反しているからね。

彼らのものだ。みんな、出ておいで！」

僕の周りに立ち上る八つの柱。

そこから現れるのは龍王達。

「龍、なのか?」

「おいおい、これは何の冗談だ?」

真と魔理沙のつぶやきも、まあ理解出来るかな。

我ながらこの光景は圧巻だ。

「皆様初めまして。我々は八龍王。」

黒龍帝、静也様の式神にございます」

「式神? 藍みたいってこと?」

「その藍って人を知らないけど、たぶん違うと思う。」

八龍王達は完全な……つつ!? 風龍!!」

僕の空気の変化を感じ取ったのか、すぐさま霊体に戻る八龍王達。

僕に風龍の加護が付き、隣に霊夢が並ぶ。

その手にはお祓い棒と札。

霊夢も何かを感じたみたいだね。

後ろでも魔理沙は戸惑っているけど、真は僕の動きを見て槍を構えた。

(主よ、どうされたのですか?)

(何か、いる)

「そこにいるのは分かつてる。出てきたらどうだい！」

白龍を構え、正面に向かって叫ぶ。

しばらく無音の時間が過ぎ、勘違いかと思ひ始めたころ、何もない空間から声が響いた。

「驚きましたね。博麗の巫女には気づかれるだろうとは思っていましたが、

まさか貴方にも気づかれるとは」

まるで最初からそこに居たと言わんばかりに、突如その男は現れた。

背は僕よりも少し高く、短くそろえた銀髪を持つ男だ。

その腰には、一本の剣。

「あなたがこの異変の主犯ですね？」

白龍を突き付けながら聞くも、男はわずかに微笑を浮かべるだけだ。

そして僕の右隣、誰もいないはずの空間に向かって話し始めた。

「見ているのでしょうか？私も姿を現したのですから、

そちらも姿を見せるのがフェアというものではありませんか？」

その言葉に答えるかのように、いや、実際答えたのだろう。

僕の右隣に以前も見たスキマが現れ、そこから紫さんが出てきた。

紫さんは一瞬僕に目配せをした後、男に向き直った。

「さて、私がこの異変の主犯かという話でしたね。

答えから申し上げるのなら、その通りです」

その答えは予想できていた。

レミリア達は操られていただけ。

黒い霧の異変にしたのも、霊夢たちをここに呼び寄せるため。

その目的は、おそらく偵察だろう。

「幻想郷はすべてを受け入れる。とは言え、それを決める権利もこちらにあります。

私は貴方のようなものを招き入れた覚えはないのだけど？」

さすが紫さんだ。

僕と同じ考えに至ったのだろう。

僕とは違う切り口で情報を集めようとしている。

「そうでしょうね。何せ私は勝手にこの世界に来たのですから」

「ええい、まどろっこしい！お前の目的はなんだ!!」

我慢の限界だと言わんばかりに声を上げた真。

けれどもあれは演技だ。

僕や紫さんがいきなり核心を突く質問をすれば、わずかに違和感が残る。

だが今まで口を開かなかった真が突如声を張り上げれば、それも残らない。

口に出さずとも役割を理解してくれる親友が、今は何よりも心強い。
「私の目的ですか？」

そうですね、あまり引つ張るのも好きではありませんし、お答えいたしましょう」
目の前の男が今までの微笑から笑顔を浮かべる。

しかしそれは、見るものを恐怖させる笑みだ。

「私の目的はただ一つ。陛下の願いをかなえること。」

そして陛下の願いとは、幻想郷、ひいてはすべての次元の統一です」

「すべての次元？」

「あなたはパラレルワールドと言うものをご存知ですか？」

いわゆる並行世界というものですね。

それらの世界は時に絡まり、時に反発しあっています。

我々はそれら全てを一つにまとめ上げるのです」

男の口から語られる嘘のような目的。

けれども嘘をついてるようには見えない。

体に戦慄が走った。

この男は、本気でそんなことを考えているんだ。

「パラレルワールドとか並行世界とかよく分かんないけど、

異変を起こすって言うなら退治するだけよ！」

霊夢の力強い言葉に気付かされる。

そうだ、何も難しく考える必要はない。

ただ僕の守りたいものを守ればいいんだ。

(風龍、いつでもも行けるように準備をしておいてくれ)

(かしこまりました)

「いかに私と言えども人間の英雄、妖怪の賢者、

さらには黒龍帝までいるこの状況で勝てるとは思えませんよ。

今回はここで退散させていただきます」

「なぜその呼び方を知っている!?!」

黒守龍というならばまだ理解できる。

けれど黒龍帝という呼び名は僕でさえもさつき知ったばかりだ。

真や霊夢たちさえも知らないことを、なぜこの男が知っている?

「さて、なぜでしょうね?」

「逃がさないわ」

紫さんが開いていた扇子を閉じると、男の背後にスキマが現れる。

男の能力は分からないが、境界を操る能力を持つ紫さんなら・・・

「なるほど、これがかの有名なスキマの力ですか。

しかし、ぬるいですね」

男が腰に差していた剣を一閃。

それだけだ。

たつたそれだけでスキマが消滅した。

「そんな、私のスキマが!？」

「それでは皆様、ごきげんよう」

「待て！お前はさつき我々と言った。他にも仲間がいるのか!？」

「これはいけない、私としたことが忘れるところでした。」

我々は漆黒ダークネスブルーの統治者。

いずれまたお会いしましょう」

その言葉を最後に、男は出てきたのと同じように姿を消した。

第25話 幼き吸血鬼の思い

「うっ……」

わずかな体の疼きと共に、私は目を覚ました。

周りを見渡してみると、

少し大きめに作った客室に私を含めた紅魔館の住民全員が寝かされていた。

一体誰が？

それにこの数のベッドをわざわざ運んだの？

「うう……」

その声に顔を向けてみれば、ちょうど咲夜が目を覚ましたところだった。

「咲夜、おはよう」

「おはようございます、お嬢様。しかし、これは一体？」

「そう、私たちを運んだのは咲夜じゃないのね」

咲夜をさかいに次々と目を覚ましていったが、やはり誰も覚えていなかった。

私達が頭を悩ませていると、扉がノックされた。

そして入ってきたのは腰に刀を差している人間の少年。

なぜだか私は、初めて会うはずのこの少年を知っている気がする。

「全員目が覚めたみたいだね。良かった」

「失礼ですが、あなたは？」

「僕は龍導院 静也、外来人だ。昨日の異変の後、

気絶している皆を放っておけなくてしばらく面倒を見ようと思ってね」

「静也が私たちを助けてくれたの？」

「僕だけじゃないよ。霊夢達も一緒だよ。フランドール」

「フランドールで良いよ」

「分かった。話したいことはいろいろあると思うけど、まずは朝食にしよう。

すぐに持ってくるね」

一度部屋を出た後、静也は皿と鍋をのせたワゴンを持ってきた。

静也がふたを開けると、芳醇な香りが部屋中に広がった。

「いい匂い」

私は思わずつぶやいていた。

「吸血鬼だから、何となくのイメージでトマトスープを作ってみたんだ。

口に合えばいいけど」

そのスープはジャガイモとキャベツが入っているだけのシンプルなものだったけど、

だからこそ、そのおいしさが際立っている。

「おいしい」

「これは・・・」

「こんなおいしいの、初めて食べました」

「私より上手いなんて」

「おいしい！」

「それは良かった。おかわりはまだたくさんあるから、好きなだけ食べてね」

「おかわり！」

「早いな。慌てて食べなくても大丈夫だよフラン」

「だっておいしんだもん！」

「あの、私もいただけますか？」

「私も欲しいわ」

美鈴にパチエ、咲夜もすぐに二杯目を受け取った。

もちろん私もだけど。

「食べながらでいいから聞いてほしい。昨日あったことを話すよ」

少年説明中

「漆黒の統治者か。」

八雲　紫の能力が効かなかつたとすると、その男は相当強力な能力を持つてるのね」
「あれは、本当に能力によるものだったのか？」

「静也、何か言った？」

「いや、何でもないよ。まあ、彼らのことを気にしてもしょうがないよ。

考えるには情報が少なすぎる。それよりも、レミリアに聞きたいことがある」

そう言うのと、静也は一步私に近づいてくる。

その表情は笑顔だけど、黒い瞳には強い光が宿っている。

「紅魔館が当主、レミリア・スカーレットに聞きたい。

君にとつて、こここの住人はどんな存在だい？」

試されている。直感でそう理解した。

だからこそ私は、思いをそのまま口にする。

「従者であり、友であり、そして何よりも大切な家族よ。

少なくとも私はそう思っているわ」

「お嬢様……」

「レミィ……」

咲夜とパチエに笑顔を向ける。

どんな存在かだつて？

そんなの家族以外の何だつて言うの？

「素晴らしい答えだ。レミリア、君にお願いがある」

「何かしら？」

「君の大切な者たちを、僕にも守らせてほしい」

「・・・え？」

「僕は決めたんだ。守りたいと思つたものは、今度こそ守り抜くと。だから・・・」
刀を見ていた静也が顔を上げて私の目をのぞき込む。

「僕に、君を守らせてくれ。レミリア」

心臓が跳ねた気がした。

心臓の鼓動が早くなつて、顔に血が上つてくるのが分かる。

こんなのは初めてだ。

「あら、守ってくれるのはレミイだけなのかしら？」

「お姉さまだけじゃない」

「そんなことはないさ。」

この館の主を守ることは、この館そのものを守ることと同義だ。

だから僕はレミリアに聞いたんだ。答えを聞かせてほしい」

静也がその黒曜石のような瞳で私を見る。

それだけでうまく言葉が出てこなくなる。

「そ、そうね。お願いするわ静也。私達を守ってちょうだい」

その答えを聞いて、静也は地面に片膝をついた。

その様は、まるで忠誠を誓う騎士のよう。

「黒守龍……いや、黒龍帝の名に懸けて誓おう。」

ここにいる全員を、必ず守って見せる」

しばらくそのまま静也は立ち上がって笑顔を浮かべた。

「まじめな話はここまでにしよう。みんな寝ているだけじゃ暇でしょ？」

いろいろ持ってきたから、暇つぶしをしよう」

一度部屋を出た静也は、今度はワゴンにいろいろな物を入れてきた。

「さあ、どれにする？」

私たちはそれぞれ希望の品物を言って、静也がそれを手渡してくれた。

私はチェス、フランは絵本、咲夜は手編みセットを受け取った。

美鈴はそのまま眠るらしい。

「ねえ静也、図書館から本を持ってきてくれないかしら？」

「悪いけど、それはできない」

「なんでよ？」

「図書館にあるのって、ほとんどが魔導書でしょ？」

魔導書は読むだけで体力を使うんだから。

今は体を休めないといけないうし、体の弱いパチュリーならなおさらだよ。

本が読みたいなら、ここにあるので我慢して」

「分かったわ。じゃあその赤い本を取ってちょうだい」

「これだね。はい」

「ありがと」

「静・・・」

「お兄様！」

チェスを一人でやるのもつまらないから静也に相手を頼もうと思ったら、

フランに先を越されてしまった。

「お兄様？それって僕のこと？」

「うん！・・・だめ？」

「好きに読んでいいよ、フラン」

「えへへ！ねえお兄様、この絵本読んで！」

「読み聞かせか、いいよ。ただ・・・」

静也が私の方に目を向ける。

良かった、私の声も聞こえていたのね。

「確かにチェスは一人じゃできないよね。」

「どうしようか……」

「静也、掃除終わったぞ」

聞いたことのない声とともに、一人の少年が入ってきた。

「真、ちようどよかった。しばらくレミアアの相手をしてくれない？」

「レミアア？レミアアって確かこの館の当主……なるほどな。」

「いいぜ、相手をしてやる」

その少年は椅子を持ってきて私の前に座った。

「篠宮 真だ。よろしく頼む」

「レミアア・スカーレットよ。私達を助けてくれたこと、礼を言うわ」

「その必要はないぜ。俺達が勝手にやった事だからな。」

そんなことよりも早いこと始めようぜ。先攻は譲るからよ」

「あら、チェスは先手有利のゲームよ。それでもいいのかしら？」

「レディファーストさ」

「ふふ、なら遠慮なく受け取るわ」

真とチェスをしながら、横目でちらちらと静也達の方を伺う。

フランは本当に嬉しそうにしている、パタパタと動く羽がそれを物語っている。どうにも集中できないわね。

私はルークを動かす。

「なにっ!?ぐぬぬ・・・」

まあ、それでも負けないけど。

真はビシヨップを動かす。

私はそれをクイーンを使って取る。

「チエック」

「・・・まじかよ」

真はキングをどこに動かしても、私のクイーンとルークから逃げることはできない。

いわゆる詰みの状態ね。

「参った」

「よくねばったほうだと思うわよ」

「こんなに強いんなら先攻を譲るんじゃないやなかった」

「そういう問題じゃないと思うよ」

いつの間にか静也がこっちに來ていた。

「フランはどうした?」

「寝ちやったよ。やつぱりまだ疲れてるんだらう」

周りを見てみると、私以外みんな寝ていた。

「レミリアは眠くない？」

「そうね、そんなに疲れは感じないわ」

「さすが。それなら次は僕が相手をしようかな。真、代わってくれる？」

「良いぞ。むしろ代わってくれ。俺じゃレミリアの相手は務まらない」

今度は静也とチエスを始める。

最初は私のほうが勝っていたのに、いつの間にか逆転されていた。

「チエックメイト」

「私の負けね。さすがね静也」

「お褒めに預かり光栄だ。僕は夕食の準備を始めるね」

静也と真が夕食を持ってきたころには、私たちもある程度回復した。

二人はそれを見てから、日が落ちたころに帰っていった。

第26話 決意の理由

辺りにたくさんさんの桜の木が立ち並ぶ庭先。

春になれば咲き誇り、見るものを楽しませるだろうそこで、金属の激しくぶつかり合う音が響きあっていた。

「どうした静也、いつもより剣筋が鈍いんじゃないか？」

「真こそ、穂先がぶれてるんじゃない？」

「ぬかせ！」

「はっ！」

お互いの獲物を弾き、正眼に構える。

そして間を空けずにまた距離を詰める。

けれども真はそれを見てニヤリと笑った。

僕は急制動をかけて後ろに飛ぶ。

「多弾『マルチシューティング』！」

真の背後から小さいながらも多くの無数の弾幕が形成され、

僕が通るはずだった場所に降り注いだ。

「忘れんなよ静也。ここは幻想郷だぞ」

「なるほどね。確かに真の言う通り、ここは幻想郷だね」

僕は懐から銃を取り出して構える。

「ここからは幻想郷らしく、弾幕ごっこといこうか」

「突槍『白銀の……』」

「複翼龍『龍砲……』」

「あの、すいません……」

僕と真は同時に武器を上に向けた。

間違つて撃つてしまつても、誰にも当たらないようにするためだ。

まあ、この幻想郷じゃ上に撃つても誰かに当たるかもだけど。

声から予想してたけど、いつの間にか縁側に妖夢が来ていた。

「どうしたの妖夢？」

「幽々子様が師匠と真さんと呼んできてほしいと言って、奥の部屋で待っています」

「分かった。すぐに行くよ」

「勝負はお預けだな」

真は槍を背中からい、僕は鞘に刀を収めて銃をしまう。

そして妖夢の案内で幽々子さんの所に向かう。

私と幽々子が部屋で待っていると、しばらくして静也と真が入ってきた。

さつきまで運動をしていたのか、わずかに汗をかいていた。

二人は私を見ると少しだけ驚いた顔をした。

「紫さんも来ていたんですね」

「どちらかというと用があるのは私よ。とりあえず二人とも座ってちょうだい」

「分かりました」

この場の空気で読み取ったのか、二人とも武器を自分の横に置いて正座をした。

「単刀直入に言うわね。私の能力が安定したわ。」

今なら二人とも安全に外の世界に返してあげる事が出来るわ。

貴方達が望むのなら、今すぐにでも。どうする？」

私のその言葉を受けて、静也は静かに目を閉じ、真は横目で静也のことを見ている。

けれどその表情は、この先の静也の答えを分かり切っているような表情だ。

「紫さん。僕がここに残りたいと言ったら、許してくれますか？」

「なぜ？今を逃せば、次が来るとは限らないのよ？」

「分かっていきます。それでも僕はここに残りたいんです。

この間の男、僕が今まで感じてきた事が無いほどとてつもない嫌な予感がしたんです。

だから僕は少なくともこの件がかたずくまでここにいたいんです。

僕が守りたいと思ったこの世界のために」

「どうして静也はそんなにこのことを思ってくれるの？」

隣にいた幽々子が扇子で口元を隠しながらそう聞く。

いつもはふわふわとしている友人だが、今の目はとても鋭い。

静也達よりも後ろにいる妖夢が緊張してしまうほどに。

静也はその視線を正面から受け止める。

「ここが、僕の理想の世界だからです」

「静也の理想？」

「僕の一族は、外の世界で人に悪を成す妖魔の退治を任せることもあります。

けれど僕は、それが嫌だった。

確かに悪行を働いているのなら罰を与えるべきだ。

けれどそれが人では無いからと言って、

命を奪うだけなのは間違っていると思っていました。

人も、そうでない者達も、きつと分かり合えると思つていました。でも誰も僕の話を書いてくれなかった。

身内も、相手の妖魔も。

話を聞いてくれたのは真と愛花、それといとこの少女だけ。

僕があきらめかけていた時、一人の妖怪が初めて僕の話を書いてくれたんです。

その妖怪はタヌキの妖怪だった。

そしてその妖怪は言つたんです。

『人と妖怪、ひよつとするとそれ以上の者たちが共存する、

そんな夢のような世界が存在するのかもしれない。

その世界に出会つたのなら、お主は正しいと証明されるじやろう。

それまでせいぜいあげばよい』

そう言われました。

今にして思えば、彼女は幻想郷のことを知つていたのかもしれない。

だからこそ僕は、この世界を守りたい」

「そう、真はどうするの？」

「おいおい紫さん、その質問は野暮つてもんだぞ。

俺だけ先に帰るようなら、初めからこの世界に來ないさ。

「静也が残るって言うんなら、当然俺も残る」

私は嬉しくなった。

私の作った世界を、外の世界の人間がこんなにも良く思ってくれるのだから。

「強い敵と戦うのなら、それだけ強い武器が必要でしょ？」

私は二人の前にスキマを開いて、それぞれの武器を置く。

真には一本の槍を。

静也には二振りの刀と一丁の銃を。

「その槍と刀は決して折れず、

銃は弾切れこそあれど弾を取り出し、リロードする必要はないわ」

「すいこ」

「なんでもありかよ幻想郷」

「それらに名前はないわ。好きにつけてちょうだい」

二人はそれぞれの武器を手に取り、眺め始める。

「ではこの出会いに感謝して。」

この白銀に輝くほうを、妖刀『魂絶』。黒い刀身を持つほうを冥刀『夜桜』。

銃を紫銃『空虚』と名付けましょう」

「俺は静也ほどのネーミングセンスは無いからな。」

無難に『イモータルランス』とでも名付けようかね」

「あら、とつても素敵な名前ね」

「この世界を頼むわね、二人とも」

「もちろんです。何があつても、守り抜いて見せる」

「ま、出来るだけのことはするさ」

そして二人は、それぞれの新しい武器を試すために、庭に出て行った。

二人がいなくなつた部屋で私は考える。

二人の力を信用してないわけではないけど、それでも数の力は大きいだろう。

それに何より、このままでは彼女の精神状態が危険だ。

そろそろ迎えるべきね。

三人目の外来人を。

私は目の前にスキマを開くと、その中に入っていく。

第27話 全ては貴方のために

「う．．．ん．．．」

窓から漏れ出る光で私は目を覚ました。

辺りを見渡して、ここが自分の部屋じゃないことに気が付いた。

「そっか。寂しくてお兄ちゃんの部屋に来て、そのまま寝ちゃったんだ」

お兄ちゃんがいなくなってもうずいぶん経つ。

部屋の中から『白龍』と『黒龍』が無くなってたから、

連れ去られたんじゃないと思う。

でも、家族に何も言わずにお兄ちゃんがいなくなるなんて信じられない。

それに、お兄ちゃんがいなくなつてすぐに真もいなくなつた。

真のことだから、お兄ちゃんを探しに行つたに決まつてる。

私はもう、何日も学校に行つてない。

もしかしたらお兄ちゃんが返ってくるかもしれないと思うと、家から出られない。

それなのに、ずっとお兄ちゃん心配してたお父さんたちが昨日、

信じられないことを言い始めた。

『愛花、静也のことはもう気にしなくていい』

『え？なにそれ？もうお兄ちゃんのことなんて、どうでもいいってこと！』

『ち、違う愛花、そういう意味じゃ・・・』

『信じられない！お父さんがそんな薄情な人だとは思わなかった!!』

そのまま私はお兄ちゃんの部屋に駆け込んだ後、そのまま寝ちやたんだ。

もう一度お兄ちゃんの布団に倒れこむ。

抱きしめている枕から香るお兄ちゃんの匂いが、だんだんと薄くなっていく。

それが、お兄ちゃんがだんだんと離れていくみたいに感じて、怖い。

「会いたい。会いたいよ、お兄ちゃん」

泣かないって決めてたのに、思わず涙があふれだしてきた。

「寂しいよお兄ちゃん。私このままじゃ、おかしくなっちゃいそう」

不意におながが鳴った。

そう言えば、昨日の夜から何も食べてなかった。

でも、食欲無いな。

もう一度目をつぶる。

せめて、お兄ちゃんの夢を見たいな。

そのままもう一度眠ろうとする。

その直後に布団から跳ね起きて、

お兄ちゃんが机の中に隠している護身用のダガーを取り出して構える。

「誰？私のこと見てるのは分かってるよ」

「驚いたわね。てつきり塞ぎ込んでるんだと思ってたけど」

「なめないで。私は龍導院家の長女。」

それに何より、お兄ちゃんの妹なんだから！」

「流石ね。龍導院 愛花。」

私の目の前に不気味な裂け目が現れて、そこから一人の女の人が現れた。

「安心しなさい、あなたに危害を加える気はないわ」

私はしばらくその人を見た後、ダガーを下ろす。

「一応信じてあげる。でも妙な真似をしないでね。」

私の「目」をなめないで」

「もちろん知っているわ、桃守龍。」

それとも、「龍眼の弓兵」と呼んだほうがいいかしら？」

「そんなことを話しに来たわけじゃないでしょ？」

私の通り名を知ってるってことは、ただの妖怪でもないだろうし」

「貴方を幻想郷に招待しに来たのよ」

「幻想郷?どこなの?」

「人と妖怪、それ以上の種族が共存する世界。」

「そして何よりも重要なのは、静也がいる世界よ」

「お兄ちゃんが!!」

「真もいるわ。もちろんあなたも来るでしょう?」

「当たり前だよ!どうやったらいけるの!?!」

「このスキマに入ってちょうだい」

「私はすぐさまその裂け目に駆け込む。」

「お兄ちゃんがいる。」

「それ以外の理由なんて私にはいらぬ。」

「せつかちね。どこに落とそうかしら・・・」

「そうね、あそこがいいわ」

第28話 桃色と紅

周りに目がたくさんある不気味な空間が終わると、私は深い森の中にいた。

そしていつの間にか、私の手には一つの弓が握られていた。慌てて腰を見ると、ご丁寧な矢筒もある。

「どんな手品を使ったの？ 感覚が全然なかった」

紫つて名乗ってただけ、やっぱりただものじゃない。

改めて弓に目を向ける。

僅かに青白く輝いていて、ただの弓じゃなさそう。

今度はその弓を“視る”。

この弓自体にも霊力が流れていて、神器まではいかないけど、それに近いものを感じる。

「これを使えってことなのかな？ まあ、良い武器は嬉しいけど」
私は試しに矢をつがえて放ってみる。

矢は私の思い通りの軌跡を描いた。

うん、使えそう。

一瞬私の中から靈力が抜ける感覚がした。

なるほどね、矢は私の靈力から作られるんだ。

なら矢の本数を気にしなくていいな。

「おーい！早く行こうよ!!」

奥の方から女の子の声が聞こえた。

森の中をその声の方に向かっていくと、広い湖に出た。

「あれ？声が聞こえたと思っただけで、見当たらないな・・・」

空を見上げてみると、羽を生やした小さな女の子たちが空を飛んでいた。

「まるで妖精みたい。本当に人間以外も普通に暮らしてるんだ」

私は思わず笑ってしまった。

お兄ちゃんが望んでいた世界、やっと見つかった。

「つて、こんなことしてる場合じゃなかった！早くお兄ちゃんを見つけないと!!」

私は矢を背中からうと、走り出す。

そう言えば、あの紫にお兄ちゃん場所を聞いてくればよかった。

いつも稽古の時にお兄ちゃんに言われてるのにな。

どれくらい走っただろう？目の前に一面真っ紅な館が現れた。

「なにこの館？目に悪すぎじゃない？」

でもこの人に聞けば、お兄ちゃんがいるところを知ってるかも。ちよūd門の前に女の人が立ってた。

でもその人、立ったまま寝てる。

「あの、すいません・・・」

声をかけてみるけど、全然起きる気配がない。

どうしよう？流石に勝手に家に入っちゃだめだよね。

うゝん、門の前にいるってことは、たぶん門番だよね？

それなら・・・

私はその人の一瞬だけ殺気を送る。

その途端、目の前の女の人はすぐさま目を開いてこぶしを構えた。

でも私が弓を構えていないのを見ると、こぶしを下ろした。

「敵が来たのかと思いました。見ない顔ですね。どちら様ですか？」

私は紅 美鈴と言います」

「私は龍導院 愛花です。少し聞きたいことがあるんですけど、良いですか？」

「龍導院？少々お待ちください」

美鈴さんは駆け足で館の中に入っていった。

あの様子だとお兄ちゃんのことを知ってるみたいだね。

いきなり当たりを引くなんて、さすが私！

お兄ちゃん、すぐに行くからね。

「ふふ、今夜が楽しみで仕方ないわ。

こんなにわくわくしたの、一体いつ以来かしら？」

昨日、霊夢がここにやってきて、今夜宴会をやることを告げて行つた。

この間の異変と、静也と真の歓迎会を兼ねてやるそうだ。

もちろん、私達紅魔館も全員が参加する。

いつもは外に出るのを嫌がるパチエも、今回はすぐに行くといった。

私は椅子に座つて咲夜の入れた紅茶を飲む。

早く夜にならないかしら。

「お嬢様、少しよろしいでしょうか？」

「良いわよ。どうしたの咲夜？」

「龍導院を名乗る少女が館の前に来ているそうです。」

「いかがいたしますか？」

「龍導院ですって？」

静也と同じ苗字、偶然とは考えにくいわね。

まさか静也には、すでに伴侶がいたと言うの？

「その少女の見た目は？」

「背中に弓をからっており、とても小柄な少女だったそうです」

「私が対応をするわ。ここに連れてきてちょうだい」

「かしこまりました」

龍導院を名乗る少女、見極める必要があるわね。

第29話 少女達の邂逅

「いつまで待つてればいいんだろう?」

別にそんなに時間は立つてないんだけど、

門の前に一人で待たされるのも退屈だな。

「お待たせいたしました」

私の背後から女の人の声があった。

近づいてくる気配がなかった。

よほど気配を消すのがうまいのか、それとも一瞬でここに来たのか・・・

まあ、考えても仕方ないか。

後ろを見ると、銀髪でメイド服を着た女の人が立っていた。

「この館のメイド長を務めております、十六夜 咲夜と申します。

お嬢様の元へ案内いたしますので、どうぞこちらへ」

先に歩き出したメイドさんの後に続いて私も館に入る。

館の中には、さつき見た妖精みたいな娘達がメイド服を着ていた。

あれがメイド?」

「さっきの門番の人も妖怪でしたけど、この館に人間は何人いるんですか？」
「やはり、お分かりになるのですね。」

「それも龍導院の“眼”ですか？」

「やっぱり、お兄ちゃんのことを知っているんですね」

「なるほど、静也様の妹様でしたか。」

その話は私ではなくお嬢様と。この中にいらつしやいます」
私が案内されたのはこの館でもひと際豪勢な扉の所だった。

お嬢様の部屋なら当然か。

「お嬢様、件の少女を連れてまいりました」

「いいわ。入りなさい」

中から聞こえた声は思いのほか幼かった。

でも私はほかのことに気を取られてた。

扉越しからでも感じる濃厚な妖力。

紫さんは上手に隠してたみたいだけど、

それは自分の妖力を隠せるだけの実力が有るってこと。

ここのお嬢様って、どれだけの化け物なの？

それなりの修羅場を潜ってきたつもりだけど、私の頬を冷汗が流れた。

これは、下手なこと言えないな。

私は一度深呼吸をして扉を開けた。

「紅魔館が主、レミリア・スカーレットよ。

ようこそ、龍導院の少女」

あの羽からすると、吸血鬼かな？

「龍導院家が長女、龍導院 愛花と申します。

以後お見知りおきください」

「龍導院家の長女ということは、静也の妹ね。

かしこまる必要はないわ。静也には随分と世話になったのだから」

「おに……、兄を……存じなのですね。

よろしければ、居場所を教えてくださいませんか？」

「その前に一つ提案があるわ。あなた、このメイドになる気はないかしら？」

「……へ？何言ってるの？」

予想外の言葉についていつもの口調が出てしまった。

慌てて口を押えるけど、レミリアさんは怒る様子はなかった。

「メイドなんて無理だよ。それに、お兄ちゃんと一緒の家がいい」

「残念だけど、居候を二人抱えられるほど霊夢に余裕はないわ。

あなたも強いようだけど、

野宿ばかりで生きていられるような優しい世界ではないわよ、ここは「うっ！でも、村ぐらいならあるでしょ？そこで・・・」

「突然やってきた少女。」

それも外来人に、そう簡単に仕事が見つかるとは思えないけど」

「それは・・・そうかもだけど・・・」

「ふふふ・・・」

うわー、これ苦手なタイプ。

お兄ちゃんと一緒に、だんだんと私の反論の内容を消していく。

レミリアさんも軍略家タイプだ。

「ここなら衣食住の心配はいらないし、仕事も咲夜がきちんと教えるわ。

ちやうど今夜宴会が有るから、静也とはそこで合えるわよ。

どうする？あなたの選択肢は、それほど多くないと思うけど」

・・・はあ、仕方ないか。

「分かりました。よろしくお願ひします、お嬢様」

「ふふ、あなたは今日から私の妹の専属メイドよ。」

頼んだわよ、愛花」

第30話 示すべき証

黒霧の変と言われる異変から3日が立った。

僕は宴会の準備をするために白玉楼を訪れていた。

「なるほどね、お前もなかなか大変だったんだな。」

ならなおさら、次の人生じゃもつと上手くやれるんじゃないか？

過去を振り返るのも大事だが、思い切って新しいことを始めるのも大事だと思うぞ」

「真、何やってるの?」

白玉楼の庭先で真は人魂相手に何かを話していた。

確か、死んだ人の魂とは話ができないはずだけど。

「なに、ちよつとした仕事さ」

「仕事?」

「居候させてもらってるのに何もしないのはさすがに息苦しいからな。」

俺の能力を使えばこいつらがなんて言っているのか分かるからな。

まあ、人魂相手のカウンセラーだとも思ってくれ」

「相変わらず変なところで真面目なんだね」

「お前ほどじゃないがな」

「あ、師匠！」

真と話していると、屋敷の中から妖夢が出てきた。

手にはタオルを持っていて、朝から練習をしていたみたいだ。

「おはよう妖夢。練習は順調かい？」

「はい！ぜひ師匠に見てもらいたいですけど、いいですか？」

「ごめん、今日は宴会の準備をしないといけないからね」

「あ、そうでした。私もお手伝いしますね」

宴会をやるにあたって僕の役割は料理の準備だ。

これには僕と妖夢、あとは咲夜も手伝ってくれることになってる。

会場のセッティングは真の仕事だ。

「それじゃあ、さっそく始めようか」

「はい！」

それからほどなくして咲夜も到着して、

僕は幻想郷で初めての宴会に心を弾ませながら準備をした。

所々で咲夜が意味ありげな笑顔を浮かべるのはちよつと気になったけど。

少年たち調理中

「静也、そろそろ宴会始めるから出てきてちょうだい」

調理場に霊夢がやってきて、僕は初めて時間の経過に気が付いた。

「でもまだ準備が全部終わってないんだけど」

「宴会の主役がいらないなんて駄目じゃない」

「こっちは私たちでやっておくから大丈夫よ」

僕が悩んでいると、横から咲夜がそう言ってくれた。

妖夢のほうにも目を向けてみると、任せてくれと目が語っていた。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

霊夢に連れられて庭に出てみると、僕が思っていたよりもずっと多くの人がいた。

それに、どこからかきれいな演奏が聞こえてきた。

幻想郷にも楽器ってあったんだね。

「お〜い静也！こっちだ！」

その呼びかけに目を向けてみると、魔理沙が大きく手を振っていた。

僕もそこに行つて腰を下ろした。

魔理沙の横には金髪の女の子が一緒にいた。

まるで西洋人形みたいにきれいな顔立ちをした女の子だ。

「私はアリス・マーガトロイド。魔理沙からあなたの話は聞いているわ。」

よろしくね」

「龍導院 静也。僕のほうこそよろしく、アリス」

アリスと握手をしていると、2体の人形が僕のところによつてきた。

「この子たちは上海と蓬萊よ」

「シャンハイ！」

「ホウライ！」

「よろしくね」

よく見てみると、上海と蓬萊にはアリスから薄い魔力の糸が伸びていて、完全に自立しているわけではないことがわかる。

なるほど、こういう魔法もあるのか。

「静也、なんで水を飲んでるんだ？」

「僕が元いた世界では、僕はまだお酒を飲んでいい年じゃないんだ」

「そんな固いこと言わずに飲もうぜ」

「悪いけど、これだけは無理かな」

「ちえつ、つまんねーの」

「その代わりじゃないけど、料理はたくさん用意したから」

「本当か!？」

「もうすぐ来るはずだよ」

「私も楽しみだわ。いつも魔理沙がおいしいって言ってたから」

「静也、ちよつといいかしら？」

その声に振り返ってみると、レミリア達紅魔館の住民たちが立っていた。

「レミリア、僕に何か用？」

「ええ、あなたにお客さんを連れてきたわ」

「お客さん？紅魔館にまだ会ったことない人がいたのかな？」

レミリアの後ろから現れた人物を見て、僕は目を見開いた。

服装こそメイド服を着ているけど、僕がその顔を忘れるはずがない。

幻想郷に来てから心配していたけど、まさかここで再会するなんて。

咲夜の意味深な笑いはこれだったのか。

「愛花……」

僕が名前を呼ぶと、愛花は目に涙を浮かべて抱き着いてきた。

「会いたかったよ、お兄ちゃん」

「どうしてここについて質問は野暮だね。」

「どうせ紫さんだろうし」

「ふえん、お兄ちゃん、お兄ちゃん……」

「全く、いつになったら兄離れするんだか」

「その割には、ずいぶんと嬉しそうじゃない」

「霊夢。まあ、僕の大切な妹だからね」

今も泣き続ける愛花の頭をそつとなでる。

それでようやく落ち着いたのか、愛花は体を離して涙を拭いた。

「ありがとう、レミリア」

「どうして私に感謝するのかしら？」

「服装を見ればすぐにわかるよ。」

愛花がこつちに来てからいろいろ世話をしてくれたんでしょ？

だからありがとう」

「静也には助けてもらったのだから、これくらい当然のことよ」

「愛花はね、私の専属メイドなんだよ！」

横からフランが愛花の手を取った。

「愛花のことをよろしくね、フラン」

「任せて！」

「ねえお兄ちゃん、お兄ちゃんの・・・」

「師匠！」

愛花の言葉をさえぎって妖夢が料理のお皿を持ってやってきた。

「師匠？」

その言葉を受けて、愛花の目が鋭く細められた。

私はようやく完成した料理をもって師匠の下に向かった。

師匠のところには霊夢さん達の他に、レミリアさん達も来ていた。

「ねえお兄ちゃん、師匠ってどういうこと？」

その中には私の見たことのない女の子がいた。

「なんか聞き覚えのある声がしたと思ったら、やっぱり愛花か」

さつきまで幽々子様達のところにいた真さんが私の隣に立っていた。

「愛花？」

「龍導院 愛花。静也の妹だよ」

師匠の妹さん。

確かに顔立ちはどこことなく師匠に似ている気がする。

ただ、私は愛花さんにあまり受け入れられていないようです。

「言葉通りの意味だよ。妖夢は龍導院の技を習っている」

「どうして？」

「妖夢が僕から剣術を学ぶことを望み、妖夢にはその資格があった。

理由なんてそれだけだ」

「この子に資格が？」

愛花さんの目が私に向けられる。

その目は師匠に弟子入りをお願いした時の目に似た威圧感があった。

「私にはそうは見えないけど」

「いや、妖夢には確かに資格があるよ」

「妖夢さん、あなたはちゃんと理解してるの？」

龍導院家当主から技を学ぶ。その重大さをちゃんと分かっているの？」

「それは……」

そんなことは考えたこともなかった。

静也さん、龍導院家当主の弟子というのは、そんなにも大きなことなんでしょうか？

「お兄ちゃん、どうあっても考えは変わらないの？」

「もちろんだ」

「そう、分かった」

愛花さんは一度目を閉じた。

目を開いた時には、さつきまでよりもずっと強い威圧を放っていた。

「ああ、こいつはちよつとまづいかもな」

真さんがつぶやいた言葉に、私はとても嫌な予感がした。

「龍導院長女、龍導院 愛花が、龍導院家主、龍導院 静也に申し上げます。

その決定、私は認めることはできません。

よつて、家訓に則り意義を申し上げます」

「その意義、了承した」

師匠もまた、愛花さんと同じように鋭い雰囲気をもとっている。

「妖夢、準備するんだ」

「準備、ですか？」

「そう、決闘のね」

ただ騒がしいだけだった宴会の会場が、

今は騒がしいながらも緊張を含んだものになっている。

以前師匠と手合わせをしたのと同じ場所に移動して、私と愛花さんは対峙している。近くには師匠と真さん、そして幽々子様とレミリアさんが来ている。

なんでも、龍導院家では古来から家系内で意見のすれ違いがあったときはこうして試合で決めてきたそうです。

「これより家訓に則り、妖夢と愛花の試合を始める。双方、用意を」

未届け人である師匠の声を合図に、私は楼観剣の鞘に手を添え、

愛花さんは弓に矢をつがえた。

「龍導流弓術皆伝、龍導院 愛花。参ります！」

皆伝……

「龍導流剣術初伝、魂魄 妖夢。行きます！」

愛花さんの実力は分からないけど、私は負けるわけにはいかない。

師匠から、学びたいことがまだたくさんあるのだから。

第31話 龍眼の弓兵

「構え……始め!!」

師匠の声と同時に駆け出す。

愛花さんの待つものは弓。

接近戦にさえ持ち込んでしまえば、力を十分に発揮することはできないはず!

愛花さんが矢を放つ。

それは正確に私の急所を狙っている。

私はそれを体をわずかにひねることで、勢いを落とさないうまく回避した。

あと少して愛花さんに刀が届くところで私は楼観剣を引き抜いた。

もちろん油断はしない。

愛花さんが龍導流である以上、何をするのかわからないのだから。

持っているのが弓だからと言って、それだけだと判断するのは危険です。

愛花さんが皆伝だと言うのならばなおさら。

けれども、私の予想していたことのどれとも違うことが起こった。

愛花さんは弓をしまうことなく、そのまま私の方に駆け出した。

「えっ!？」

私は慌てて楼観剣を振るうけど、愛花さんは私の軌跡がわかっていたのか、スライディングをして刀の下を潜り抜けていった。

全力で走っていた私はすぐには止まらず、

少し距離が開いたところで止まりそのまま右に体を投げ出す。

さつきまで私が出たところを、二本の矢が通り過ぎていった。

愛花さんの方を先に確認しようとしていたら、間違いなく矢が刺さっていました。

受け身をして最小限の動きで体を起こして、楼観剣を正眼に構える。

「私が弓を持っているから近づいても油断しなかったのは褒めてあげる。

でもそれに意識を向けすぎ。」

だから予想外のことが起こった時にすぐに反応ができない。

ただでさえ、踏み込みついているのは意外と隙が多いんだからね」

愛花さんは、弓に矢を2本同時につがえていた。

「それじゃあ、レベルを1個上げようか」

愛花さんが矢を放つ。

片方を避けようとすればもう片方が当たる完璧な軌道だ。

私はとっさに白楼剣を抜き、2本の矢を叩き落した。

「なめないでくださいーこのぐらいのことなら弾幕ごっこで慣れていきますー！」
愛花さんが続けて矢を放つ。

それも同じように二刀で切り払う。

それを見て、愛花さんの口が動いた。

言葉は聞こえなかったけど、なんて言ったのかは口の動きで分かった。

レベル3、愛花さんはそう言っていた。

矢が放たれる。

何度やっても同じことです！

私は刀を振るう。

けれども矢は空中で突然その軌道を変えた。

「なっ!?!」

体をひねったけど、完全には躲せずにはわき腹をかすって行ってしまふ。

痛みに顔をしかめるけど、とっさに体をかがめる。

私の上を矢が通り過ぎていく。

それから何度も矢が放たれる。

私は必死に避け、できないときは刀で切った。

けれども愛花さんの矢は、

まるで私が次に何をするのかわかっていてるかののように軌道を変えてくる。

「いつ見てもエグイよな」

「あれは、愛花は能力を使っているの?」

「いや、あれは愛花の能力じゃない」

風に乗って真さんと師匠、霊夢さんの声が聞こえてきた。

「外の世界で、愛花は桃守龍の他にもう一つの呼び名を持っていた。

常に相手の動きを予測し、そこを射抜くように矢を放つ。

その様はまるで龍の瞳を持つかのように。

「龍眼の弓兵」、それが愛花のもう一つの名だ」

「体が小さいもんだから大して威圧感はないはずなのに、

あの目で見られると自分のすべてを見透かされているような気がする。

だから誰も愛花に弓を向けられて油断しないんだよな」

「なるほどね。静也は鋭い、勘」を持っていて、

愛花は「眼」を持っていてことなのね」

確かに、背は私とあまり変わらないはずなのに、

私は愛花さんから師匠と同じだけの威圧感を始めから感じていた。

その理由がこれだったんですね。

ですが、私もいつまでも同じではありません。

徐々にはあるが、愛花さんの矢の軌道が見えてきました。

これも師匠から教えていただいたこと。

“戦場の中であつても、常に成長することを考えろ。”

思考を止めたとき、剣もまた止まると。

愛花さんの矢を切り払いながら、少しずつ近づいていく。

先ほどと同じように踏み込めば、

また同じことの繰り返しになることは分かっていますから。

悔しいけど、今の私ではまだ愛花さんの動きに対処はできません。

“自分と相手の力量を見極めろ。”

勝つことをあきらめてはいけませんが、各上の相手に無謀に挑んではならない。

各上の相手の時ほど策をめぐらせ、相手の意表をつけ。”

師匠が教えてくれたのは、どちらかといえはこのような心構えが今は多い。

師匠曰く、

“もちろん技量は大切だ。しかしよほどの差がない限り戦術でそれを覆すことができる。”

故に最初に伸ばすべきは戦術眼である。”と。

愛花さんとの距離が半分ほどに近づいた。

そこで矢を切り払ってから私はもう一度駆け出す。

しかし今度は全力ではなく、何かあったときに対処できるように少し速度を落とす。

愛花さんもバックステップで距離を離そうとしますが、

さすがに直進している私のほうが速い。

愛花さんとの距離が目前のところまで来たところで、私は刀を鞘に戻す。

そして、師匠に教えてもらった初めての技を繰り返す。

「龍導一刀流剣術初伝『閃龍』!!」

力強さよりも速度を重視する龍導流の中で、最も基本である龍導流最速の抜刀術。

私の刀は確かに愛花さんを捉える軌道にあった。

でもそうはならなかった。

愛花さんが右手をスカートの中に入れて、何かを素早く抜き放った。

それと同時に、私の刀は力を受け流され愛花さんの横を通り抜けてしまう。

逸らされたと分かったところで急いで刀を引き、一歩下がって構える。

愛花さんの手には、一本のナイフが握られていた。

咲夜さんのナイフよりは大きくて、

それが投げるためのものではないことはすぐにわかった。

「流石ですね。まさかスカートの中にナイフを仕込んでいるとは思いませんでした」
「私も少し驚いてる。まさかこれを使わされるなんてね。」

妖夢さん、あなたのことを侮っていたことは訂正するよ。

お詫びと言っては何だけど、あなたに見せてあげる。

私が皆伝である証。私を皆伝足らしめている、私だけの龍導流を」

ついに来た、と思った。

以前の試合の時も、師匠が複翼龍を使うと私はたった一度の打ち合いで負けてしまった。

愛花さんは何を取り出すのかと注意深く見るけども、

愛花さんは弓を背中に背負うと、ナイフを片手に距離を詰めてきた。

「え!？」

驚きはしたけど、以前のように動きを鈍らせることはなく楼観剣で迎え撃つ。

ナイフと楼観剣がぶつかり合い、わずかに火花を散らす。

愛花さんはそのまま何度もナイフを振るってくる。

それを私はすべてさばきながら、頭は疑問だらけだった。

これが、愛花さんだけの龍導流？

愛花さんが大きくナイフを振るう。

私はチャンスだと思い強くはじき返す。

それによつて愛花さんの上体がわずかに泳ぎ、隙が生まれる。

私はそこに向かって白楼剣を振るう。

本来ならとても避けられるような状態じゃない。

なのに、ちらりと見えた愛花さんの表情は笑っていた。

どうするのだろうかと思っていると、

愛花さんはナイフをスカートの中に戻し腰に下げていた師匠から借りた刀を抜いた。

愛花さんは態勢が不安定であるのも構わず、私の白楼剣に合わせて防御した。

それでも勢いは殺せずに後ろに追いやるけど、

愛花さんはそれを逆に利用し私の右側面に回り込んできた。

それも楼観剣でいなすけど、愛花さんはそのまま今度は刀でもって私と切りあう。

その動きは紛れもなく、師匠と同じ龍導一刀剣術だった。

それでも手数なら負けません。

私は白楼剣と楼観剣で愛花さんへと畳みかける。

何度目かの切合いで、愛花さんを後ろへと追いやる。

すると愛花さんはその勢いのまま後ろへと飛び、

刀を素早く収め弓を構え矢を放ってくる。

愛花さんを後ろへ追いやるために力を込めていた私はそれにまともに反応できず、何とか楼観剣で防いだものの、楼観剣がはじき返され私は手を放してしまった。

しまったと思った私は、それにより一瞬の隙が出来てしまった。

そしてその一瞬の隙が、剣士にとっては致命的な隙になる。

私が気付いた時には愛花さんがすでに私の目の前まで来ており、刀を抜き放った。そのまま愛花さんは刀を振り下ろし、私の首の直前で刀を止めた。

「愛花が勝ったの?」

「・・・いや、違う」

霊夢さんがもらした疑問に、真さんが否定する。

愛花さんが目線を下げる。

私は動くことはできなかったけど、白楼剣を正面に構えていた。

もしこれが本当の戦場で、愛花さんが私の首を切っていたのなら、

私の白楼剣もまた愛花さんの胸を貫いていた。

つまりこの勝負の結果は・・・

「引き分け、なの?」

「そ、それで!」

師匠の終わりの合図とともに、私は全身から力を抜いた。

第32話 認められぬ思い

私は手にしていた白楼剣を鞘に戻す。

愛花さんも手にしていた師匠の刀を鞘に戻して、そのまま奥の方に歩いて行ってしまいます。

「あ、愛花さん、待ってくださいー！」

私も慌てて愛花さんの後を追いかける。

私がいくら呼び掛けても愛花さんは止まってくれず、屋敷の裏に行つたところでようやく止まってくれました。

「引き分けはしましたが、私のことを認めていただけますか？」

私の問いかけにも、愛花さんは答えてくれない。

そこまで失望させてしまったのでしょうか？

「あの、愛花さ……」

「違う」

「……え？」

私の言葉をさえぎって、愛花さんは振り返ってようやく私の方を見てくださいました。

愛花さんは刀が微かに揺れるほど強く手を握りしめている。

「さっきのは、引き分けじゃない」

「でも、私と愛花さんの刀はどちらも致命傷だったじゃないですか」

「刀を振るわかなければいけないかった私と、突きを放つだけだった妖夢。実戦だったのなら、妖夢のほうが先に私の体を貫いている」

「じゃあ、さっきの試合は・・・」

「そう、妖夢の勝ち。お兄ちゃんにも聞いてみると言い。私と同じことを言うと思う」

「なら、なおさら私のことを認めてくれますよね!？」

「いや、認めない。認めたくない。でも、家訓での決闘に負けてしまった私には、もう文句を言う資格はない」

愛花さんの言葉に、私は呆然としてしまう。

どうして?なぜ?そんな言葉ばかりが頭の中に思い浮かんでくる。

「どうして・・・どうして認めてくれないんですか!!」

気が付けば、私はそう叫んでいた。

龍導院家の長女であり、何より師匠の妹さんだったから敬意をもって接してきましたが、愛花さんのあまりにもな言葉に、私は湧き上がる怒りを抑えられなかった。

「愛花さんは、私に龍導流を学ぶ資格があるかどうかを知りたかったんですよね!勝負

は私の勝ちだった。愛花さん自身がそう認めているじゃないですか！それなのに、どうして私のことを認めてくれないんですか！師匠は言いました。龍導流を学ぶ資格はたった一つ。誰の為に、そして何の為に力を求めるか。愛花さんは、私にそれについては何も聞いていない。それなのに、どうしてそこまで認めてくれないんですか!!」

自分の中の激情を、ここまで吐き出したのは初めてかもしれない。

幽々子様の従者だったからというところもあるでしょうが、何よりも、ここまで理不尽な言葉を聞いたことが今まで無かったから。

私の叫びを聞いて、愛花さんも叫び返してくると思った。

でも愛花さんは、悲しげな表情を浮かべるだけ。

「自分でも、理不尽なことを言っているのは分かっている。それでも私は、妖夢のことを認めるわけにはいかないの。だって妖夢のことを認めてしまったら、私は・・・」

「愛花・・・さん?」

「叫びたいなら、好きだけ叫んでいい。殴りたいなら、殴ってもいい。全部甘んじて受ける。それでも私は、妖夢のことを認めるわけにはいかないの」

愛花さんの表情を見ると、私の中の怒りがだんだん小さくなっていく。

「何か、事情があるんですか?」

私の問いかけにも、愛花さんは何も答えない。

「……今の私では、これ以上踏み込むことはできないようですね。」

「分かりました。では最後に一つだけ聞かせてください。愛花さんを皆伝としている、愛花さんだけの龍導流のことを教えていただけますか？」

「……龍導連翼龍弓術。それが私だけの龍導流。全ての武器を使いこなすという、龍導流の特徴を最大限に生かす技。全ての動きを、次の動きに連動させる。私の強みは、この目と器用さだから」

「分かりました、ありがとうございます。愛花さんも宴会に戻りましょう？せつかく幻想郷に来たんですから、楽しまなければ損ですよ」

私は愛花さんに背を向けて歩き出す。

私と一緒に、愛花さんは戻りにくいでしょうから。

「……ありがとう、妖夢」

後ろからそんな声が聞こえた気がしたけど、私は何事もなかったように歩き続ける。

第3章 求めるといふこと、求められるといふこと

第33話 道標と不穩

昨日の宴会ではいろいろなことがあつたけど、やっぱり一番の驚きは愛花だろう。

妖夢との試合の後、愛花は一人で紅魔館に帰ってしまった。

主を置いて一人で帰るなんてってレミリアは怒つてたから、今度何か埋め合わせをしないといけないな。

いや、埋め合わせをするのはフランの方か？まあ、両方にすればいいか。

そこで僕はいったん考えるのをやめて、作つていた料理をお皿に移す。

それをテーブルの上に置いて、その横に一枚の札を置いてから、僕は荷物をまとめて神社を出た。

霊夢は二日酔いではないだろうけど、普段よりも深く眠つていたから、そつとしておいた。

万が一が起きてても大丈夫なように、防御に長けた土龍の札を置いてきた。

霊力のパスは通つているから、念話することは可能だ。

もはや通いなれた道を歩いて寺子屋に向かう。

風龍のおかげでようやく僕も飛べるようになったけど、足腰を鍛えるために必要な時以外は歩くようにしている。

僕が楽しみたいという理由だけで、風龍に力を使わせるのは何だか申し訳ないからね。

(主様、今後のご予定は?)

「まずは情報収集だ。何の行動を起こすにせよ、こちらには圧倒的に情報が不足している」

風流の問いかけに答えて、昨日のことを少し思い浮かべる。

宴会に来てた皆に話を聞いた結果、この幻想郷で情報を集めらせそうな場所はいくつか分かった。

その中でも、ぼくは主に3か所に目星をつけた。

幻想郷で最多の蔵書数を誇るパチュリーが管理する大図書館。

幻想郷の歴史を代々書き記し続けている幻想郷縁起を管理している稗田家。

大図書館よりは数は劣るが、妖怪が書いたとされる妖魔本を数多く管理する鈴奈庵。

お寺や道教といったものも気にはなったけど、宗教的観点から話される可能性もあるから、先にある程度の情報を手に入れてから行ったほうがいいだろう。

パチュリーとのつながりはすでにあるし、鈴奈庵も貸本屋と言うことだから大丈夫だろう。

問題なのは稗田家だ。

人里の中でも格の高い家らしいから、果たして外来人である僕に話をしてくれるだろうか。

いや、それを検討するのもまた情報不足か。

とりあえず2か所に行つてから考えるか。

そこまで考えたところで、ちょうど人里の入り口が見えた。

そのまま寺子屋に行くと、なぜか入口の所に慧音さんが立っていた。

「おはようございませす慧音さん。何かあつたんですか？」

「ああ、静也か。いつもならルーミア達が来ている時間なんだが、まだ来てないので少し心配だな」

「ルーミア達が？・・・探してきます」

「頼む。授業の方は私が何とかしておく」

慧音さんの言葉に頷き、荷物を置いて走る。

(水龍、加護を)

(了解しました)

嫌な予感がする。みんな、無事でいてくれ！

第34話 勇気と無謀

「みんなに近づくな！」

恐怖で座り込む私達とは違って、チルノは立ち上がって相手を睨む。

いつも通り4人で寺子屋に向かってた私たちは、突然狼の姿をした妖怪に襲われた。

あまりにも突然の事だったけど、幸い誰もまだ怪我をしてない。

「氷符『アイシクルフォール』！」

チルノがスペルカードを宣言する。

けれどそれは何一つとして相手に当たることはなかった。

それを見てチルノは脅威じゃないと判断したんだろう。

狼が一気にこつちに向かって走ってくる。

「チルノちゃん、逃げて!!」

大ちゃんが叫ぶけど、チルノも恐怖で動けなくなってる。

「くっっ！」

どうしてそこで体が動いたのか、私でも分からない。

立ち上がった私はチルノの元に駆け寄ると、横に突き飛ばす。

狼は正面に居るのが私になっても速度を落とすことなく突っ込んでくる。

「ミスチー!？」

チルノの叫びが、ひどく遠くから聞こえた気がする。

私、ここで死ぬんだな。

漠然とそんなことだけを思った。

狼が爪を振り上げるのを見て、私は目を閉じた。

けれど次に感じたのは痛みじゃなくて、何かに包まれて体が浮いた感覚と、顔に生暖かい物が降りかかった。

「静也先生!？」

大ちゃんの声に目を開けてみると、目の前に静也の顔があった。

顔に触れてみると、手にべったりと血が付いた。

「静也、腕が・・・」

チルノの声に目を向けてみると、静也は右腕から血を流していた。

その量はかなりのもので、医学の知識がない私でも早く治療しないと危ないってわかる。

「くっ・・・。ミスティア、大丈夫?」

私のせいで怪我をしたのに、それでも私を心配してくれる静也に、胸の奥が熱くなる。

「ごめん。ごめんね、静也」

「泣かないで、ミスティア。僕は大丈夫だから」

「でも、利き腕が」

静也は授業の時、いつも右腕を使ってた。

「大丈夫。龍導流に利き腕は関係ないから」

静也が血を流しながら立ち上がった。

「ダメです、先生!!」

大ちゃんの叫びが響いた。

でもその声に答えたのは、私の知らない声だった。

「その者の言う通りです、主様。ここはどうか私に」

「・・・分かった。黒龍帝の名において命ずる。聖龍よ、我が元へ顕現せよ」

静也がお札みたいなのを地面に置くと、私の見たことない文字が浮かんだ。

それは一瞬強い光を放った後、いつの間にか人影が浮かび上がった。

短い金髪に銀色の鎧を着た男の人だ。

けれど何よりも印象的なのは、その身からあふれ出す妖力だろう。

「抵抗もできぬ幼子に手を出し、あまつさえ主様を傷つけたその所業、決して許されるも

のではない」

穏やかな声なのに、抑えきれない怒気を感じた。

「聖龍、これを使つて」

静也が腰に差していた刀を聖龍？に渡した。

「感謝します、主様」

聖龍が刀を引き抜く。

物騒な物なのに、その動作一つ一つが美しかった。

「その罪、身を持つて償え」

聖龍が一步踏み出す。

その瞬間、狼は背を向けて逃げ出した。

聖龍との実力差を本能的に感じ取ったんだと思う。

けれど狼の動きは、突然目の前に現れた青白い柵みたいなものに阻まれた。

横を見てみると、静也が自分の血で地面に何か書いてて、それが淡く光つてた。

「これくらいは援護はさせてくれ」

逃げられないと分かつて、狼がもう一度突撃してくる。

聖龍はそれを避けようもしないで、静かに刀を構えた。

「我は龍帝に仕えし古の龍、その名は七の龍・聖龍也。我が力は主が剣、我が身は主が盾である」

聖龍が呪文みたいなものを紡ぐと、刀が淡く輝き始めた。

「竜王技その七、刻聖龍」

狼が爪を振り下ろす。

聖龍は身を屈めて躲すと、すれ違いざまに刀を振るった。

そして狼は倒れて、それっきり動かなくなった。

「せめて美しく散らせてやったことを感謝しなさい。炎龍では、こうはいきませんでしたよ」

聖龍が刀を収めて戻ってくる。

「お疲れ様。ありがとう、聖龍」

「謝罪いたします主様。本来ならその傷は、私が受けるべきでしたのに」

「大丈夫だよ」

「大丈夫なわけないでしょ!!早くお医者さんに・・・」

「主様!」

私の言葉をさえぎって、またどこから声が聞こえてきた。

静也の袖からお札みたいなのが出てくると、またそこから人影が出てきた。

肩にかかるぐらいの緑色の髪に、同じ色の和服を着た女の子。

その背は私たちとあんまり変わらない。

「木龍」

「勝手に出て来て申し訳ありません、主様。どのような罰でも受けます」

木龍と呼ばれたその娘は静也の手を取ると、静かに目を閉じた。

何をやる気なの？

「我は龍帝に仕えし古の龍、その名は三の龍・木龍也。生きとし生ける草花たちよ、我が主様が為、その命を僅かばかりに分け与え給え」

木龍がささやくように呪文を紡ぐと、辺りにある樹や葉が輝き始めて、その光が静也の所に集まっていく。

「龍王技その三、癒しの吐息」

光が収まったとき、静也の出血は収まっていた。

「私が出来るのはあくまでも自然治癒の上昇。これが精一杯です。申し訳ありません、主様」

「いや、十分だよ木龍。ありがとう。というか、木龍って女の子だったんだね」

「はい。見苦しいものお見せしてしまい、申し訳ありません」

「そんな事はない。可愛いよ、木龍」

「……っ!?!」

何を言われたのか一瞬分からなかったのか、しばらく呆然とした後に木龍は顔を真っ

赤に染めた。

その光景に、なぜだか胸がチクリと痛んだ気がした。

「わ、私にはもったいなきお言葉！し、し、失礼します！」

木龍は出てきたのと同じように消えて行つた。

「それでは主様、私もこれで」

聖龍もお辞儀をして消えて行つた。

「ふう、それじゃあ寺子屋に・・」

「静也!!」

「先生!!」

「うわっ!?!」

ルーミアと大ちゃんが静也に飛び込んで、そのまま静也を仰向けに押し倒した。

それを見て私とチルノも静也に駆け寄る。

「怪我は大丈夫なんですか!?!」

「なんであんな無茶したの!?!」

「どうしてここが分かったの!?!」

「あの人たちは何!?!」

「ははっ・・・・」

私たちの質問攻めに、静也は苦笑いをした。

第35話 謎の戸惑い

僕は今、永遠亭という場所に向かつて歩いている。

大丈夫って言ったんだけど、ミステイア達に行かないとだめって念を押されたから行くことになった。

明日慧音さんに謝らないといけないな。

(彼女たちの判断は正しいですよ主様。傷は塞がったとはいえ、あれほどの怪我をしたのですから、いちど本職の医者に診てもらわうべきです)

僕の心情に風龍が答える。

けれど、木龍の加護を受けたんだから大丈夫なんじゃないかな？

(木龍の加護はそこまで万能ではありません。そうですね木龍?)

(.....)

(木龍?)

(は、はひ!?確かにそうです。先ほども申しましたように、私にできるのは表面上の応急処置のようなものだけですから)

それなら仕方ないか。

それにしても、どうして病院が人里から離れたところにあるのかな？急病が出たらどうするんだろう。

まあ、それはいいとして・・・どうしよう。

(?どうかされたのですか、主様)
迷った。

さつきから同じような景色ばかりが続くせいで、方向感覚がおかしくなっちゃったみたいだ。

どうしようかな？運よく誰かが近くにいれば道を聞けるんだけどな。

どうしてもその時は能力を使うしかないか。

そう考えていると、今度は水龍の声が聞こえてきた。

(主様、前方に複数の気配を感じしました。数は6人です)

良かった、道を聞くことが出来るみたいだ。

(ただしご注意を、どうやら襲われているようです)

・・・詳しい距離は？

(前方1500mです)

分かった、少し急ごう。

風龍、加護を。

(かしこまりました)

風龍の加護を受けて一気に駆け出す。

しばらく走っていると、僕にとっては聞きなれた、けれどこの世界では聞くとは思ってなかつた音がしてきた。

この音は銃声？ 僕以外に銃を扱う人物がいるのか？

銃声が聞こえる地点から100mのあたりまで来たところで、竹に身を隠しながらそつと奥を窺う。

そこには二人の少女と、四体の下劣な笑みを浮かべた妖怪がいた。

妖怪の方は良いとして、襲われていると思われるほうの少女たちの方に目を向ける。

どうやら少女たちの方もウサギの耳が生えているところ見るよ妖怪のようだ。

一人はとて小柄な少女だ。チルノ達とたいした差はないと思う。

そしてもう一人の少女を見たとき、僕の胸は大きく高鳴った。

外の世界のブレザーとほとんど同じ服を着ていて、二丁の拳銃を手に持っている。

なんだ、この感覚は？

戦闘に介入することすらも忘れ、じつとその少女のことを見つめる。

初めて見る顔だ。そもそもこの場所に来るのは初めてなのだから当たり前だ。

外の世界にもうさぎの耳をつけた知り合いなんていない。

それなのに、その少女を見れば見るほど胸を強く締め付けられる。

自分の状態に戸惑っていると、乾いた音が響いてきた。

どうやら弾が切れたようだ。

それを見て好機と判断したんだろう、四体の妖怪が一気に少女たちに詰め寄っていき

く。それを見て、僕は腰の刀に手をかけながら一気に駆け出す。

第36話 黒き龍の咆哮

私は2発の弾丸を撃つ。

よく狙いもしなかったそれは難なく躲かれてしまう。

「もういいよ鈴仙、私を置いて逃げて」

「そんなことできるわけないでしょ!!」

人里で薬を売った帰り道、私はてゐが襲われているのを見かけた。

急いで助けに入ったけど、相手は4体でしかも知性を持つほどの上級妖怪だった。

撃つ銃弾はかすりもせず、とうとう私たちは追い詰められました。

「ようやく追い詰めたぜ」

「これは食事の前にも楽しめそうだな」

妖怪たちがいやらしい笑みを浮かべながらにじり寄ってくる。

私はもう一度銃を構えて引き金を引く。

けれども銃弾は発射されず、代わりに乾いた音が響いた。

弾切れ!?

私が動揺している隙に、4体の妖怪は一気に駆け出した。

「くっ!? 幻^{ルナティック}朧……」

だめ、間に合わない!

恐怖で体が硬くなる。

けれども、私と妖怪の間に1つの人影が割り込み、妖怪の一撃を手にした刀で受け止めた。

一瞬妖夢かと思ったけど、妖夢にしては背が高い。

それによく見てみると、それは少年だった。

その人は刀を振り抜いて妖怪を背後に追いやった後、私の方に振り向いた。

思わず見とれてしまいそうになる黒色の瞳が、私を見る。

「君達が襲われている、という判断で良いのかな?」

「は、はい」

「分かった」

それだけ聞くと、その人は妖怪たちの方に向き直る。

もしかして、助けてくれるの?

「どけ、人間。お前に用はない」

「そういうわけにはいかないな。目の前で襲われている女の子を、見捨てることはできない」

「ならばお前から殺してやる」

4体の妖怪がその人を取り囲むように散開する。

「だめ、逃げて！」

てるが叫びをあげる。

でもその人は不敵に笑った。

「何がおかしい？」

「僕が、三流ごときに負けるとでも？」

「何だと!？」

「自分と相手の力量を見極め、勝てない戦いから身を引けるのが一流。自分と相手の力量を見極め、勝てない戦いに無謀に挑むのは二流。自分と相手の力量すら見極められない君達は、それ以下だ」

「言わせておけば！ 楽には死なせんぞ人間。たつぷりといったぶつてから苦しませながら殺してやる。いけ!!」

4体の妖怪が襲い掛かる。

とても人間が相手にできるような数じゃない。

けれどその人は腰に差している刀の柄に手をかけて、腰を落とした。

「龍導一刀流劍術中伝『輪龍』りんりゅう」

右足を軸に回転しつつ、鞘から抜いた刀で斬り払う。

それだけで、4体の妖怪たちの片腕が落ちた。

「ぐわああ!!」

「去れ。似たようなことが立て続けに起こって、今の僕は少し機嫌が悪いんだ。次はその首を落とす。もう一度だけ言うぞ。ここから去れ」

その言葉と共に、とても人間だとは思えないほどの殺気が放たれる。守られているはずの私でさえも、思わず息を飲む程の殺気が。

それを正面から受けた妖怪たちが思わずといった風に一歩後ずさる。

「わ、分かった」

私達に背を向けて去っていく妖怪たち。

それを見て、その人も刀を鞘に納めて私たちの方を向いた。

「大丈夫だった?」

「・・・はい、ありがとうございます。助けて頂いて」

「僕は・・・」

「危ない!!」

その人の声をてゐが遮った。

私も気づかなかいうちに、さっきの妖怪達がその人の背後にまで戻ってきていた。

「馬鹿な人間め、死ね！」

「馬鹿なのは君達の方だ」

私の目でも剣筋を捉えるのが難しかった。

鞘に納められていたはずの刀がいつの間にか抜かれていて、それが四度煌めいた。

そのまま刀を鞘の納めると同時に、4体の妖怪の首が落ちた。

妖怪達の表情は何も変わってなくて、最後まで斬られたことに気付かなかつたんだと思う。

「言っただはずだ。次は首を落とすと」

その人は一度目を閉じて、静かにそうつぶやいた。

少しの間そうした後、改めて私たちの方を向いた。

「改めて、僕の名前は龍導院 静也。外来人だ」

笑顔で手を差し出す静也さん。

けれど私には、その笑顔の奥に悲しみの表情が見えた気がした。

第37話 竹林の中の出会い

「妖夢の師匠をしているんですか、すごいですね！」

鈴仙が驚いた表情を向けてくるけど、それに僕は苦笑いを返す。

「すごくなんでないさ。周りにほかに剣術を扱うものがないからそうなたただけで、この幻想郷には僕よりも強い人はたくさんいる」

「静也も結構強いと思うけど。とてもうちで診察が必要なようには見えないよ」
「確かに外面的な怪我はないね。まあ、健康診断だと思ってくれていいよ」

4体の妖怪たちを斬った後、僕たちはお互いに自己紹介をした。

その時に二人は永遠亭に住んでいると聞いていたから、ついでに案内をしてもらおうことにした。

「でも助かったよ。僕一人では永遠亭にたどり着けるか分からなかったからね」

「当然ですよ。もしあの時静也さんが来てくれなかったら、今頃私達は生きていませんでしたから」

「その点に関しては私も感謝しているよ」

そういつたてゐるが横から僕の顔を覗き込んでくる。

その表情は悪だくみをしている時の真にそっくりで、僕の中で小さな警報が鳴った。けれどもすでに遅かったようで、一步踏み出したと同時に地面の感触が消えた。

「うわあ!!」

「やった、引つかかった!」

「こら、てゐ!!助けてくれた人に何てことしてるのよ!」

僕が落とされた落とし穴はやけに深く、普通の人間では自力で出るのは不可能なほどだ。

まさか幻想郷でこんな初歩的な罠に引つかかるとは思っていなかった。

悪意のない罠だったから、よけいに気付かなかった。

「大丈夫ですか静也さん、今助けますね!」

風龍の加護を使おうか考えていると、鈴仙が穴の中の入ってきて僕の体に手を回した。

おそらくこのまま僕を上まで引つ張るつもりなんだろうけど、これだけの行為で僕の心臓は大きくはねた。

「大丈夫だよ鈴仙、一人で上がれるから」

「だめです。私が上げますから、おとなしくしてて下さい」

これは何を言っても聞いてくれそうにはないと思つて、仕方なくおとなしくする。

それにしても、僕は一体どうしてしまつたんだ？

鈴仙と一緒にいると、心が乱されてばかりだ。

真に相談すれば、それは恋だろうと言われるだろう。

でもこれが、そのような感情とは全く違うものだということを僕は理解している。

僕だつてこの17年間、そのような経験が全く無かつたわけではない。

それに何より、僕は本当のそれを知っているから。

だから僕が鈴仙に感じている感情は恋愛感情なんかじゃない。

だからこそこんなにも悩んでいるんだ。

そんなことを考えているうちに、僕の体はすでに穴の外に出ていて、鈴仙の感触が消

えた。

「ありがとう、鈴仙」

僕の言葉に笑顔を浮かべた鈴仙は、今度はてゐに鋭い視線を向ける。

「助けてくれた人にこの仕打ちはひどいんじゃないの？」

「ま、これが永^ち遠^ち亭の洗礼だと思つてよ。でも、感謝してるのは本当だよ。だから静也へのいたずらはこれで最後にしてあげる」

正直落とされたことに僕も言いたいことが無かつたわけじゃない。でも、てゐの笑顔を見てみると怒る気が無くなつてしまった。たぶんその顔が僕がよく知る親友に似て

いたせいだと思う。

「はあ、そんな顔されたら怒るに怒れないじゃないか。許してあげるけど、本当にこれつきりにしておいてよね」

「さすが静也、よく分かっているね！」

「ごめんなさい、静也さん」

「気にしなくていいよ鈴仙。怒っていないから」

そんなことをやっているうちに古い造りの日本家屋が見えてきた。

たぶん人里にある家よりも古い造りだ。

平安時代当たりじゃないかな？

それにしても、竹林に囲まれた家か。

なんだか竹取物語を彷彿とさせる光景だな。

「こちらです、付いて来て下さい」

そのまま鈴仙に案内された僕の前には、今一人の女性がいる。

高い身長に赤と青のツートンカラーという奇抜な服を着た女性。

「初めまして。私は八意 永琳。この永遠亭で医者のようなことをやっている者よ」

「外来人の龍導院 静也です。よろしくお願いします」

僕と永琳さんは簡単な自己紹介をした後、すぐに診察に入った。

診察といっても鈴仙たちに言ったように健康診断程度だから、そう時間はかからなかった。

「診察の結果、あなたの体にはどこにも異常は見られなかったわ。しいて言うなら少し血が減っていることぐらいね。食事をきちんと取ることをおすすめするわ」

「そうですか、ありがとうございます」

永琳さんにお礼を言って立ち上がったけど、僕はそのまま立ち尽くしていた。

「どうかしたの？」

「永琳さん、失礼を承知でお願いします。僕と手合わせして頂けないでしょうか？」

「なんですって？」

僕は永琳さんを一見した時から、心の震えが止まらなかった。

永琳さんから大した霊力は感じなかったけど、僕の直感がささやいていた。

この人は霊夢と同等、もしかするとそれ以上の実力を持っていると。

自分では戦闘バトルジャンキー狂のつもりはないんだけど、僕も武家の出身だ。

自分よりもはるか高みにいる人物を目にすると、自分の力がどこまで通用するのか試したくなってしまう。

永琳さんはしばらく難しくそう顔をしていたけど、小さくため息をついた。

「私は医者であって、本来ならそういうことはしないんだけど。あなたにはウドンゲた

ちを助けてもらった恩があるものね」

「では・・・」

「一度だけなら、いいわ」

「ありがとうございます」

僕は永琳さんに深く頭を下げた。

第38話 竹林の賢者

「お二人とも、準備はよろしいですか？」

鈴仙の言葉に僕が頷くと、永琳さんも同じく頷いた。

場所は永遠亭の中にある中庭。

永琳さんはその手に弓を持っているけれど、矢筒は持っていない。

たぶん愛花と同じように靈力で矢を作るんだろう。

今この場にいるのは僕と永琳さん、鈴仙とてゐる。

あと一人、姿は見えないけどふすまの中からこちらを窺う視線を一つ感じる。

入院患者だろうか？

気にはなるけれど、今はそんな些細なことは意識の外に追いやる。

集中しなければ、恐らくは数分と持たないだろうという予感がある。

一つ深呼吸をして、夜桜の柄に手をかける。

「龍導流剣術皆伝、龍導院 静也。全力で参る」

「よーい、はじめ!!」

鈴仙の声が響くと同時に、体を横に投げ出す。

一瞬前まで僕の頭があつた場所を一本の矢が通過していった。体勢を立て直しつつも僕の胸中には驚愕が広まっている。

弓というのは弦を引いて矢を放つ武器だ。

少なくとも僕の中での常識ではそうであり、愛花も妖夢との試合ではそうしていた。にも拘らず、永琳さんの矢はほとんどノータイムで飛んできた。

どうやら今回の戦いでは僕の中での常識は通用しないようだ。

永琳さんの矢が、やはりほとんど間隔をあけることなく再び飛んできた。

僕はまだ体勢を立て直すことができていない体を無理矢理ひねって体を傾けることで、ぎりぎり回避することができた。

相手が弓兵であるにも関わらず、僕は未だに一歩も踏み出すことができていない。

このままでは徐々に体力を削られていく。

それならば、ここは一気攻め込む！

永琳さんから3本目の矢が放たれる。

それを今度は避けようとせず、手にした夜桜に霊力を込めて矢の側面に打ち込む。ありえないはずの衝撃が腕を通して伝わり、矢と夜桜が一瞬拮抗する。

「はあああ!!」

そこからさらに霊力を夜桜に流し込む事で、何とか矢を切り払うことができた。

その結果に安堵する暇もなく、僕は夜桜を鞘に納めながら走り出す。

少しでも距離を詰めておきたいし、複翼流はなるべく切り札にしたい。

おそらくほとんど時間はないだろう。

さっきのが速射だったから何とかなつたものの、おそらく強射だったら逆にこっちが押し切られていただろう。

当然永琳さんもそのことは理解しただろう。

手元に矢を作つた後、一瞬弦につがえてから矢を放つてきた。

こうなるとこちらは避けるしか選択肢がなくなつてしまう。

距離を離したくはないから横に体をずらすことで回避する。

それから永琳さんは射撃方法を強射に切り替えて矢を放つてくる。

射撃速度は下がっているから、最初ほどぎりぎり回避することはなくなつたけれど、それでも近づけないという現状に変わりはない。

この状況、相手の霊力が切れるまで耐えるという戦法も手の一つではあるけど、とてもそんなことができるようには思えない。

どうする、どうすればいいんだ!?

焦りが思考を鈍らせる。

迷いが行動を遅らせる。

不安が剣筋を歪ませる。

あらゆる感情が僕をどんどん追い込んでいく。

今この瞬間だけは霊夢がうらやましくなる。

この感情に縛られることがなければ、この状況を打開する手を思いつけるんじゃないか。

そんな詮無きことを考えてしまう。

そのせいか、不意に放たれた速射に僕は気づくことができなかつた。

それを認識した時にはすでに目の前まで来ていて、とてもかわすことなどできない距離だ。

とつさに懐から一枚の札を取り出して眼前に結界を張る。

そんな急作りの結界の耐久力などたかが知れる。

何とか矢を防ぐことはできたものの、衝撃までは防げずに後ろに吹き飛ばされる。

「今のは!?!」

僕の行動に鈴仙が驚きの声を上げる。

隠しておきたかつた手札を一つ使ってしまった。

これでさらに勝つのは難しくなつただろう。

勝てない。

まさかここまで強いなんて思わなかった。

思わず刀を手放しかけたその時、不意に真の言葉が脳裏をよぎった。

『お前の強みは頭なんだからよ、変な感情に騙されんじやねえぞ。やべえ時ほど笑って
いようぜ！』

その言葉に僕は思わず笑みを浮かべた。

ありがとう、真。

この場にはいない親友に心の中で感謝して、僕は札を取り出す。

それを地面に置き霊力を流し、自分を覆うように結界を作る。

永琳さんが弓に矢をつがえる。

さつきからずっと続けられているその動作が、ひどくゆっくりに見える。

本来なら見えないはずの霊力の流れまでもが見える。

そうだ、余計なことは考えるな。

ただ目の前の相手に集中しろ。

汲み取れ、霊力の流れを。

読み取れ、相手の思考を。

予測しろ、相手の次の行動を!!

永琳さんから矢が放たれ、結界が音を立てて壊れた。

その瞬間、刀の柄に手をかけ走り出す。過程は違えども、さつきと同じ展開。

当然、永琳さんは同じように対処する。けれど、今の僕には見える。

すべての流れが！

矢が眼前に飛来してくる。

さつきまでは回避していたそれに今度は刀を合わせる。

当然、切り払うのは無理だ。

だからこそ、矢の霊力の流れている方向に刀を傾ける。

矢は刀を滑り後方へと流れていった。

今まで一度も動くことのなかった永琳さんの表情が微かに動いた。

永琳さんが矢を放つ。

その数は同時に2本。

左右から同時に飛来するそれらに魂絶を抜き放ち同じように滑らせる。

それを見て、今度は一本の太矢が迫る。

それが眼前に来る頃には、僕はすでに魂絶を鞘に納め、両手で夜桜を握りしめていた。

この矢を滑らせるのは不可能。

そのため、矢に刀を当てた時点で手を離し下をくぐり抜ける。

夜桜は失ったが、速度を落とすことなく潜り抜ける。

全ての行動が見える。

相手が次に何をし、どう霊力を流すのかが見える。

これは幻想郷に来て初めての感覚。

今の状態は、龍導流の極致と言っても良いだろう。

「龍導流剣術奥伝『冷心竜眼』」

絶対なる龍は、決して心を乱すことなくその眼で敵のすべてを見抜く。

魂絶を抜き、懐から空虚を取り出す。

ここで決められなければどのみち勝てない。

だからこそ、今まで隠していたもの、手札をすべて使い切る！

矢に銃弾を当て動きを一瞬止め、その隙に最小限の動きで回避する。

そしてついに、永琳さんの元にたどり着いた。

「これで、もらった!!」

右足に力を込めた後、瞬時に左に体を動かし魂絶を振り抜く。

永琳さんは反応できていない。

取った!!

「素晴らしい実力ね。でもまだまだだよ」

「．．!?!」

確かに前を向いていたはずの永琳さんから腕が伸びて来て、右腕をつかまれる。

まずいと思う暇もなく投げ飛ばされ、背中から岩に激突した。

「ガハッ!」

体中に激痛が走り、刀を握る手の感覚が無い。

「届かない．．か．．」

そして、僕は意識を失った

第39話 月の姫の戯れ

「う……」

頭に鈍い痛みを感じるとともに、僕は目を覚ました。

誰が介抱してくれたのかは分からないけど、いつの間に敷いた布団に寝かされていた。

自分の現状を確認するにつれてだんだんと悔しさがにじんできくる。

「勝てなかったか」

「永琳相手によくやったほうだと思おうわよ」

思わずつぶやいた独り言に返事があったことに驚いた。

声のほうに目を向けると、そこには縁側に腰かけてこちらを見る一人の少女がいた。

桃色の着物に身を包み、腰まで伸びる長い黒髪。

かけられた声もずっと聞いていたくなるほどの心地よさを感じる。

一度いると認識すると、視線を外すことをためらってしまうほどの絶世の美少女だ。

「ん、どうしたの？」

少女も自分の美貌に自信があるのか、挑戦的な笑みを浮かべてこちらを見る。

「どうもしてないさ。永琳さんの強さと自分の力不足を痛感してただけだよ」
その顔を見てようやく正気を取り戻した僕はそう返す。

「結構強いほうだと思いうわよ、あの永琳に近づけたんだから。いろんな戦い方をしていて見てて飽きなかったし。他にも何かできるの？」

「どうだろうね。どう思う？」

さっきのお返しとばかりにこちらも挑戦的な笑みを浮かべてそう混ぜ返す。

僕のその返答が意外だったのか、少女は一度驚いた表情を浮かべた後、今度は静かにほほ笑んだ。

「私は蓬莱山 輝夜よ。あなたは？」

「僕は龍導院 静也。輝夜か。竹取物語と同じ名前、この場所にぴったりの名前だね」

「それはそうよ。だって私本人だもの」

「なるほど。僕がこの場所から感じていたものは間違つてなかったわけだ」

「・・・疑わないの？」

「幻想郷がどういった場所なのかっていうのはそれなりに理解しているつもりだ。今更月に帰ったはずのかぐや姫が目の前に現れたって驚かないし、疑わないよ。それに納得もしている。あのかぐや姫なら、その美貌にも説明がつくからね」

僕のその言葉に、輝夜は刺すような視線を向ける。

うーん、美貌なんて言ったのがまずかったかな？

「疑いなさいよ！それで私がいろいろと質問に答えていつて、本人だつて確信した時の驚いた表情が面白いのに！初めから納得されたら面白くないじゃない！」

「・・・は？」

思わず間の抜けた声が出てしまった。

さつきまでは物語のようにお嬢様然とした態度だつただけに、この突然の変わりように驚いてしまったんだ。

「・・・なによ？」

「いや、ちよつと驚いただけだよ。そつちが素なのかな？」

「そうよ。幻滅した？」

「そんなことはないさ。本当に驚いただけだよ」

輝夜はそれから少しの間不満げな目で僕を見た後、また笑顔に戻ってくれた。

「まあいいわ。ねえ、もつと静也のこと教えてよ。あなたに興味がいちやつた」

「かぐや姫に興味を持っていただけなんて光栄だな。でも、僕はそれほど誇れるような人間じゃないよ」

「それは私が決めることよ。ほらほら、何でもいいから話しなさいつて！」

輝夜が身乗り出してくる。

そのきれいな顔が急に目の前に来るもんだから、思わず身を引いてしまった。それを見て、また輝夜の顔が曇る。

「なんで逃げるのよ」

「いや、急だったものだから。ふふっ」

僕は思わず笑ってしまった。

そのころころと変わる表情を見ていると、失礼だと分かっただけでもつい可笑しくなってしまうんだ。

「ごめん。そうだね、僕は外来人で・・・」

「静也さん!!」

僕が語り始めようとした、部屋の襖が開き鈴仙が姿を現した。

キラキラと輝くその瞳を見て、今日の僕は厄日なのだと悟った。

第40話 龍と兎の跳舞

「準備は良いかしら？」

「私は大丈夫です」

永琳さんの問いに自分の銃を見ていた鈴仙がそう返す。

「僕も大丈夫です」

場所は永琳さんと戦ったのと同じ場所。

その場所で今度は僕と鈴仙が向かい合って立っている。

この場にいるのはさつきと同じメンバー。

ただし今度は輝夜も部屋から出て来て縁側に座っている。

「がんばなさいイナバ。静也の秘密を暴いてやりなさい！」

輝夜の言葉に鈴仙は微かにうなずいた。

なぜこうなった？

僕は夜桜に手をかけながらついさつきのことを思い出す。

僕と輝夜が話している場所に戻ってきた鈴仙は開口一番僕に手合わせを申し込んで

きた。

最初は断つただけで、輝夜までもが後押しし始めた。

永琳さんとの戦いで霊力を消費したから、と説得しようとしたのだけど、その答えが分かつていたかのように一本の瓶を手渡された。

半ば無理やりその瓶の中身を飲まされた後、確かに僕の霊力はあらかた回復していた。

なんでも永琳さんが急遽作つたらしい。

瓶の中身が気になつたけど、怖くて聞けなかった。

まあ、何かあつたら木龍が何とかしてくれるだろう。

そうして今に至る。

はあ、ここまで御膳立てされてしまったらもうやるしかないだろう。

それに僕が鈴仙に対して感じているこの不思議な感覚も、手合わせを通して分かるかもしれない。

僕は改めて鈴仙を見る。

助けたときも見たけど、鈴仙は両手に銃を持って構えている。

いわゆる二丁拳銃だ。

外見はグロックに似ている。

けれどもそうだと断定することもできない。

とは言え、形状が似ているのならグロックと違って対処したほうがいいだろう。グロックの装填数は15発。

その前後がりロードタイミングだと考える。

そのタイミングで一気に距離を詰める。

「龍導流剣術皆伝 龍導院 静也。参る」

「・・・始め!!」

永琳さんの合図とともに僕は身構える。

左右どちらから発砲されても対処できるようにだ。

けれどもそれがかえって仇となった。

僕の見つめる先で鈴仙が駆け出した。

あまりにも予想外の行動に反応が遅れる。

やはり兎だからだろうか。

その瞬発力はすさまじいもので、一瞬のうちに懐に潜り込まれてしまった。

「はっ!」

そのまま右足を振り抜く。

「くっ!」

とつさに夜桜を鞘に入れたまま構えることで何とかその一撃を受け止めた。

僕に余裕があつたのなら、女の子がスカートのまま足を上げるんじゃない！、なんて言えたのかもしれない。

だが生憎とそんな余裕はない。

鈴仙は僕が受け止めると同時に今度は右足を軸に左足で裏蹴りを放ってくる。

これは受け止められないと感じ、懐に忍ばせている札に靈力を流して発動させる。

それにより少しバックステップをすることで何とか躲した。

だがそれで終わりじゃない。

鈴仙はすでにこちらに向けて銃を構えているからだ。

乾いた音と共に撃ちだされる一発の弾丸。

これを避けるのは不可能だ。

「くっ！風龍！」

風龍の加護を受けると同時に横向きの強風が吹く。

その程度で止めることはできないが、軌道をずらすことはできた。

「へえ、あれが静世の最後の手札ってわけね」

輝夜のつぶやきが耳に入る。

幻想郷だから、無意識のうちに距離を取って戦うと思ひ込んでいた。

鈴仙が得意にしているのは二丁拳銃なんかじゃない、射撃混合格闘術だ！

この一瞬のやり取りで僕の手札を全て使わされた。驚愕と同時に思い込みの恐ろしさを改めて実感した。

「どうしたんですか静也さん、防戦一方ですよ!!」

鈴仙は風を警戒したのか、再び距離を詰めてくると右足を振り上げて僕の顎を狙ってくる。

だが僕だつてやられてばかりではいけない。

ここまで来たらもはや出し惜しみをする必要はない。

鈴仙に合わせ左足を振り抜く。

互いの足がぶつかり合いその衝撃でわずかに距離が離れる。

「我が身に宿れ、金龍！」

(了解です)

金龍の加護を受け、取り出した空虚に靈力を流す。

空虚が形を変え、大口径のものに変化する。

そう、リボルバーだ。

鈴仙に勝つにはあの機動力を奪う必要がある。

これならば連射力は落ちるが、威力が高くなった分大きく回避行動をとる必要があるはずだ。

すでに足に力を込めている鈴仙に銃口を向け引き金を引く。

鈴仙のものとは違う重い音を響かせ撃ちだされた弾丸だったが、鈴仙は目を細めた後最小限の動きで回避した。

そしてお返しとばかりに二発の弾丸を放ってくる。

「我が身に宿れ、水龍！」

(御心のままに)

水龍の加護を受けたことで強化された感覚によって弾道がはつきりと見える。

「はっ!!」

右から近づく弾丸を夜桜で切り裂く。

だが、視えることと体がついてくることは別だ。

それに気づいたのかどうかは分からないが、鈴仙は連続で引き金を引き四発の弾丸を放ってくる。

しかもそれは別々の弾道を描いており、急所こそ外れているもののどれかを切れれば別のどれかに当たるものだ。

だがそれを逆手に取ることもできる。

「風龍！」

再び発生した風。

さつきとは違い今度のは乱気流で全ての弾丸は僕を避けるかのように逸れて行った。

「本当に何でもありませんね。どう攻めていいのかわからなくなってしまう。それは能力ですか？」

鈴仙が銃を下げて聞いてくる。

最初から激しく動いていた鈴仙は僅かに肩で息をしていて体力を消費しているのが分かる。

これで有利になったかというところでもない。

僕は体力こそそこまで失っていないが、その代わり霊力を大きく失った。

「正確には違うけど、似たようなものだね」

「そうですか。なら、ここからは私も能力を使わせてもらいます！」

そういった鈴仙の瞳が一瞬、怪しく光った気がした。

第41話 赤き幻惑と一筋の煌めき

銃口をこちらに向けた鈴仙が引き金を引く。

能力を使うと言っていたが、それは今までと何も変わらないように思えた。

「水龍！」

水龍の加護を受け夜桜を振り抜く。

この隙に距離を詰めてくるのかとも思ったが、鈴仙は動く気配がない。

夜桜が銃弾とぶつかる。

その瞬間弾丸がまるで残像のようにぶれた後、そのまま貫通した。

「なっ!?!」

右脇腹に走る鋭い痛み。

そこで鈴仙が動き始めた。

痛みに顔をしかめながら、何とか狙いを定め引き金を引く。

しかし、撃ちだされた弾丸は鈴仙を貫通し後ろに抜けて行った。

「はっ!!」

振り上げられた足を回避する手段は僕にはなく、銃弾を受けた場所と寸分違わぬ場所

に鈴仙の右足が突き刺さり、大きく吹き飛ばされた。

視界がかすむ中、夜桜を支えに何とか立ち上がる。

鈴仙の能力は貫通なのか？

空虚を懐に戻し、魂絶を抜く。

鈴仙の能力はまだわからないけど、少なくとも牽制が通用するものじゃないことは分か
かった。

背後に鈴仙の気配を感じる。

「龍導二刀流劍術中伝、『がりゅうれんざん牙龍連斬』！」

夜桜を右から振り抜く。

それはやはり鈴仙を貫通したが、即座に魂絶を振り上げる。

これならどうだ！

しかし魂絶が鈴仙の体に触れると同時に、目の前から鈴仙の姿が消えた。

そして頭の右側に感じる冷たい感触。

「勝負あり、です」

「一見すれば積み状態。でもまだだ！」

再び懐の札に靈力を流し発動させる。

今度は二枚の札だ。

一枚目は最初と同じ急加速。

それにより距離を離そうとするが、当然鈴仙は引き金を引く。

しかしその銃弾は二枚目の札によって張った結界で軌道をそらせる。

とは言え即席で張った結界だ。直撃こそしなかったものの、右肩をかすめて行った。

・・・右腕が満足に使えなくなったか。

「ウソ、あの状況で躲すなんて!？」

てゐの驚きの声が響く。

「さて、次はどう攻めてくる?」

これで札は全部使い切った。

こちらの不利を悟られないようにあえて不敵な笑みを浮かべ鈴仙にそう返す。

驚愕の表情を浮かべていた鈴仙が、僕の言葉に同じように笑った。

「強いですね。静也さん」

それにしても、鈴仙の能力がまるで分らない。

最初は貫通の類なのかとも思ったが、それではさっきの瞬間移動が説明できない。

物をすり抜けたり急に現れたり、まるで蜃気楼のようだ。

・・・蜃気楼・・・幻・・・?

最初に受けた銃弾の軌道を思い出しながら脇腹を確認する。

確かめてみるか。

僕は魂絶を鞘に納めて駆け出す。

鈴仙は当然引き金を引く。

「龍導二刀流劍術中伝、『がりゅうれんざん牙龍連斬』！」

夜桜を横一文字に振り抜く。

それはやはり銃弾を貫通した。

今度は魂絶をまつすぐ振り下ろす。

そして確かな手応えと共に、銃弾が弾かれた。

実際に見えていた場所よりも高い場所で。

「そういうことか」

これで分かった。

鈴仙の能力は幻惑、またはそれに近い何かだ。

鈴仙との距離を詰め、魂絶を鈴仙の首元で止める。

「……引き分けだね」

「……そうですね」

鈴仙の手にはどこから取り出したのか一本のナイフが握られており、僕の胸の前で止められている。

お互いに武器を収めた後、握手を交わした。

「いい試合だった。でも次は負けない」

「私も楽しかったです。またお相手お願いします」

僕は鈴仙から手を離すと、輝夜たちの方に向き直る。

「今日はここで帰ります。いつか・・また来るよ」

いつか来る。

そう言おうとしたんだけど、輝夜からの不機嫌な視線と鈴仙とてゐからの悲しげな視線を感じて言い直した。

僕は皆に背を向けて帰路に就く。

鈴仙に対する不思議な感覚は結局分からなかったけど、手合わせは楽しかった。

今回はそれが分かっただけでも良しとしよう。

思い返せば今日は本当に色々なことがあった。

こんなにも濃厚な日を送ったのは異変の時以来じゃないだろうか。

それにしても、永琳さんには負け、鈴仙には引き分けた。

それにたぶん、輝夜にも勝てないだろう。

思い出しているうちに自分が笑っていることに気付いた。

「僕ももっと精進しないといけないな。そうでないと、師匠と呼び慕ってくれる妖夢に

申し訳が立たない」

（我々も、より主の期待に応えられるように精進いたします）
もちろん、みんなのことも期待してるよ。

さて、急いで帰らないと霊夢に怒られそうだ。

僕は歩く速度を上げた。

第42話 賢者の責任

日が沈んでしばらくたった夜。

とある道場の中に一人の男がいた。

その男は一見すると細身のように見える。

しかし、見るものが見ればその肉体は極限まで速さを求め鍛え上げられたものだと分かるだろう。

男が腰に差した刀に手をかけ、抜くと同時にまっすぐ振り下ろした。

その後も型通りに刀を振るい続ける。

その様は一つの舞踏のように、ある種の美しさを感じるほどのものであった。

男はしばらく刀を振るった後、閉じていた目を開いた。

「そのように隠れていなくとも、視たいのであれば見せてあげますよ」

男が誰もいないはずの道場でつぶやくと、目の前に裂け目が出現し中から一人の女が出てきた。

「私に気付くなんて、流石ね」

「最初から見つけてくれと言わんばかりに妖力を漂わせていたじゃないですか」

男の言葉に女は開いていた扇子を閉じ、軽く頭を下げた。

「数日ぶりですね。龍導院 満茂みちしげさん」

「そうですね。八雲 紫さん」

紫の挨拶に男、龍導院家当主、満茂は僅かに笑みを浮かべてそう答えた。

「それで、あいつらは上手くやっているんですか？」

「はい。幻想郷での生活にもすっかり慣れたようです」

静也達が幻想郷に残る決断をして以来、紫はこうして定期的に静也達の動向を満茂に報告していた。

それが不慮の事故とはいえ、関係のない少年たちを巻き込んだせめてもの償いだと思っている。

「せめて愛花を連れて行くのはもう少し待つてほしかったですな。おかげで誤解されたままではありませんか」

「その点については謝罪を。私の能力の不調の原因が分からない限り、速いに越したことはなかったのです。ご息女には、私の方からきちんと説明をしておきます」

「そうしてくれると助かります」

紫はここ数日の静也達の動向を満茂に伝えた。

いつものように時に笑顔を浮かべ、時に苦笑いを浮かべてた満茂だったが、宴会の話

を聞いたあたりから表情が消えた。

「以上が、ここ数日の静也達の動向です」

いつもならすぐさま帰ってくる言葉が、今日はなかなか返ってこない。

「二つだけ確認させてください。静也は確かに龍導院家当主と、そう名乗ったのですね？」

その瞳はとても同一人物とは思えぬほど鋭く、紫が一瞬怯んだほどだった。

「自分からそう言ったわけではありませんが、愛花がそう言った時に否定はしませんでした」

紫の言葉を聞いた満茂は腰に差した刀を一撫でした後、再び笑みを浮かべた。

「ようやく継ぐ気になったのか、向こうの世界に私が居ないからなのかは分からないが、喜ばしいものだな」

そうこぼした満茂の表情は、子の成長を喜ぶ親の表情であり、同時に弟子の巣立ちを寂しがる師のようなそんな表情を浮かべていた。

紫は満茂のそんな表情を見て、どこか寂しさのようなものを感じるのだった。

「感謝します紫さん。あなたの世界で静也は大きく成長できているみたいだ。もちろん静也だけでなく、愛花や真君も」

「私が言うのもあれですが、心配ではないのですか？」

「心配などしていませんよ。静也あはどうに私など追い越していますし、真君もそう遠くはないでしょう」

満茂は紫に深くお辞儀をした。

「あいつらの事、これからも宜しくお願いします」

「もちろんです。お世話になつて居るのはむしろこちらの方。八雲 紫の名に懸けて、彼らの命は保証します」

「それは嬉しいわね。でも、あまり過保護にならないでくださいね。ある程度の窮地はむしろあの子たちを育てるのですから」

道場に響く第三者の声。

紫はその声の方を向く。

そこには一人の女性がいた。

背中にまで伸びた長い黒髪を持つ長身の女性。

その背には一本の弓を背負い、肩には一羽の鳥が止まっている。

紫はその鳥を見て僅かに目を見開いた。

「初めまして八雲 紫さん。私は龍導院 冬花とうかあの子たちの母です」

「もちろん理解しています。私が手を出すのは真に命の危機にある時だけです」

「それを聞いて安心しました。どうぞあの子たちのことを宜しくお願いします」

「はい。それよりもその鳥、式神ですか？」

「流石ですね。その通りですよ」

「失礼なようですが、陰陽術は失われたはずでは？」

「あの子たちが使えるようになったんですもの。母が使えなくてはかつこ悪いじゃないですか」

「それは答えになっていないのですが、分かりました。今日はここで帰ります。また後日」

「ありがとうございます」

「次はお茶を用意しておきますね」

紫は自身の前にスキマを開くと、その中に消えて行った。

「お帰りなさいませ、紫様」

「藍、私が居ない間何か異常は？」

「特には何も」

「そう。いつ彼らが次の行動を起こすかわからないから、常に細心の注意を払うようにね」

「心得ています」

紫はマヨヒガに帰還すると、藍が持ってきたお茶に口をつけた。

「紫様、一つよろしいですか？」

「なにかしら？」

「なぜあの少年たちにそこまで肩入れされるのですか？無礼を承知で申し上げれば、何の変哲もないただの外来人ではないですか。にも拘らず、常に彼らの身辺を気にかけて、剩え外の世界にまで出かけられるなど。確かに幻想郷（まぼろし）に來た経緯は少々特殊でしたが、それだけではありませんか」

紫は藍の言葉に手にしていた湯呑を置いた。

確かに藍の言う通り、ここまで紫が静也達に入れ込む理由は本来無い。

しかし……

「貴方も会えばわかるわ。きつとね」

「……分かりました」

藍は紫の言葉にまだ不安そうな様子だったが、それ以上は追求せず、自身の仕事に戻っていった。

（本当に藍の言う通りだわ。あそこまで本気でこの世界が受け入れられたことが思いのほか嬉しかったようね。私の能力が私でさえも信用できなくなっている。こんなこと

は初めてで、私も動揺していたのかしら？私もまだまだね)

紫は苦笑いを浮かべた。

しかし、この状況を楽しんでいる自分がいることも確かだった。

「紫様、お茶のお替りはいかがですか!？」

藍が立ち去った後、しばらくして橙が急須を持って現れた。

「そうね、頂くわ」

「はい!」

お茶の入れ方は藍に比べればまだまだだが、紫のために働くその様子に紫は柔らかな笑みを浮かべた。

(そういえば、静也は寺子屋で働き始めたのだったわね)

橙を見てそんなことを思い出す紫。

次の瞬間、ニヤリと口元が歪む。

この場に霊夢がいたのなら、また何か悪だくみをしていると断言しただろう。

(ふふ、これから楽しくなりそうね)

第43話 感謝と決意

「今日は何事もなくてよかった」

僕は人里の入り口でそんなことをつぶやいた。

本来なら何も起こらないことの方が当たり前なだけで、最近は何となくあつたからね。

門番に挨拶をして足早に寺子屋に向かう。

慧音さんには本当に申し訳ないことをしたな。

今日はいつても以上に頑張ろう。

「おはようございます」

寺子屋の裏から入って控室に行くと、そこには慧音さんともう一人見たことのない少女がいた。

紫色の髪に袖の長い和服を着た少女だ。

整ったきれいな顔をしているけど、それ以上に触れれば折れてしまいそうなそんな儂い印象を受ける。

「静也、怪我は大丈夫だったのか？」

「はい、何ともありません。ご迷惑をお掛けしてしまつてすみませんでした」

「迷惑なんかではないさ。むしろ礼を言わせてくれ。あの娘達を救つてくれてありがとう」

「慧音さん、こちらの方が？」

「そうだ。静也、紹介しよう。こちらは稗田 阿求。稗田家の現当主だ」

「初めまして。稗田 阿求と申します。よろしくお願ひします」

「龍導院 静也です。こちらこそよろしくお願ひします」

お互いに頭を下げて挨拶をするけど、心の中では変な緊張感に包まれていた。

元々僕が情報収集をしようとしていた中で、一番難しいと思われていた稗田家。

その当主が目の前のいるのだ。

これからの対応で情報の閲覧許可が出るか、接触不可になる。

やり取りは慎重にやらないといけない。

「何か僕に御用ですか？」

「はい。私が幻想郷縁起を編集していることはご存知ですか？」

「霊夢から聞きました」

「それなら話は早いです。その幻想郷縁起に静也さんと真さんと愛花さんのことを書かせて頂きたいのです」

「僕たちのことを？なぜですか？」

「前回の黒霧の変を解決したのは静也さん達だと聞いています。それだけの実績があるのですから、ぜひとも書かせて頂きたいのです」

こればかりは驚いた。

僕が見たいと思っていた書物に僕たちのことが書かれる。

これは大きなチャンスだ。

交渉次第では見せてもらえるかもしれない。

「真達にも確認を取らないといけません、僕は構いません」

僕がそう言うと、阿求は笑顔を浮かべた。

「そうですか、ありがとうございます。それでは、明日私の屋敷まで来ていただけますか？」

「分かりました。伺います」

「それでは慧音さん、お邪魔しました」

「いえいえ、いつでも来てください」

阿求は慧音さんにお礼を言うのと家に帰っていった。

僕が改めて慧音さんにお礼を言おうと振り返ったとき、控えめに襖が開く音がした。

阿求が何か忘れ物をしたのかと思いい振り返ってみると、そこにはミステリアを先頭に

いつもの4人が立っていた。

「どうしたの、みんな？」

「静也、昨日はありがとう。これ、お礼にみんなで作ったの」

ミステイアが取り出したのは小さな花束だった。

不思議なことに、どの部分を誰が作ったのか、何となく分かる。

「お礼なんていいのに。僕は当たり前のことをしただけだよ」

「静也先生にとってはそうでも、私たちにはそうじゃないんです」

「静也に助けてもらうのはもう何回目になるかわからないね。今までの分も込めてだ

よ」

「あたいは最強だけど、静也は二番目ぐらいだと思うの」

ルーミア達の言葉に嬉しくなる。

そして改めて実感する。

やっぱり、幻想郷は僕が願っていた世界なんだって。

「静也が来てくれなかったら、私はここにはいないと思うの。本当にありがとう」

そう言つてミステイアが花束差し出してくる。

僕はそれを受け取る。

「友達の為に自分を犠牲にしてまでも守ろうとしたミステイアは立派だよ。でも、自分

の身も大切にね」

「うん。だって死んじやったら、もう静也に会えなくなるもんね」

冗談なのか、そんなことを言うミスティア。

その頬はほんのりと赤くなっている。

恥ずかしいなら言わなければいいのに。

「それとね、私からはもう一つあるの」

ミスティアが取り出したのは一枚の紙。

それには丁寧な字で”割引券”と書かれている。

「精一杯おもてなしするから、絶対来てね」

ミスティアが屋台をしているのは聞いていた。

たぶんそのことを言っているんだらう。

「必ず行くよ。真と愛花もつれてね」

しゃがんでミスティアの頭をなでる。

すると恥ずかしさに耐えられなくなったのか、部屋を飛び出してしまった。

ルーミアとチルノも苦笑いをこぼして後を追いかけて行った。

「あの、静也先生」

大妖精も顔を真っ赤にさせて何かを言おうとしている。

「わ、私も先生と会えなくなるのは寂しいです！」

それを叫ぶと3人の後を追っていった。

「静也、私からも改めて言わせてくれ。ありがとう」

「慧音さん、これからも何かあれば僕は必ず守って見せます。ここはもう、僕が守りたい場所だから」

「それを聞けて嬉しいよ。ミスティアもまだ立ち直っていないだろうから、今日は予定を変更して私が先に授業をしようか？」

「そうですね。お願いします」

慧音さんは教材を持つと教室へと向かっていった。

僕は今日の内容に改めて目を通していたんだけど、襖の外に気配を感じた。

それも、この人里では感じたことのない強い妖力だ。

立ち上がって襖を開けてみると、一人の女性と女の子がいた。

中国の導師のような服に、金色の髪をした女性。

けれどそれ以上に目に入るのは、九つに分かれたそのしっぽ。

九尾、なのか？

女の子の方も金髪であり、どこことなく紫さんと似た雰囲気を感じる。

「君が龍導院 静也か」

「僕のことを知っているのですか？どこかでお会いしましたっけ？」

「いや、私が一方的に知っているだけだ。私は八雲 藍。紫様の式だ」

「ああ、あなたが。よく橙から話を聞いていますよ」

「今日はこちらにもう一人通わせたいと思つてな」

藍さんの言葉に女の子が一步前に出た。

「初めまして、静也先生。私は藤と申します。よろしくお願いいたします」

藤、藤色の事か。

藤色は若紫色ともいわれる色であり、紫さんの面影を感じるこの娘にはぴったりの名前かもしれない。

「よろしく。藤を通わせたいとのことですが、慧音さんには？」

「すでに伝えてある。何やら忙しそうだったので遠慮してたのだ」

「そうですか。分かりました。それではきょうしつにあんないしますね」

「よろしく頼む。私は紫様の所に帰るとしよう」

藍さんは藤に一度視線を向けた後、部屋を後にした。

「それじゃあ藤、僕についていてくれるかい？」

「分かりましたわ。それでは先生。はい」

そう言つて右手を差し出す藤。

僕は苦笑いをこぼしてその手を握った。

「これから楽しみですわ。本当に楽しみ」

なぜだか知らないけど、藤のその言葉に、僕は寒気を感じた。

第44話 龍の心に触れる者

「随分と豪華な屋敷だな」

俺が目の前にある屋敷を見て最初につぶやいた言葉がそれだった。

確かに紅魔館に比べると一歩劣りはするが、人里にあるということを考えて一番と言っているだろう。

霊夢の博麗神社はもちろんのこと、白玉楼と同等かそれ以上だろう。

「この屋敷を見てみると、実家のことを思い出すな」

静也の言葉に比較してみると、確かに面影を感じる。

屋敷の隣に道場をつけると完璧かもしれない。

「大丈夫だとは思うけど、今回の目的を忘れてないよね？」

愛花がこちらの顔を覗き込んでくる。

俺は少し呆れた表情を浮かべてその目を見返す。

「当たり前だ。稗田家の人間との友好関係の構築。そして可能なら幻想郷縁起の閲覧申

請だよな？」

後半の言葉は静也の方を見ながら話す。

静也もこちらに向き直って頷いた。

「行こう」

正門までたどり着くと、そこには二人の門番らしき男がいた。

「ほう、こここの門番はちゃんと起きてるんだな」

「本人の尊厳のために一応言っておくけど、門番としての仕事はちゃんとしてるからね」

俺が少し意地悪くつぶやいた言葉に、愛花は目をそらして答えた。

「龍導院 静也です。稗田さんにお話が合つてきました」

「お話は伺っております。少しお待ちください」

そう言つて片方が屋敷の中に入っていった。

今度は執事あたりでも出てくるのかね？

「そういえば、メイド服は着てこなかったんだな」

今日の愛花は幻想入りした時とは違う洋服を着ている。

仕事柄常に服を着ていないといけないイメージがあつたからな。

「流石に外に行くのにメイド服は着ないよ。まあ、咲夜さんはいつもあの服らしいけど」

「レベルたけえな。さすがだぜメイド長」

「お待たせしました。ようこそ稗田家へ。静也さん、真さん、愛花さん」

「こんにちは阿求。約束通り来たよ」

聞こえてきた声に視線を前に戻すと、愛花と同じ背格好の少女が立っていた。

静也に聞いてはいたが、本当に傍げだな。

霊夢や魔理沙が力強く咲くひまわりなら、阿求は刹那の間に全ての美しさを輝かせる桜のようだ。

目を離せば散ってしまうんじゃないか。

そんな思いに駆られてしまう。

「当主自らがお出迎えしてくれるんだ」

「お願いしたのはこちらですから。当然です」

「それではご案内いたします。ついてきてください」

俺たちは阿求の後について屋敷の中に入っていった。

縁側に差し掛かった時、威勢のいい声が聞こえてきた。

そこでは若い男たちが槍を振るっていた。

「稽古中か」

「真から見ると、やつぱりいろいろ言いたいことが有るのかな？」

「そういううお前こそ、そわそわしてるぞ」

「二人とも、目的を忘れないで！」

愛花にたしなめられて俺と静也は同時に肩をすくめた。

「どうぞ、お掛け下さい」

阿求に案内されたのはいかにも執務室といった部屋だった。簡素な机に筆と墨だけが置かれている。

そして、部屋の隅には・・・あつた。

俺達の目的である幻想郷縁起がずらりと並んでいる。

あれを見られるかどうかでこれからの動きが変わる。

「それでは、まずは静也さんからお話を聞かせてください」

「僕は・・・」

それから阿求は静也に対していろいろな質問をしていった。

この世界に來た理由。

静也の能力や戦闘スタイル。

そして、静也の戦う理由。

「守るため、ですか？」

「そう、僕は守るために戦う。でも勘違いして欲しくないのは、僕は決して聖人君主なんかじゃない。僕が守るのは、僕が守りたいと思つた人達だけ。守りたいと思つた場所だけだ」

「そうですか。では静也さん」

阿求はそこで筆を置いて静也に目を向けた。

「人里は貴方にとつて、守りたい場所ですか？」

これには驚いた。

確かに名家だとは思っていたが、治安にまで気をかけているとは思っていなかった。

ここだ。

阿求との関係はこの回答で決まる。

隣で愛花が膝の上に置いていた手を握りしめたのが分かる。

ここでそうだと言うのは簡単だろう。

だが、それは正解じゃない。

「はつきり言つて、まだそこには至っていない」

静也の返答に、悲しげな顔を浮かべる阿求。

「でも、守りたいと思えるものはある。寺子屋やよく行く甘味屋、他にもたくさんある。

そこは、守りたいと思う」

阿求は驚いた表情を浮かべた後、微笑を浮かべた。

「そうですか。良かったです」

「静也にとつての守りたいものは、俺にとつても守りたいものだ」

「もちろん、私にとってもね」

俺たちの言葉に阿求は何も答えなかったが、確かな手ごたえがあった。

「それでは、次は真さんの話を聞かせてください」

「そうだな。俺は・・・」

分かつてるぜ静也。

阿求も、お前にとつて守りたいものになつたんだらう？

閑話 龍を綴る書

「今日は良い一日でした」

私は机の上に置いてある湯呑に手を伸ばしながらつぶやく。

「静也さん、真さん、愛花さん。皆さん良い人で良かったです」

私は今書き上げたばかりの幻想郷縁起に目を落とす。

” 守護を司りし黒き龍帝”

龍導院 静也

能力 願いをかなえる程度の能力

危険度 極高

人間友好度 極高

主な活動場所 博麗神社周辺、寺子屋

近頃人里で見慣れない黒い着物に、刀を差した人物を目撃してはいないだろうか。

その人物はおそらく龍導院 静也だろう。

不慮の事故により幻想入りを果たした外来人だ。

博麗神社で居候をしており、寺子屋の教師をしている。

教師をしている理由を聞いたところ、なんでも道具屋の店主にツケが有るらしい。

静也の能力は願いをかなえる程度の能力という一見すると八雲 紫に匹敵する強力な能力に見えるが、この世界の理を覆すことはできない（昼を夜に変えるなど）ため、実際はそれほどではない。

しかし、剣術に関しては魂魄 妖夢を越えるほどの実力を持つ。

静也は龍導院家の当主であり、龍導院家は龍導流と言われる武術を習得している。

静也は龍導流剣術の皆伝である。

龍導流は他者を守ることに特化した流派であり、一対多の戦闘を得意とする。

龍導流において皆伝となるための条件は特殊であり、己だけが操ることのできる武術を見に着けることで初めて皆伝となる。

静也は龍導複製龍剣術と名付けている武術を習得している。

それは刀だけでなく、銃と呼ばれる不思議な武器を同時に操る。

静也は八雲 紫から直接武器を渡されており、左の腰にさしている黒い刀身を持つ方を冥刀『夜桜』。

右の腰に差している白銀の刀身を持つ方を妖刀『魂絶』。

懐の中に入れてある銃を紫銃『空虚』と名付けている。

身長は人里の平均よりも高めだが、本人曰く外の世界では平均的らしい。

静也は基本的に全ての者に対して寛容であり友好的だ。

しかしそれは静也にとつての他人である証拠だ。

静也は自身が守りたいと思つたものを必ず守ろうとする。

静也の守りたいものを傷つけようとするものは例外なく“敵”として認識される。

静也は敵として認識したのものには一切の躊躇をすることなく排除しようとする。

それに例外は存在しない。

目撃報告例

・ 本当に良い奴だよ。あいつの為なら世界を渡ることを躊躇わない程度にわな。この世界なら大丈夫だとは思うが、龍の逆鱗に触れるやつがないことを祈るよ。

(黒髪の槍使い)

・ 世界で一番かつこよくて、世界で一番強い自慢のお兄ちゃんだよ。

(桃守龍)

・ 楽しい奴だぜ。関わつてると飽きない。

(普通の魔法使い)

・ 早く帰ってきて夕飯を作つてほしいわ。

(楽園の素敵な巫女)

対策

静也への対策はただ一つ、彼の守護対象者に危害を加えないことである。

肉体的、精神的を問わずに危害を加えれば必ず静也はその者を排除する。

静也から敵として認識されたのならば、諦めるしかないだろう。

或いは危害を加えたことを必死に誤ればもしかしたら許してくれるかもしれない。

望み薄ではあると思うが。

しかし、友好度は非常に高いため、静也と交流を深めて行けばいずれ護衛対象として認識されるかもしれない。

” 亡霊達の相談役 ”

篠宮 真

能力 感覚を操る程度の能力

危険度 高

人間友好度 高

主な活動場所 白玉楼、博麗神社周辺

静也と一緒にいる黒髪の少年を見かけたことはないだろうか。

その人物は篠宮 真で間違いないだろう。

幻想入りを果たした静也の後を追い八雲 紫の手引きによって幻想入りを果たした外来人だ。

白玉楼で居候をしており、白玉楼で人魂相手のカウンセラーをしている。

本来人魂と意思の疎通を行うことはできないのだが、真は能力を使うことによってそれを可能にしている。

真の能力は感覚を操る程度の能力であり、戦闘時には自身の五感を強化することでも有利に立つ。

幻想入り当初記憶を失っていた静也をこの能力を使い記憶を取り戻させたそうだ。

真は篠宮流槍術を習得しており、階級は目録である。

篠宮流槍術と言ってはいるが、実際は龍導流槍術である。

真は龍導院家に正式に入門したわけではなく、静也から個人的に教わっただけなのでそう名乗っている。

真はまだ自分だけの戦い方を見つけられていないため、目録である。

しかし実力は高く、外来人の中では静也に次ぐ実力を持つ。

真も紫から武器を受け取っており、『イモータルランス』と名付けている。

身長は静也よりも頭一つ分高い。

真も静也と同じうように基本的には友好的だ。

真も龍導流の使い手であるため、守ることを信条に戦闘を行う。

しかし真は静也と違い自身と友好関係を築いたものを守るのではなく、静也や愛花などの身近な人物を守ろうとする。

だからと言って守護対象が少ないかというところではなく、静也や愛花が守りたいと思っただけのものを真も共に守る。

目撃報告

・最高の親友で、昔からの悪友だ。今まで何度助けてもらったかわからない。

(黒龍帝)

・まあ、古い付き合いだからね。お兄ちゃんの次くらいには認めてるかな。すぐに調子に乗る悪い癖は相変わらずだけど。

(桃守龍)

・いつも手合わせしていただいて感謝しています。いつか超えて見せます！

(白玉楼の庭師)

・料理の腕も静也に習ってくれないかしら。

(白玉楼の主)

対策

真も対策方法は基本的には静也と同じだ。

しかし真は静也と比べ守護対象が分かりにくい。

そして静也や愛花の守護対象に危害を加えた場合、真も一緒に排除に現れるだろう。

この二人を相手に無事で切り抜けることは非常に難しいだろう。

” 森羅万象を見つめし桃守龍 ”

龍導院 愛花

能力 想いを力に変える程度の能力

危険度 高

人間友好度 中

主な活動場所 紅魔館、静也の周辺

静也の近くで静也とよく似た黒髪の小柄な少女を見かけることがあるかもしれない。

その人物こそが龍導院 愛花である。

愛花は静也よりも二つ年下の妹である。

愛花は静也に対してとても深い愛情を持っており（外の世界ではブラコンと言うらしい）、

静也が幻想入りを果たして憔悴していたところを八雲 紫の導きで幻想入りを果たした。

愛花は紅魔館で主の妹の専属メイドとして働いている。

愛花はそのことに関して紅魔館の主の何らかの思惑を感じているらしいが、今のところそれについては不明である。

愛花の能力は想いを力に変える程度の能力であり、付近に憎しみであれ愛情であれ、何かしらの感情を抱いている人物がいると、その思いの強さによって身体能力や霊力が強化される。

戦闘という一点においていえば非常に強力な能力であるといえるだろう。

愛花は龍導流弓術の皆伝である。

また、静也の妹であるため龍導院家の次席である。

愛花は龍導連翼流弓術を習得したことで皆伝となった。

それはあらゆる行動を次の行動に繋げ、その状況にあった武器へ即座に切り替える。

全ての武具を使いこなすという龍導流の強みを最大限生かす戦い方である。

愛花は相手の挙動から次の行動を予測する鋭い観察眼を持っており、桃守龍の他に龍眼の弓兵と言う二つ名も持っている。

愛花も特別な武器を所持しており、青龍弓『朧月』と名付けている。

身長は実年齢からすると非常に小さく、愛花にそのことを告げると激怒するため注意が必要だ。

愛花も表面上は友好的に接するが、あまり他人に興味はない。

目撃報告

・自慢の妹だよ。ただ、そろそろ兄離れをしてくれると嬉しいかな。

(黒龍帝)

・顔はいいんだが、中身がな。まあ、それも含めてあいづらいか。

(黒髪の槍使い)

・私にもお姉さまにとっての咲夜みたいな存在ができて嬉しい!!

(悪魔の妹)

・愛花が家に来て来てくれて感謝しているわ。ええ、本当にね。

(紅魔館の主)

対策

愛花の対策は非常に簡単だ。

それは静也に危害を加えないこと。

龍導流の使い手であるため守ることを信念に戦っているが、愛花はその思いを静也に向けている。

静也が誰かを守るために戦うときは参戦するが、いざというときは他の者を見捨てても静也を守ろうとするだろう。

しかし、守護対象が一人であるがために、静也に危害を加えた際は静也以上の修羅となるだろう。

第4章 風のたどり着く場所

第45話 黒き羽のもたらすもの

微かに光の差し込む部屋の中で、特にやることのない私はぼーつと天井を見ていた。

次はどんな記事を書こうか？そんなことを考えながら。

すると、扉の開く音とともに、まぶしい日の光が差し込んできた。

久々に感じる太陽に目の慣れていない私は、目を細めた。

「時間です。外に出ていいですよ」

見張り役だった白狼天狗にそう告げられて、私はようやく一月経ったことを知った。

外に出て私が最初にしたことは、大きく背伸びをすること。

日の射さない部屋だと、気分まで暗くなってしまいましたからね。

「やつと外に出られました。しかし、この程度で私の情熱を止めることはできません！

私の感覚が正しければ、異変が起きていたはず。いぎ、突撃取材です!!」

私は大きく羽を伸ばし、博麗神社へと飛び立った。

「よろしかったのですか？あの程度の罰で」

解放されると同時に飛んでいく元気なアイツの姿を見ていると、隣で側近がそう問いかけてきた。

確かに、上下関係が絶対の天狗社会において、ルールを破った者に軟禁一月というのは軽かったかもしれない。だが・・・

「私は少し嬉しかったのだよ。この数十年、私に挑もうという者はめつきりいなくなっってしまった。それを不法侵入とはいえ、あの者はルールを破ったのだ。だからこれは、ちよつとした礼のようなものさ」

私の言葉に、側近は少し複雑そうな顔を浮かべた。

「しかし、これで秩序が乱れるようでは・・・!?」

側近の言葉は途中で止まった。

私が浮かべた笑みを見たからだろう。

「その時は、誰が上なのか教えてやるさ。二度と忘れられないほどにな」
誰か、私に挑むものはいないものか。

「今日の鍛錬はここまでにしよう。おつかれ」

「はい、ありがとうございます！」

私は師匠に大きく頭を下げた。

近頃は師匠もたくさん技術を教えてくださり、私は大きく成長できている実感を感じるとともに、師匠が私を信用してくれているんだという喜びを感じる。

「妖夢も随分と成長したね。そろそろ一刀流に関しては中伝を教え始めてもいいかもしれないな」

「本当ですか！やった!!」

私は思わず飛び上がりそうになるほど嬉しくなった。

中伝。

皆伝にはまだまだ遠いけど、いつか愛花さんに認めてもらうためにも、頑張らなければ！

でも、師匠に触れあっていけばいくほど、師匠の偉大さを痛感するばかりだ。

この程度の腕でいい気になっていた昔の自分が恥ずかしいです。

そういえば、この間の修行の時師匠は随分と気合が入っていたように感じた。何かあったんでしょうか？

私としては嬉しかったですが、師匠は大丈夫だったのででしょうか？
何かあったのかすら聞けない自分が悔しい。

師匠に恩を返すためにも、強くなりたいです。

「さて、博麗神社によって行くよね？ 昼ご飯を作るよ。もちろん、幽々子さんの分も」
「はい。幽々子様も喜びます」

私と師匠は並んで博麗神社に向かう。

私も師匠に倣って最近はなるべく歩くようにしている。

博麗神社の鳥居が見えてきたあたりで、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

そういうえば、前回の宴会にはいませんでしたね。

珍しいこともあるものです。

「なんと！では前回の異変はその外来人が解決したというのですか!？」

それにしても、いつもよりもテンションが高い気がします。

私たちの気配に気づいたのか、霊夢さんがこちらを向いて手を振ってきた。

私も手を振り返すとその人、文さんも私たちに気づきました。

「妖夢、知り合い?」

「はい。と言つても、たいいていの人は彼女を知っていると思いますよ。あの人は鴉天狗の射命丸 文さん。文々。新聞を書いているブン屋です」

「へえ、幻想郷にも新聞があつたんだね」

「ただし、まともなことは書かないけどね」

「ひどいです霊夢さん。私そこまでひどくはないですよ!」

「どうだか」

「私つて信用無しですか?! いえ、そんなことより大事なことがありました」

文さんは師匠の目にやってくる、小さく頭を下げた。

「初めまして。伝統の幻想ブン屋。清く正しい射命丸 文と申します! 早速で悪いのですが、取材よろしいですか?!」

よほど興奮しているのか、前のめりになる文さんに少し引き気味の師匠。

本当にどうしたんでしょうか?

「それはいいんだけど、僕もその新聞を読んでもいいかな? できれば定期的に届けてくれると嬉しい」

師匠の言葉に、文さんの動きが止まった。

確か、文さんの新聞つて・・・

「読んで、くれるんですか?!」

「え!? 泣くほど!」

師匠の言葉に目じりに涙を浮かべる文さん。

「幻想郷で新聞を読む奴なんてそうそういないのよ。ていうか静也、本当に読むつもり?」

「もちろんさ。妖夢、なぜだと思う?」

軽い調子で私に聞く師匠。

でもこれは私を試しているはずです!

「情報のためですよね? どんなことでも、何か行動を起こす時は情報が必要。ですよね?」

「その通り。上出来だ」

師匠の期待に応えることができたことにほっと胸をなでおろす。

「では早速。まずは・・・」

思いがけず手に入れることのできた師匠の情報に、私は初めて文さんに感謝した。

第46話 奇跡という名の必然

「信仰を得るためにこの幻想郷に来たものの、なかなか上手くいかないものだな」

私は縁側から見える月を見上げながらそうつぶやいた。

空にはきれいな満月が浮かんでおり、がらにもなく感傷的になつてしまった。

久々に晩酌でもしてみようか？だが一人で飲むのもあれだし、諏訪子でも誘うか。

諏訪子を探して神社の中を歩いていると、襖をわずかに開けて中を覗き見ている諏訪子を見つけた。外の世界なら確実に通報しているな。

「何をやっているんだ、諏訪子？」

「しーっ！神奈子も見てみなよ」

諏訪子に言われた通り私も上からそつと部屋の中を覗き見る。まあ、その先いる人物はわかりきっていることだが当然早苗だ。

だがここからだと何をしているのかよく見えないな。確かに少し様子はおかしいが。

仕方なく襖をもう少し開くと、下から諏訪子に睨まれた。仕方ないだろう、お前と私とでは身長が違うんだ。

諏訪子に対して肩をすくめた後、改めて部屋の中を覗き見る。中では早苗が手に持つ

ている何かをじつと見ている。あれは、髪飾りだな。

「見た？」

「ああ」

諏訪子が外を指すので一つうなずいて二人で廊下に戻る。

「・・・今日でちょうど一年経つんだね」

「信仰の為とはいえ、少女として当たり前前の幸せを私達は早苗から奪ったんだ」

「思いが届くか否か。それさえも許されないもんね」

「私達が早苗を悲しませるようなことがあってはいけない。それがせめてもの罪滅ぼし
だろうな」

「そうだね。それでも、全然足りないだろうけど」

私達は共に月を見上げる。さつきまでは輝いて見えた満月は、今となつては私達を責めているようにしか感じない。感じ方ひとつで、物事というのはここまで変わってしまうんだな。

「晩酌にでも誘おうと思つていたんだが、どうする？」

「・・・私はいいか。今日は早めに寝るとするよ。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

悲しくなってしまうから思い出さないようにしていたのに、近頃はふとした拍子に思い出してしまうことが多くなった。これじゃあ、元気にやっっているって胸を張って言えませんね。

頭に付けた髪飾りに手を触れる。これはあの人がくれた大切なもの。今となつてはこの髪飾りだけが、私とあの人のつながりを感じさせてくれる唯一のもの。

別に諏訪子様と神奈子様を恨んだりなんかしていません。私は今まで二人に数えきれないぐらい助けてもらいました。だから今度は私が二人を助けるんです。きつとあの人も、事情を知っていれば同じことを言ってくれたに違いありません。

ようやく立ち直った私は急いで台所に移動して窯に火を入れる。今日は卵焼きを作ろうかな。私は卵焼きには結構自信があるんです。あの人が教えてくれた料理だから。

「号外ですー！号外ですよー!!」

卵を割っていると外から文さんの元気な声が聞こえてきました。頼んでもないのに持つてくるのは珍しいですね。よほどいい記事が書けたんでしょうか？

「もー、新聞は要らないっていつも言ってるのになー」

外から諏訪子様の声が聞こえてきて、私はついクスリと笑ってしまつた。なんだかんだ言つて、諏訪子様も文さんが持つてきた新聞に目を通すの知ってるんですよ。いえ、文さんの新聞をとというよりは、新聞を読むという行為そのものが習慣化しているんです

よね。あの人のせいで。そういう私もそうなんですけど。

本当に、あの人は数え切れないほどのものを残していったんですから。私だけじゃないで、きつと諏訪子様や神奈子様にも。

「へー、この間の異変の時はそんなことがあつてたんだね」

ほら、読んでるじゃないですか。諏訪子様も素直じゃないですね。

「なるほどね。それで、その外来人っていうのは……ええええええ!!」

突然響いた諏訪子様の叫び声に私は思わず持つていたボールを落としそうになった。何かあつたんでしょか!?

私は手に持つていたものをテーブルの上に置くと急いでキッチンを飛び出した。すると諏訪子様もこちらに向かって駆けてきているのが目に入った。

「諏訪子様、何かあつたんですか!？」

「早苗、いいからこれを見て!!」

諏訪子様が半ば押し付けるように私に向かって手にしていた新聞を広げある一点を指さす。そこに書いてあることを認識したとたん、私は頭の中が真っ白になった。

「どうしたんだ諏訪子、うるさいぞ」

「神奈子も見てよ、ここ!!」

「なになに、黒霧の変を解決したのは外来人だった。その名も……なに!?!これは本当

か!!」

「わからないよ。確かめてみるしかないよ!!」

「そうだな。急いで博麗神社に向かおう!…何をしているんだ早苗、早く行くぞ!!」
放心状態で動けない私の腕を神奈子様がつかむ。それでも私はまだに状況を理解できないでいた。

「仕方ない。諏訪子、反対側を頼む」

「任せて!」

諏訪子様と神奈子様に腕をつかまれて強制的に空を飛ばされた。そんなはずがない。あの人がここにいるはずがないんです。

博麗神社に近づいてきた。縁側からは霊夢さんと魔理沙さんの声が聞こえてきます。そして、もう二度と聞けないと思っていたあの兄妹の声も。

そこまで来て、私はようやく実感することができた。二度と会うことはできないと思っていたあの人が、この世界に来たんだと。私は初めて、自分の能力を心からありがたいと思った。奇跡は、本当にあるんです。

私の変化に気づいたのか、神奈子様と諏訪子様が私の腕を離した。私は、スカートがめくれるのも構わずに全力で走る。

そして鳥居をくぐったところで、ついにあの人の背中が見えた。

私の足音に気づいたのか、その人が後ろを振り向いて私を見て、驚きの表情を浮かべた。私は今、どんな表情をしているんでしょう？

「どうしてここに!?! さな．．．ぐはっ!」

私は速度を落とすことなくその人に胸に飛び込んだ。体格差があるとはいえ、速度の乗った私の突進を受け止めることはできずに、結果的に私が押し倒す形になった。

「会いたかった。本当に会いたかったです」

泣きじゃくる私の頭を、あの頃と何も変わらない優しい笑顔で撫でてくれる。それがあまりにも嬉しくて、私はさらに泣いてしまいます。

「久しぶりだね、早苗」

「はい。お久しぶりです、先輩」

第47話 龍を愛せし静風

自分が普通じゃないと気づいたのはいつだったのだろうか。今となってははつきりと覚えてないけど、少なくとも遅すぎたということだけは覚えている。

「私には神様の友達がいるんだよ！」

私にとっては普通のことと、周りもそうなんだと思っていた。でもそんなことはなくて、いつしか私は孤立していった。

「東風谷 早苗は頭がおかしい」

「東風谷 早苗には関わらないほうがいい」

中学生になったころには仲の良かった友達もそう言っただけで離れていった。最初のころこそ訳が分からなかったけど、分かった時には周囲に誰もいなくなっていた。でも神奈子様や諏訪子様、それに両親に心配をかけたくなかった私はそれを必死に隠した。私がい慢すればいいんだ。そう思っていた。

そんな状況の中、私は必死に勉強した。他にすることが無かったし、少し離れた一番偏差値の高い高校に行けば、私を知る人は少なくともやり直せると思った。そして中学時代のほぼすべてを勉強に費やした私は見事に第一志望の高校に受かった。

高校に入学して私の目論見は成功した。私が異常者ということを知る人はほとんどいなくて、初めてクラスに溶け込むことができた。

でも、私は憶病になってしまっていた。確かにクラスの中でよく話をする人はそれなりにできた。でもそこまで。それ以上に踏み込んだ関係、友達になることがどうしてもできなかった。友達になってしまえば、私の秘密がばれてしまうかもしれない。そんなことばかり考えていた。

そんな私にとっての楽しみは、本を読むこととゲームをすること。周りと話을合わせのために流行なんかも一応調べたりはしていたけど、そこまで興味はなかった。どうせ見せる相手なんていないんだから。

そんな生活を続けて半年が過ぎたころ、私は運命に出会った。

その日、私はボーッと考え事をしながら歩いていた。私にとってはよくあることだった。どうやって周りに合わせるべきかを必死に考えて、そんな自分に嫌気がさすところまでがセットだった。

そんな状態でもいつもはきちんと周りが見えていたんだけど、その日は特に自己嫌悪が酷くて、気づいた時には薄暗い路地の中にいた。さすがに危ないと思った私はすぐに表通りに戻ろうとしたけど、すでにガラの悪そうな男たちに囲まれていた。

「君もしかして一人？なら俺たちといっことしない？」

男たちから向けられる視線に私は背筋の震えが止まらなかった。

「急いでいるので、結構です」

そう言つて足早に去ろうとしたけど、私の言葉の何が琴線に触れたのか、男たちの目つきが変わつた。

「少しは勉強ができるからつてお高くつきやがつて、生意気なんだよ!」

正面にいた男が私の手をつかむと、そのまま力任せに押し倒してきた。そして周りにいた男たちも私の体を押さえつけてくる。

「いや、放して!!」

必死に抵抗するけど、特に運動の経験もない私のひ弱な力では大した効果はなく、どんどん制服を脱がされていく。上着をほとんど脱がされたところで、私は抵抗することをやめた。ずっと孤独に耐えてきて、その後も自分の憶病さのせいで誰とも仲良くなれなかった。そして初めては好きな人に。そんな女として当たり前前の思いでさえも踏みにじられそうになり、もう何もかもがどうでもよくなつた

「へへ、そうやつておとなしくしていれば気持ちよくしてやるからよ」

ついに上半身を下着だけにされた私に男の手が伸びる。そしてあと少しで届くというところで、あの人が現れた。

「それは同意の上かい?」

男たちとは別の声に思わず目を向けると、そこには私と同じ制服を着た男の人がいた。ネクタイの色は赤で、一つ上の先輩だつてわかる。

「あ、なんだお前？」

男たちが私から離れてその人の周りに集まっていく。でもその人はじつと私のことを見ている。その瞳を見ていると、自然と言葉が出てきた。

” 助けて ”

私の声は掠れていて聞こえなかったと思う。でもその人は一つ頷くと、男たちに目を向けた。

「無駄だとは思うけど一応聞くね。自首する気は？」

「……ふざけんな!!」

さつきまで私を押さえていた男がその人に向かって殴りかかっている、ほかの男たちも追従していく。私はそのあとに予想できる光景に思わず眼を瞑る。

何度も響く暴力の音。しばらくすると音が止んだから、私は恐る恐る目を開けた。そこには多数の男たちに打ちのめされた先輩ではなく、一人を除いて地面に伸びている男たちだった。

「まだ続けるかい？」

先輩が最後の一人に向かってそう言うと、男は懐からナイフを取り出した。

「死ぬ、クソガキ!!」

危ないと思った。でもなぜだか、心のどこかでは安心している自分がいることに驚いた。あの人なら、何も問題ないように感じたんだ。

先輩は自分の目の前まで迫った男の手をつかむと、私には理解できない動きで男を地面に叩きつけた。

「強姦未遂に殺人未遂。罪が増えてよかったね」

そうつぶやいた先輩は携帯でどこかに電話した後、私の元まで歩いてきて手を差し出した。

「大丈夫? 安心していい。もう安全だから」

私は差し出された手をしばらく眺めた後、先輩の手を取った。

「ありがとうございます。先輩」

そう言つて立ち上がったところで、私は自分の恰好を思い出して急いで服を直した。自分にまだ人並みの羞恥心があつたことに驚いた。

先輩はまだわずかに震えている私のそばにいたけど、何も言わずに佇んでいた。

しばらくすると数台のパトカーがやってきた。先輩はそれを見てから口を開いた。

「後の処理は僕がやっておくから、君は帰っていいよ。一人で帰れる?」

「……大丈夫、一人で帰れます。ありがとうございます」

私は背中を向けて本来の家路についた。最後にかすかに聞こえた声は、先輩とおそらく刑事だと思われる人が気やすそうに話していた声だった。

家に着いた私は食事もそこそこにすぐにベットに横になった。思い出すのはさっきの出来事。私が危なかったところを助けてくれた同じ学校の先輩。恋愛ものの本やゲームではよくあるシチュエーション。でも私の心は揺れ動かなかった。

こんなところでも自分の臆病が現れ、思わず涙が零れそうになる。私の心は、ここまですんでしまったのか。

「私って、なんで生きてるんだろう？」

思わず出てきた言葉に驚いた。だめだ。このままでは本当に超えてはいけない一線を越えてしまいそう。私はそれ以上は何も考えないようにして、眠りについた。

もう一度その先輩を見かけたのは、行きつけのゲームショップだった。

私はその日、予約していたゲームを買った後何か面白いものはないかと店内を回っていた。

「絶対面白いって。やろうぜ静也！」

誰も気にかけないであろう程度の声量で発された言葉。でもなぜか気になってしまい、私はその声のほうに目を向けた。

「5対5で戦うFPSゲームか。確かに面白そうだね」

「ただ問題は人数だな」

「僕と真、愛花はいいとして、あと二人か」

「麗奈もやるだろ。あいつはお前の頼みを断らないからな。まあ、一人ぐらいは野良でも大丈夫なんじゃないか？」

そこには前に助けてもらった先輩が、友達だろう人と一緒にゲームを見ていた。

先輩もゲームが好きなのかな？

今時ゲームが好きなんなんて珍しくはないだろう。それなのに、私はとても気になってしまった。先輩達は手にしていたゲームをそのまま買っていった。

そこまで見て、私は見つからないうちに帰ることにした。

「それ、龍導院先輩だよ。きつと」

次の日、私はクラスメイトに先輩について聞いてみた。先輩という括りはあるものの、一人の人間を探し出すことは難しい。元々まともな答えなど期待してなかったんだけど、すぐさま帰ってきた答えに少し驚いた。

「二つ上の先輩で喧嘩に強くて、一人称が僕。間違いないと思うよ」

「有名な人なの？」

「まあまあかな。知ってる人は知ってるけど、みんなが知ってるわけじゃないからね。確か、龍導流っていう武術を教える道場の長男らしいよ。本人も皆伝なんだって」

「龍導流、聞いたことないな」

「武家の中では結構有名らしいよ。毎年結構な人が入門しようと来るけど、ほとんど門前払いなんだって」

「へえ、そうなんだ」

そこまで話したところで、目の前の少女がにやりと笑った。

「なあに早苗ちゃん、男子には興味ありませんみたいな態度とっておいて、先輩にお熱なの？」

「え？別にそういうわけじゃ・・・」

「みなまで言うな。心配してたけど、早苗ちゃんもちゃんとJKしてるようで安心したよ。任せて、私がセツティングしてあげるから！」

その言葉を置き去りにするようにその子は教室を飛び出していった。・・・休み時間もうすぐ終わるけどいいのかな？

.....

その子がもう一度話しかけてきたのは二日後の放課後だった。その時の彼女はなぜかやり遂げたような表情をしていた。

「フフフ、早苗ちゃん私はやったよ。さあ、今すぐ図書室に行くんだ！」

「急にどうしたの？」

「先輩の友達に聞いたら快く教えてくれたよ。先輩はこの時間、必ず図書室で勉強中だつてさ。話しかけるなら今がチャンスだよ！さあ行つた、行つた!!」

「ちよつと、押さないで!？」

私はその娘にカバンを押し付けられると、教室から強引に追い出された。

「先輩と話すまで帰つちやだめだよ!!」

本当は行きたくはなかつたんだけど、好意をないがしろにするやつ。そんな噂を立てられるのも嫌だったからしぶしぶ行くことにした。図書室の扉を少しだけ開けて中を伺つてみると・・・いた。あの娘の言う通りだ。机の上にノートを広げて勉強をしているのは、紛れもなく私が気になっていた先輩だった。でも、なんて声をかければいいんだろうか？私は本棚の間から先輩を窺つたまま時間だけが過ぎていく。

そうしていると、先輩が広げていた本を閉じて立ち上がった。私は慌てて奥に隠れたんだけど、運が悪いことに先輩が来たのは私が居る本棚だった。

「・・・ん?」

「あ・・・」